

特227

213

入出二門偈戊寅錄

佐々木鐵城述



始



特 227
213



入出二門偈戊寅錄

昭和十三年度安居副講

佐々木鐵城述



入出二門偈頌

愚禿親鸞作

世親菩薩依大乘
一心歸命盡十方
無碍光明大慈悲
觀彼世界無邊際
五者佛法不思議
有二種不思議力
一者業力謂法藏
二者正覺阿彌陀
女人根缺二乘種
如來淨華諸聖衆
諸機本則三三品

修多羅真實功德
不可思議光如來
斯光明即諸佛智
究竟廣大如虛空
此中佛土不思議
斯示安樂之至德
大願業力所成就
法王善力所攝持
安樂淨刹永不生
法藏正覺華化生
今無一二之殊異

同一念佛無別道
觀彼如來本願力
一心專念速滿足
菩薩入出五種門
不可思議兆載劫
何等名爲五念門
云何禮拜身業禮
善巧方便諸群生
卽是名入第一門
云何讚嘆口業讚
依如來光明智相
則斯無碍光如來
是名爲入第二門

猶如淄澠一味也
凡愚遇無空過者
眞實功德大寶海
自利利他行成就
漸次成就五種門
禮讚作願觀察廻
阿彌陀佛正遍知
爲生安樂國意故
亦是名爲入近門
隨順名義稱佛名
欲如實修相應故
攝取選擇本願故
卽獲入大會衆數

云何作願心常願
得入蓮華藏世界
是名爲入第三門
云何觀察智慧觀
修行毗婆舍那故
種種無量法味樂
亦是名爲入屋門
四種成就入功德
第五成就出功德
云何廻向心作願
廻向爲首得成就
生彼土已速疾得
巧方便力成就已

一心專念願生彼
欲如實修奢摩他
亦是名爲入宅門
正念觀彼欲如實
得到彼所則受用
卽是名入第四門
菩薩修行成就者
自利行成就應知
菩薩出第五門者
不捨苦惱一切衆
大悲心故施功德
奢摩他毗婆舍那
入生死蘭煩惱林

示應化身遊神通
即是名出第五門
以本願力迴向故
無碍光佛因地時
菩薩已成智慧心
成就妙樂勝真心
成自利利他功德
婆藪槃頭菩薩論
願力成就名五念
衆生而言言他利
如實修行相應者
以斯信心名一心
不斷煩惱得涅槃

至教化地利群生
入蘭林遊戲地門
利他行成就應知
發斯弘誓建此願
成方便心無障心
速得成就無上道
則是名爲入出門
本師曇鸞和尚釋
佛而言宜言利他
當知今將談佛力
隨順名義與光明
煩惱成就凡夫人
則斯安樂自然德

淤泥華者經說言
卑濕淤泥生蓮華
泥中生佛正覺華
不可思議力即是
道綽和尚解釋曰
起行修道一切衆
在此起心立行者
當今末法是五濁
今時起惡造衆罪
本弘誓願令稱名
是以諸佛勸淨土
三信相應是一心
若不生者無是處

高原陸地不生蓮
此喻凡夫在煩惱
斯示如來本弘誓
入出二門名他力
月藏經言我末法
未有一人獲得者
則此聖道名自力
唯有淨土可通入
恒常如暴風駛雨
是爲穢濁惡衆生
縱令一生造惡業
一心淳心名如實
必得往生安樂國

生死卽是大涅槃
善導和尚義解曰
卽是名爲一乘海
卽是圓教中圓教
眞宗叵遇難得信
釋迦諸佛是眞實
善巧方便令發起
具足煩惱凡夫人
斯人卽非凡數攝
斯信最勝希有人
到安樂土必自然

則易行道名他力
念佛成佛是眞宗
卽是亦名菩提藏
卽是頓教中頓教
難中之難無過斯
慈悲父母以種種
我等無上眞實信
由佛願力獲得信
是人中分陀利華
斯信妙好上上人
卽證法性之常樂

入出一門偈頌 七十四行

入出二門偈戊寅錄

佐々木鐵城

茲に本年度安居副講の命を承け、今偈を講述せんとす。非才淺學の身を以て敢へて命に應ず、慚愧の極みなり。一向に先哲の指南を守りて、祖意を歪曲せざらんことをのみ期す。新説を企てず創見を望まず。解義の至らざるものあらば、幸に大衆同學の叱正指摘を乞ふ。

造由

將さに今偈を伺はんに、先づ初に造由を明し、次に一偈の大意を述べ、次に今偈に於ける五念門の扱方を見、次に題號を釋し、後に正しく文に入りて解釋せん。

造由 之に通別の二由あり。其通由とは宗祖一代の和漢の聖典に通ずる造由なり。謂く知恩報徳の爲とす。蓋し通由全く報恩にありとなすものは、信心爲本の宗義にもとづく一家の別致なり。故に若廣く諸家の著作に對する時は、尙此別由とも云ふべし。今は宗祖選述の中に於て之を謂ふ。故に通由とす。次に別して今此『入出二門偈』を製作し給ふ祖意を伺へば二あり。謂く一に他力の宗

本を顯揚せんが爲なり。二には『淨土論』の蘊奥を啓發せんが爲なり。已下少しく之を述べん。初に他力の宗本を顯揚せんが爲とは、他力とは如來本願の力なり、此本願力を説くを以て一宗の宗致とす。而して其本願を以て一宗の宗致となす本源は是『淨土論』の指南なり。今其『淨土論』によりて宗本を開示せんがために此偈を造り給ふ。抑も如來の本願力は『大經』の宗致にして三部修多羅の眞實なり。其三部修多羅の眞實を開顯するものは實に天親菩薩の『淨土論』なりとす。されば『淨土論』題して「無量壽經優婆提舍願生偈」と云ひ、偈には「我依修多羅、眞實功德相、說願偈總持、與佛教相應」等と頌し給ふ。故に吉水大師は『選擇集』上^三に正明往生淨土の教を指定して三經一論なりとし給ひ『淨土論』を以て三經に組合せ、以て顯眞實の聖典と崇め給ふ。宗祖も亦『正信偈』に天親を讚して「依修多羅顯眞實」等との給ふ。而して其『論』の深義は羊眼を以て知るべからず、其此を完全に開顯するものは實に曇鸞大師の『往生論註』に在り。『論註』上^一に「無量壽經優婆提舍蓋上衍之極致不退之風航者也」と『淨土論』を絶讚し給ひ、次で「無量壽是安樂淨土如來別號釋迦牟尼佛在王舍城及舍衛國於大衆之中說無量壽佛莊嚴功德即以佛名號爲經體」等と云ひ、三經通申三經一致の『論』なることを明し給ひ。如來本願を説くもの三經の宗致にして、其體名號にあることを開顯し給ふ。故に宗祖も『教卷』に之を承けて「是以說如來本願爲經宗致即以佛名號爲經體」との給ふ。又『論註』卷尾には「經始稱如是彰信爲能入末言奉行表服膺事」等と釋し給

ひ。宗祖之を承けて『化卷』本^{二十}に「三經大綱雖有顯彰隱密之義彰信心爲能入故經始稱如是」と云ひ、次に「三經一心之義答竟」との給ふ。されば三經一致の要義たるや實に法に約して云へば本願名號なり、機に約して云へば信心能入なり。而して『論』所明の要義たる他力法義の眼目全く茲にあることは實に『論註』の顯揚に依りて知らるゝ所なり。『正信偈』に天親菩薩を讚して「廣由本願力廻向法是、爲度群生彰一心機是」との給ふもの、全く鸞師の指南に依り給ふ。されば『證卷』終には「論主宣布廣大無碍一心普徧開化雜染堪忍群萌宗師顯示大悲往還廻向慇懃弘宣他利他深義」等と、二祖の相承によりて一宗の要義顯揚さるゝことを仰ぎ給へり。抑も眞宗根本の聖典たる『教行信證』を見るに、宗祖は「謹案淨土眞宗」等と云ひて往還の二廻向を以て、一宗法義の大綱を提出し、其往相廻向より教行信證を開き所明の四法は畢竟他力廻向なることを高調し給ふ。故に『信卷』本^{十六}には、上來所明の行信を結して「爾者若行若信無有一事非阿彌陀如來清淨願心之所廻向成就」等と云ひて、眞宗の法門一として他力ならざるものはなしと結し、『證卷』^五には「夫按眞宗教行信證者如來大悲廻向之利益故若因若果無有一事非阿彌陀如來清淨願心之所廻向成就因淨故果亦淨也應知」とありて、行信因果往還悉く他力廻向なることを結成し給ふ。故に知る本典所明の往還二廻向、教行信證四法凡て之他力廻向の法義なることを。而して斯くの如く『本典』に他力の宗致を顯し本願力廻向に結歸し給ふものは、『論註』下^{三十四}の「然覈求其本阿彌陀如來爲増上緣」等の指

南を相承せるものにして、其『論註』の斯く釋成し給ふ本源は實に『淨土論』にありと云ふべきなり。今此一家所談の他力廻向法義の根本を顯さんとして『二門偈』を造り、以て『論』の大綱を顯出し給へるなり。故に此『二門偈』を以て『本典』を見れば、『本典』に他力を以て一宗の宗致となし給ふもの、是宗祖の私にあらずして、全く天親の『淨土論』こそ其本源たるなりと云ふことを知る。第一由を擧ぐる所以茲にあり。二には『淨土論』の蘊奥を啓發せんが爲とは『淨土論』は全く他力五門の因果を明し給ふにあり。他力の五門なるが故に其體一因一果にして、卽信心の一因を以て菩提の一果をうるに在り。故に法に約して云へば本願名號正定業、機に約して云へば至信心樂願爲因。之他力法門の骨目肝腑なり。而も他力なるが故に一因一果にして速得頓證たるなり。然るに『淨土論』の上に於て五門の因果を明す文相を見るに、因に就ては自力増修、果に就ては漸次成就に似たり。故に此文相に惑ひて自力増修と執じ、漸次成就の果を認むるものあり。此に於て『論』の正意隱さるゝに至る。故に宗祖は鸞師の指南を蒙りて『淨土論』の玄旨を啓發し給ふもの此『二門偈』なり。卽今偈にありては漸修五門を佛邊に約して明し、頓成因果を衆生に施すことを顯示し給ふ。故に『偈』は初に一因一果の略門を明し、其一因一果を本願力を以て結成して、「觀彼如來本願力」等と云ひ、次で「菩薩入出五種門、自利他行成就」等と五門の漸次漸成の相を法藏の所修に約し、廣く五門因果の相を明し。又次に之を本に歸しては「無碍光佛因地時」等との給ふ。

故に知る五因五果は要するに一因一果の體德にして、衆生の修入は正しく一因一果を以て其門戸とすること。之を要するに『淨土論』の綱要は廣大無碍の一心を宣布して雜染堪忍の群萌を開化するものなり。今此『二門偈』を以て『論』を見る時其玄旨茲にあること尅明となる。之第二由を出す所以なり。而して宗祖の此斷案は要するに『論註』の指南に待つなり。『和讃』に「天親菩薩ノミコトヲモ、乃至心行イカテカサトラマシ」とは是其意なり。更らに進んで然らば『論註』は何によりて『淨土論』の奥義他力廻向にあることを知り給ひしやと云ふに、本より一部全體に流るゝ論旨を啓發し給へるものなりと雖も、今文面上に於て着眼點とも見得らるゝ二三を出さば、『論』不虛作住持の偈に「觀佛本願力、遇無空過者、能令速滿足、功德大寶海」とあり。鸞師之を釋して『論註』下_卅に「所言不虛作住持者依本法藏菩薩四十八願今日阿彌陀如來自在神力願以成力就以就願願不徒然力不虛設力願相符畢竟不差故曰成就」との給ふ。又『論』の廻向門の偈に「普共諸衆生」等とあるを『論註』上_{丁三十}に釋して「問曰天親菩薩廻向章中言普共諸衆生往生安樂國此指共何等衆生耶」と問ひ、之を答へて第十七願第十八願成就文を連引して、「案此而言一切外凡夫人皆得往生」と天親下品の凡夫と俱共に淨土願生し給ふもの、全く本願力なればなりとし給ふ。又『論』の淨入願心章に「三種成就願心莊嚴應知」とあるを釋して、『論註』下_{五丁十}に「此三種莊嚴成就由本四十八願等清淨願心之所莊嚴因淨故果淨非無因他因有也」とあるが如き。又『論』の利行滿足章に「菩薩如是修

五門行自利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提」とあるを釋しては、『論註』下^三丁に「問曰有何因緣言速得成就阿耨多羅三藐三菩提」と問ひ、其答に「覈求其本阿彌陀如來爲增上緣」と他力に緣るが故に速得なりと廣く其義を明し、次で第十八願第十一願第二十二願を引證し、次で例を出して自他力の相を示し、「遇哉後之學者聞他力可乘當生信心勿自局分也」と結び給ふ。之等註釋の意を案するに『論』の奧義は佛本願力能く極惡の劣機をして、一念に速かに功德の大寶海を満足せしめ、頓に涅槃の大果を超證せしめ給ふ妙旨を示し給ふにありと伺ひ給ひしものなることを知る。更らに法義の自爾に就て云へば、利行満足章の速得と不虛作の偈の速滿寶海と因果照應して見るに、因の満足既に佛本願力の能令なれば、即果の速得亦佛の本願力に緣ること必然なり。而して其所謂速滿は遇の一念にあり、此一念は即建章の一心歸命なり。然れば則『論』の始は一因を以て起り、其終は一果を以て結ぶ。此一因一果は佛本願力の廻向に依るものなれば、中間の所明たる五因五果豈亦此に外ならんや。五念は一因中の所具の功德にして、五果は一果が上の妙差別にすぎず。而して此五念と五果と各前四門は自利即入門にして第五は利他即出門なれば、要するに入出二門他力廻向とするもの『淨土論』の妙旨なりと謂ふべし。宗祖の製作造由亦複茲にありと伺ふべし。

一 偈の 大旨

宗祖『證卷』^三丁に眞實證果を明し、往還の廻向全く願力他力なることを結し、次で「是以論主宣布廣大無碍一心普徧開化雜染堪忍群萌」等と、天親の一心を鑽仰し給へり。此意を以て見る時は今偈の旨歸は一心の中に二利の功德を總攝して、此心他力廻向、廣大無碍の一心なることを顯すにあり。本と『淨土論』を見るに其所明の要旨は淨土往生の要路を示すにありて、偈と長行とを以て一論を組織せり。其中偈は一心を明し、長行は五念を明す。一心と五念は願生者機受の全相なり。而して長行を以て偈を見る時は一心の中に五念を具し、又偈を以て長行を見る時は五念は一心より流出するなり。されば五念は一心に入りて以て一心内徳の周滿を告げ、一心は五念を出して眞實信心必具名號の如實を示す。而して此一心五念は他力廻向の故に、論主領解の一心又能く下品の衆生と共にすることを得て、論主も凡夫も同じく願作佛心度衆生心を具する所の大菩提心を成ずるなり、故に廣大無碍の一心との給ふ。既に廣大無碍の一心なるが故に能く報土往生の正因たることを得るなり。『淨土論』も此一因一果の法門を明すにあり。何を以て知るとなれば偈の首に「世尊我一心」と云ふは一因なり。終りに「即得成就阿耨多羅三藐三菩提」と云ふは一果なり、既に一因を以て始まり一果を以て結ぶもの『淨土論』の體制なり。然れば其中間に明す所の五因五果は要する

に、五因を以て一因の周備することを顯し、五果を以て一果の圓成を示すにありと見るべきなり。而して『論』の長行の前には「漸次成就」とありて、終りには「速得成就」と云ふ。漸次成就は廣門にして速得成就は略門なり、廣略相入にして漸成を全うじて速得と結ぶ。此を要するに本願力に値遇する信の一念に速滿寶海す。之れ一心に入出二利の徳を全領する所以なり。此が『論』の旨歸にして、高祖の嘆述亦茲にあり。此を以て今偈の中初に偈頌によりて略門の意を述べ一因一果皆本願力なりと明し、次に「菩薩入出五種門」已下は長行に由りて廣門の意を述べ一因一果皆本願力に起觀生信章に五念門を明し、利行滿足章に五功德門を示し、因果對望して入出の義を辨す、即五因五果の法門なり。然るに其因に於て五念を論ずるものは、一心即五念二利功德圓滿の大信なるが故に、其徳相を開きて以て行者の所修とし、又果に於て五門を立つるものは、一果即廣略相入の妙證なるが故に其果徳を開きて行者の所得とす。而して其漸次五門は是を法藏に屬し、機上の五念は本成の流發なることを示す。斯く約廣約略の二節ありと雖も旨歸は略門にあり。されば「菩薩入出」已下の五因五果は前の一因一果の註脚と見るべし。何んとなれば一心歸命すれば速滿寶海す、此義を結しては、「觀彼如來本願力」等との給ふ。而して其眞實功德大寶海とは入出二門の功德其物にして、即是南無阿彌陀佛なり。故に宗祖は眞實功德を釋して誓願の尊號との給ふ。南無歸命の一念に阿彌陀佛の不行を全領する之を速滿寶海と云ふ。此速滿寶海の一心こそ速得菩提の一果のた

めの一因なり。其所領の功德二利周備なることを顯さんが爲に、次に廣門に約して「菩薩入出五種門」等との給ふ。即法藏菩薩前四念門に入り給うて自利行成就するは、其自利行全うして利他の爲なり。故に『論』^下に「菩薩巧方便廻向者謂說禮拜等五種修行所集一切功德善根不求自身住持之樂欲拔一切衆生苦」等との給ふ。然れば、彼法藏菩薩の速成正覺し給ふ所以は全く拔諸生死勤苦之本のためなるものなり、故に今偈にも第五門を述べて「不捨苦惱一切衆、廻向爲首得成就、大悲心故施功德」等との給ふ。「一心專念速滿足」するものは此功德に依る。然れば菩薩前四種の門に入りて自利を全うし給ふもの、全く是利他せんが爲なり。故に五因五果を明し終りて、「以本願力廻向故、利他行成就應知」と佛願所成に結歸し給ふ。而して其相を次に「無碍光佛因地時」等と因願を顯し、「菩薩已成智慧心」等と果上を顯し、次に二利成就を總結して「成自利利他功德、則是名爲入出門」との給ふ。かく自身の入を全うじて利他の出を成ずる此を入出門と名くるなり。是を以て廣門に約して明すに當り初の所に「菩薩入出五種門」等と云ふ。此れ上に明す遇の一念に速滿寶海する他力の義を票するなり。終に「成自利利他功德」と云ふは上の二利を結するなり、自利の入を全うじて利他の出に趣く故に入出二門他力の謂れとなる。宗祖『論』を頌し給ひて其結文に二利を「入出二門」と名くるもの最も重要にして今偈題號の意義亦茲にあり。次に一論所明の入出二門の法義を愈々顯彰し、且つ相承一轍の法門にして異途なきことを示さんが爲に、雁門、西河、終南の三

師を引き給ふ。其中鸞師は正しく本論の註家なれば所釋を擧げて「婆藪槃頭菩薩論」と出し其解釋を頌するに當りては「願力成就名五念」を以て始まり、「入出二門名他力」を以て結す、是法に約して願力廻向を示すものなり。中間に在りては「如實修行相應者」等とは機に約して信爲能入の旨を示す、此義所謂鸞師所説の自利利他の深義を啓發し給ふにあり。即其利他を領するもの名義相應の一心にあることを示すなり、此信心の一因を以て菩提涅槃の一果をうることを明して、「不斷煩惱得涅槃」との給ふ。又此一心正爲凡夫なることを示して、「淤泥華者經説言」等との給ふ、此が『和讃』に所謂「論主ノ一心トトケルヲハ乃至他力ノ信トノヘタマフ」のこゝろなり。偏へに彌陀自利を全うして利他し給ふ、本爲凡夫誓願不思議の力なり。故に終に「斯示如來本弘誓、不可思議力即是、入出二門名他力」と結し給ふ。是に於て知る上の「菩薩入出五種門」は遇の一念に速滿寶海せしむるための他力なること明白なり。次に西河の約時被機勸歸淨土の釋を引くものは、前章に明すが如き本願力廻向の一心なるが故に、法滅百歳の劣機に通ずる唯一門の法義なることを助顯するにあり。西河は全く鸞師を祖述して自力他力を分別し給ふにあり。これ『論註』の初に龍樹の難易二道を擧げ、唯是自力と佛力住持との別を以て難易の所由とするに依る。今之を此土彼土の入聖得果に約しては聖淨二門の判をなす。故に聖淨二門は要するに難易二力を知り易からしむるに在り、之西河の功なり、故に今偈「即易行道名他力」と結し給へり、之法に約して他力を顯すなり。中間に

「三信相應是一心」と云ふもの亦鸞師を相承するものにして、如實修行相應を更らに詳説し給へるなり。之機に約して一心を示すにあり。後に終南の釋義を頌す、初に「即是名爲一乘海」と一乘海の名を出す。これ歸三寶偈に『論』の「我依修多羅」等の四句を據として、「我依菩薩藏」等の四句を作る、されば一乘海とは『論』の眞實功德相のことなり。次に「菩提藏」の名を出す、之「般舟讚」に依る、文に「觀經彌陀經等説、即是頓教菩提藏」とあり、而して此菩提藏一乘海は上祖所説の易行他力淨土門を判じて眞宗とし一乘とし菩提藏とせるなり。之法に約して願力廻向の法門を判するにあり。而して「我等無上眞實信」とは論主の一心にして鸞師の所謂「以斯信心名一心」、西河の所謂「三心相應是一心」を承けたるなり。而して、かゝる一心は「由佛願力獲得信」と全く能令速滿足の旨と一致するにあり。之を要するに三師を引くものは『淨土論』所明の入出二門全く願力廻向なる旨を助顯して、以て相承一轍にして異途なきことを明すにありと伺ふ。されば今偈大意は唯『論』所明の本願の因果を頌し給ふにあり。本願の因果なるが故に一因一果なり、本願力の因果なるが故に煩惱成就の凡夫を本とす、本願の因果なるが故に此法圓頓一乘なり。之を顯し成せんとして雁門、西河、終南の三師の釋義を頌し給へるなりと伺ふ。

五念門の扱方に就て

今偈の造由は『論』の蘊奥を啓發し、入出二門他力なることを顯揚し給ふにあることは前述の如し。されば一偈には『論』に依りて五念門を明し給ふ。然るに『論』所明の五念門は行者の修相に約せるなり。今偈之を相承して法藏所修の五念行として頌し給ふ。之『論』と相違せるが如し。今此問題を研尋せんとす。『論』文に「菩薩入四種門」、「菩薩出第五門」とありて、「菩薩」とは起觀生信章の文に「若善男子善女人修五念門行」等とある善男善女のことなり。而して其所謂善男女とは論主所共の諸衆生なれば、凡聖善惡の一切衆生を總稱す。故に菩薩とは云へども實は信心の行者のこと。他力獲信の行者は願作佛心度衆生心の圓具せる大菩提心を得て、二利具足せるが故に菩薩と名けらるゝなり。然るに今『偈』に「菩薩入出五種門」と票せる文の菩薩とは、次の「無碍光佛因地時」等の偈文及び宗祖の點聲を伺ふ時は法藏菩薩のことなり、之『論』と相違せる大なるものなり。然るに此相違實は相違に似て相違に非ず、却つて論主の深意幽旨を開顯し給へるものと謂ふべし。如何然るとならば、先づ宗祖の法藏菩薩の五念として明し給ふ思召を伺はん。鸞師は『論註』に此『論』を讀して「上行極致不退風航」と述べ給ふ。「上行の極致」とは大乗至極の義なり。「不退の風航」とは頓教至極の義なり。宗祖此『論註』の開顯を得て『偈』に本『論』の「我依修多羅

とあるを承けて、「世親菩薩依大乘、修多羅真實功德」と、「大乘」の二字を加へ以て『淨土論』の法義は大乗の法門なることを示し給ふ。其大乘至極の法門とは即是誓願一乘の一因を以て無上菩提の一果を頓證するの法義なり。斯くの如く速疾頓成超過不思議の法門は是自力の所修に非ず、實に如來本願力に依るものなりとす。故に一因一果の法義を頌述して結するに「觀彼如來本願力」等と本佛の功德に歸し給ふ。且つ其機を云へば煩惱具足の凡夫なり、故に「凡愚遇無空過者」と特に「凡愚」の二字を加へて以て大乘至極の教の所被の機を顯す。之に依りて「修多羅真實功德」の功德は、通途の真實功德に非ずして願力廻向の真實功德大寶海なることを知る。之『大經』序分にある真實之利にして付屬に所謂無上大利のことなり。されば論主は諸大乘經に依りて千部の論を作り給ふと雖も、未だ他に「我依修多羅真實」と云はず、此我依修多羅真實の言、唯だ『淨土論』にのみあり。宗祖大乘修多羅と大乘の二字を加へ給ふもの此論主の意を探り給へるなり。故に大乘と云ふ所に誓願一佛乘の法義なることを顯す。故に所歸の佛を明す所にも「盡十方不可思議光如來」と云ひ、「無碍光明大慈悲、斯光明則諸佛智」と云ひて、法界統御の佛德に就きて之を示し、又所入の土を示すにも「佛法不思議」の文字を以て其妙土の所由を頌し法界獨尊の淨土なることを明し給ふ。斯くの如く煩惱具足の凡夫唯信の一因を以て、速證大涅槃の一果を得るものは全く願力不思議の法義なるべきなり。されば五門の因果は此一因一果の上の差別にして漸次漸成の自力執着を加ふべからざる

ものなり。其意を顯さんとするが宗祖の意なり。故に「菩薩入出五種門」と云ひて、廣門に約する五念門行は之を法藏菩薩因位の行に就きて之を明し給ふ。而して其然る所以は本論に明せる行者所修の五念門は行者之を修して後初て功德を成ずるものに非ず、一心専念速満足の故に、一心の因成する所速かに功德の大寶海を満足せるなり。而して其行者の満足する眞實功德大寶海とは、其本を云へば法藏菩薩永劫に修成し給へる無量の徳行にして、其永劫積集の無量の徳行、清淨眞實の功德は、法藏三業の所修なるが故に、五門の行を以て其無量の徳行を攝するなり。此佛三業五門の功德一尊號となり、一念の所に全領す、其已領の功德相續の所に至りて行者の三業に顯發する、此を行者の五念門とするなり。此の如き意趣を顯さんがために今偈にありては上の眞實功德大寶海を承けて、先づ如來の因行に約して之を明し、次に衆生の受行を明し給ふなり。然り而して宗祖の此扱方果して論意に契ふや、否なや之尤も大なる問題なり、已下更らに論意如何を伺はん。

抑も一論の幽旨は全く『論註』に依りて顯彰さるゝなれば、今『論註』を通して本『論』の意趣を見ん。利行満足章の『論註』文に「問曰有何因緣言速得成就」等と問ひ、其答に「論曰言修五門行以自利他成就故」と云ひ、本『論』の文を以て速得の所以を答へ給ふ。蓋し是二利行成就して無上菩提を得ざることなきが故なり、速得菩提の所以は自利他行成就なればなりと答へ給ふにあり。次で「然覈求其本阿彌陀如來爲増上縁」等とは其速得菩提の所以たる二利行成就は、蓋し阿彌

陀如來の本願力に依るものなることを明し給ふなり。而も特に『速』の意義を開顯して他力廻向なる意を知らせ給ふ。其次に「凡生彼淨土及彼菩薩人天所起諸行皆縁阿彌陀如來本願力」と云ひて、往還二廻向悉く佛願他力の致す所なることを明すにあり、次で第十八願第十一願第二十二願を引きて之を證し給ふ。『論』意茲に至極す。而して『論註』此の如く三願を引證して願力に結歸し給ふ所以は、『論』の長行釋に「三種成就願心莊嚴」との給ふ意を開顯し給へるなり。國土功德は第十一願證大涅槃の國界なり、佛功德は第十八願若不生者不取正覺の覺體なり、菩薩功德は第二十二願還相廻向の菩薩法なるが故なり。之に由りて『論』の偈には佛の不虛作住持功德を顯して、「觀佛本願力」等との給ふ、此本願力とは三願に通ずれども正しく佛功德なるが故に第十八願のことなり。如是なるが故に本『論』は要する所たゞ佛の本願力を以て之を貫く。之に依りて『論註』には往還因果皆阿彌陀如來の本願力に縁るなりと、法義の本源を示し給ふ。茲に『論註』の所釋開顯に依り五門入出二利の功德悉く皆如來本願力に縁ると云ふこと明かなり。『論』にありて行者の能修に約するものは末に付くなり、其末に約して明すものは他力廻向の法の深高を顯し、以て如何なる凡愚も聖者も佛眞實のまゝが至り届く他力廻向なるが故に、佛功德全く行者の有となり得ることを示し、行者全領の上に就て二利成就の徳相を談じ給ふ。故に行者の所修は是末なり。若其本につけば法藏の所修なること明かなり。されば今行者の眞實功德大寶海を承けて其本を示し、以て法藏所修の自

行を顯すもの『論』の所明と相違せるが如くして、實は相違に非ず能く論意を啓發せるものと謂ふべきなり。宗祖約本の所明實に感佩すべきなり。

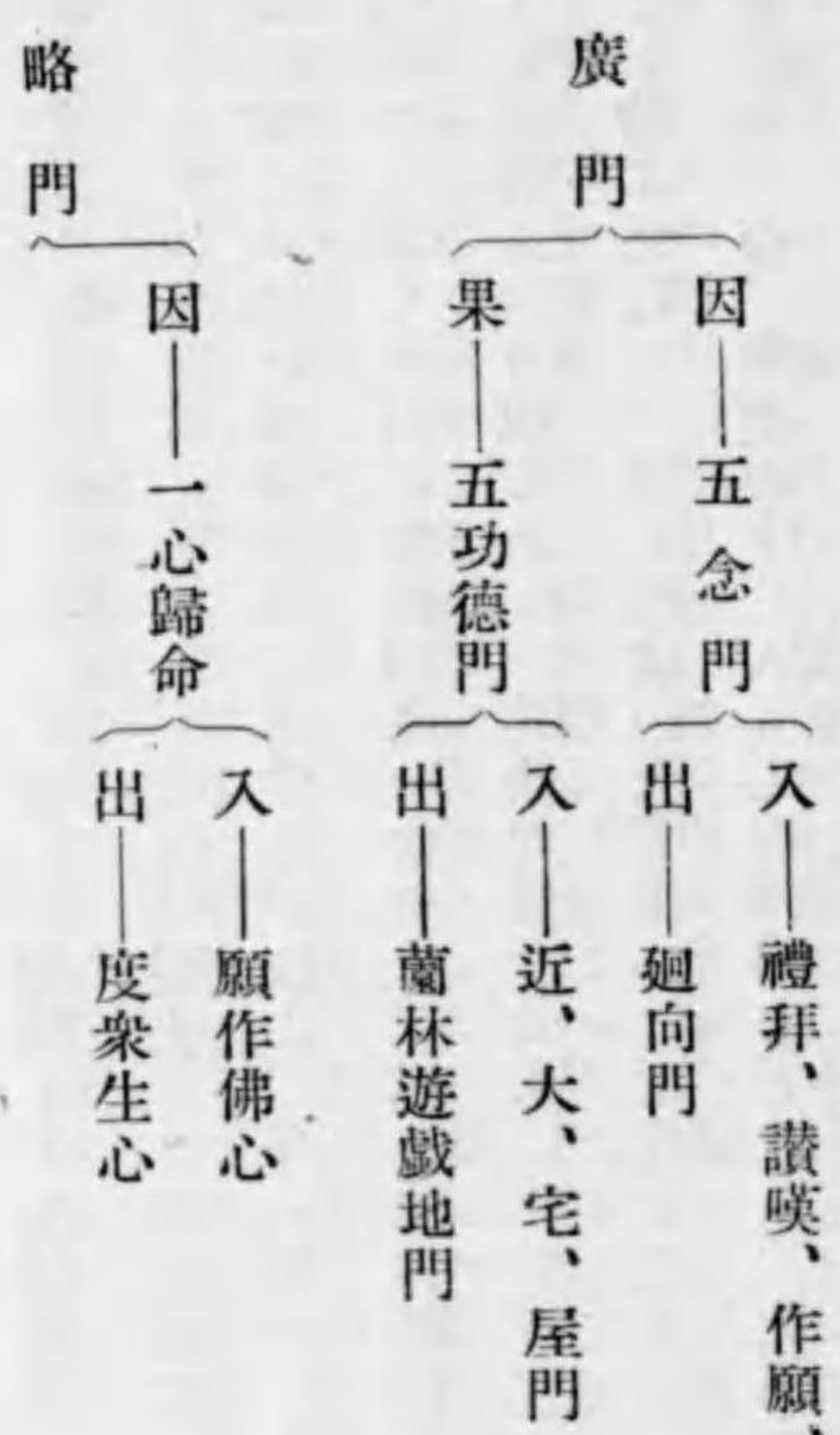
題號を釋す

題號を釋せんに二あり、一に正題、二に選號。正題とは**入出二門偈**の六字、選號とは**愚禿親鸞**の五字なり。初に先づ名義を釋せば、『窺班錄』には入は歸入證入の義、出は生出の義とす。『流情記』には入は入眞證果、出は出假利生とす。『義疏』には入は證入、出は出現とせり。各々其意義存すべし。今謂く**入**は證入の義、即安樂淨土に入り大會衆に入り蓮華藏世界に入り眞如法性身を證するに名け、**出**は出境の義にして應化身を現し慈悲教化地に出で以て苦惱の衆生を度するの名なり。次に**出體**せば、今偈に「菩薩入出五種門、自利他行成就」との給ひ、又「成自利他功德、則是名爲入出門」との給ふが如く、總じて云へば「入」とは自利の法、「出」とは利他の法なり。『法華文句』に「化他用爲自行用爲入」と云ひ、『止觀』に「入空出假」と云ふが如きは、自利他を出入とするの例なり。而して其**入出・二利**の義を釋するに就き唯廣門に約する義と。廣略に通じて解する義との異あり。其中今は廣略に約する義を用ふ。『論註』所明を見るに**入出**の名は廣門の上に出でたり、故に今亦「菩薩入出五種門」とあり、然れば何故に略門の上にもまで通じて解するやと云ふに、**入出**の相の顯著なるを云へば廣門の上であり、其廣門と云ふも果の五門最も著し、故に『論』には果の五門の上に此名を存す。然るに**入出**はもと二利の異名なり、故に今偈にも「成自利他功德、則是名爲入出門」とあり、此二利を**入出**の義と定め給ふなり。一因の信心即二利圓具し、此一心開けば二利**入出**五門の行となる。此を卷けばたゞ一心なり、開けた五念に**入出**あるが故に合して一因に二利**入出**の義あること勿論なり。且つ『偈』を見るに初より「眞實功德大寶海」までは略門に約して一因一果の法義を頌し、「菩薩入出五種門」已下は廣門に約して頌し給ひ、之を題して「**入出二門偈**」とあり。題は一部の總票なり廣略を含むこと至當なりと謂ふべし。先づ廣門に約して解するに因果兩重あり。入は謂く次第轉進の義、出は謂く出化利生の義。五念門の前四念門を入とし第五廻向門を出とす。『論註』下丁に「前四念是入安樂淨土門後一念是出慈悲教化門」と云ふ。次に五功德門の中前四門は入、第五齒林遊戲地門は出なり。『論』丁に「此五種門初四種門成就入功德第五門成就出功德」と云ひ、『論註』下三丁に「此五種示現入出次第相入相中初至淨土是近相乃至是故出門稱齒林遊戲地門」と釋せる是なり。次に略門に約して**入出**を解さば入は歸入所入の義、出は所出の義なり。略とは一因一果にして、一因とは信心、一果とは涅槃なり、一因の信心に**入出**の義あり一果の涅槃に**入出**あるなり。『窺班錄』には「一法句に約せば無爲涅槃を以て所入とし、眞實信心を以て能入とす」と解せり。一因に約せば行者歸命の一心に不知不求して願作佛心度衆生心の二利の

ふに、**入出**の相の顯著なるを云へば廣門の上であり、其廣門と云ふも果の五門最も著し、故に『論』には果の五門の上に此名を存す。然るに**入出**はもと二利の異名なり、故に今偈にも「成自利他功德、則是名爲入出門」とあり、此二利を**入出**の義と定め給ふなり。一因の信心即二利圓具し、此一心開けば二利**入出**五門の行となる。此を卷けばたゞ一心なり、開けた五念に**入出**あるが故に合して一因に二利**入出**の義あること勿論なり。且つ『偈』を見るに初より「眞實功德大寶海」までは略門に約して一因一果の法義を頌し、「菩薩入出五種門」已下は廣門に約して頌し給ひ、之を題して「**入出二門偈**」とあり。題は一部の總票なり廣略を含むこと至當なりと謂ふべし。先づ廣門に約して解するに因果兩重あり。入は謂く次第轉進の義、出は謂く出化利生の義。五念門の前四念門を入とし第五廻向門を出とす。『論註』下丁に「前四念是入安樂淨土門後一念是出慈悲教化門」と云ふ。次に五功德門の中前四門は入、第五齒林遊戲地門は出なり。『論』丁に「此五種門初四種門成就入功德第五門成就出功德」と云ひ、『論註』下三丁に「此五種示現入出次第相入相中初至淨土是近相乃至是故出門稱齒林遊戲地門」と釋せる是なり。次に略門に約して**入出**を解さば入は歸入所入の義、出は所出の義なり。略とは一因一果にして、一因とは信心、一果とは涅槃なり、一因の信心に**入出**の義あり一果の涅槃に**入出**あるなり。『窺班錄』には「一法句に約せば無爲涅槃を以て所入とし、眞實信心を以て能入とす」と解せり。一因に約せば行者歸命の一心に不知不求して願作佛心度衆生心の二利の

徳を具す、是入出の義なり。此願作度生は他力廻向の信徳なり、謂く佛の大悲度生心が衆生の心中に入りて佛因を成す、此を願作佛心と云ふ。此心佛の利他大悲度生心なるが故に複願作佛心に自から度衆生の徳を具するなり。故に行者歸命の一心は二利具足して廣大無碍の一心なり、此を淨土の大菩提心と云ふ。『論註』下^八に「此無上菩提心即是願作佛心願作佛心即是度衆生心」等と云ひ、『和讃』に「盡十方ノ無碍光佛 一心ニ歸命スルヲコソ 天親論主ノミコトニハ 願作佛心トノヘタマヘ 願作佛ノ心ハコレ 度衆生ノコ、ロナリ」等とあり、これ『論註』の願作度生の二心を以て『論』の一心歸命と釋し給ふなり。此を以て見れば今偈の一心歸命も亦願作度生の二心を具すること勿論なり。而して願作佛心を入とする意は、入に始終あり、入の始之を歸入と云ひ入の終り之を證入とす。入の始は現在にありて一心歸入なり、入の終りは當來にありて涅槃證入なり。今一心の略因につけば歸入の義なり。又これ歸入功德大寶海のこゝろなり、一心歸命即入なり、此自利の入、自然に利他の悲用を具す、故に願作佛心は自利にして入、度衆生心は利他にして出なり、一心の一因に入出ある意知るべし。次に略果に約して解さば證入生出の義にして、阿耨菩提は悲智圓滿の妙證にして、智慧は是入にして慈悲は是出なり。『證卷』^一に「利他圓滿之妙位」と云ふものは出なり。『無上涅槃之極果』と云ふものは是入なり。『眞佛土卷』^{十一}に『涅槃經』の「如來實不畢竟涅槃是名菩薩」の文を引き給ふ。蓋し是大乗の極果は二乗の自調自度の小涅槃と同じからず、二利圓

滿の妙果なることを示し給ふなり。されば略門果上の入出は理實には入出同時にして、入の處に自から出の義あり、生即無生の故に入門なり、無生即生の故に出門なり、入出同時にして一涅槃の法たるなり。略門一果上に入出を見るは相違の如し、出門と云へば既に廣門なるべきが如し如何と云ふに、前に引く『證卷』^一の文によりて見るに、大乘の極果何ぞ只無生の空門のみならんや、空門ならば利他圓滿の妙位と云ひ難し、故に『證卷』に第二十二願を引きて還相の義を顯し給へり。又廣く『淨土論』を引きて果の五門の相までを顯す、是第十一願の滅度は小涅槃の如きに非ず大涅槃たる義を顯すにあり、故に眞實證果を明す中に廣門の相あれども、略果を體として此を總ふるが故に、該して其儘大滅度を成するなり、以上圖記せば左の如し。



果——阿耨菩提——入——智慧——生即無生
出——慈悲——無生即生

斯の如く入出は廣略因果に通ずるが故に、今『偈』に入出二門を以て題號とし給ふ。然り而して今『偈』に斯く入出に廣略因果を含めて、以て他力廻向の法義を顯揚し給ふ上に、更に廣く祖意を伺ふに心得ふべき扱方あり。其義如何と云ふに、先づ第一には自力廻向を遮せんが爲に入出合して入とし給ふ是なり。謂く聖道の大菩提心は度生を先きとし、淨土の菩提心は願作を先きとす。佛の大悲度生の心、衆生心中に入りて願作佛心となる、此願作佛心に度衆生の徳を備ふ、如此二利具足して大菩提心を成ずるもの他力なるが故に、下機の凡夫も一心の所に二利の徳宛然として具足す。二利具足すと雖も宗祖は度衆生心の法を奪うて此を法徳に約して談じ給ふ。『和讃』に「淨土ノ大菩提心ハ、願作佛心ヲス、メシム乃至度衆生心トイフコトハ、彌陀智願ノ廻向ナリ乃至自力ノ廻向ヲステハテ、利益有情ハキハモナシ」等と。度衆生心を以て彌陀智願の廻向とし、衆生は唯此如來の廻向に歸入して願作佛心をうるのみとす。已に如來の廻向に歸入するが故に度衆生心は法徳として之を具するなりとの意なり。然り而して斯く法徳として談じ給ふものは利他度生の名に迷うて自力廻向に墮せんことを恐るゝが故なり。されば佛にありては二利卷て唯一の大悲廻向の度衆生心なり。衆生にありては二利卷て唯一の願作佛心なり。二利唯自利なるが故に入出合して入、入出共に入な

るが故に出を含藏す。此を開きて顯すもの論主なり。此を合して示すものは宗祖なり。又次に入出合して出と扱ひ給ふ側あり。謂く宗祖入出合して入を取り給ふと雖も利他廻向を永く開かざるに非ず。此土にありては衆生の廻向を許さずと雖も、一度彼土に到りては廻向を遮するにあらず。『和讃』に「願土ニイタレハスミヤカニ、無上涅槃ヲ證シテソ、スナハチ大悲ヲオコスナリ、コレヲ廻向トナツケタリ」とある是なり。此還相出門即廿二願のこゝろなり。『證卷』に二十二願を引きて其下に近大等の五果門を悉く還相廻向の悲用とし給ふ、即入出共に出とし給ふなり。近大等の從因向果漸次成就を執する時は論主所明の五果の義に違するが故に、五果の差別は一果中の妙波瀾なり、入出共に大悲影現の上の出門還相の義と明し給ふ。是入出合して出と扱ひ、以て漸次成就の執を除盡し給ふ。又五果の扱方に就きては彼此二土に分ち給ふ義邊あること留意すべき點なり。謂く五果中第一第二の近大二門を合して現生正定聚の義とし、第三第四の宅屋二門を合して證入涅槃の義とし、第五門を還相の義と扱ひ給ふ、是は『廣』『略』二書の偈文の意なり。是信心正因の宗義を極成せんが爲なり。彼土の正定聚を現益として、聞信一念正因究竟して即時に正定聚に入り、彼土に到りては初生速極證大涅槃となる信心正因一因一果の法門宗義を成立し給ふなり。凡そ信心正因を顯揚せんとせば現生正定聚を談ずるを極致とす。されば宗祖は一因一果の宗義を極成せんがために、五果を彼此二土に分取し給ふなり。

次に二門、二とは數を出す、門とは喩に従ふ。『窺班錄』に入出即二門と解す。『大意』には二種の五門を合して總じて入出二門と名くとし、『流情記』には二種の五門皆如來の願力に由ることを明すが故に入出二門偈と云ふとせり。後の二説は因^五念^五果^五德^五二種を二門と名くるが如し。今は前義の入出即二門の義を取る。『論註』下^{十一}に「門者入出義也如人得門則入出無碍」とあり、入出即二門の義なり。偈頌とは梵漢並稱するなめ。後に合釋せば入出即二門の持業釋、入出二門の偈頌の依主釋名なり。又入出二門は所詮の法にして別名。偈頌は能詮の文句にして通名なり。然るに又入出二門の法義を詮表する偈頌とする時、從つて通が別の偈と意味さる。

因みに入出二門と往還二廻向の同異を辨せんに、入出と往還とは或同或異なり。入出は『淨土論』の所說法義、往還は鸞師の所開法門なり。入出は因果五門に通じて、前四門を入とし後一門を出とす、往還は鸞師因の第五門の上より開く、又入出の名は淨土に約して立つ、往還は此土に約して稱す。又入出の名は本末に通じ、往還の名は末に限るなり、是其異なる邊なり。然れども覈求其本の釋意より衆生往生の因果を往相と名け、其生後の利益を還相と名け、此二相共に彌陀の利益廻向なりと成立する時は、其體に就て入出往還別なきなり。行者の入出は彌陀の他力に依ると無二無別なり。然るに今往還を以て題とせず入出を以て題とするものは、直ちに『淨土論』の大意を解述して三經一致大乘修多羅の法義、他力廻向願力廻施の法義を顯揚せんが爲なりとす。即ち生佛に通ずる

の名を以て不二の妙旨、他利利他の深義を啓發せんが爲なり。

次に選號、愚禿等の五字を選號とす。愚禿の二字は卑謙の辭、宗祖御一代の名として御使用なりき。愚禿の二字誠に深奥の意義と、甚深の法味とを含む、第十八願の法義、機は惡逆の下根を正客とし、法は最高甚妙の法なることも、此名に依りて表象さるゝなり。次の二字は相承を顯す御諱。作とは文に約す、偈頌を作るが故に作と云ふ、其法義に至りては私案創説にあらず、相承の法義を開顯し給ふものにして、所謂述べて作らずの意なり。

一偈の文科

今や正しく偈文に入りて、其義を解さんとするに先き立ち、一偈の組織を知るべく古例によりて文段の分科を試みん。先哲に異説あり、一説に初「世親菩薩」より「則是名爲入出門」に至る四十四行、所謂『淨土論』の頌述を以て一章とし、之を正しく入出の法門を明すとす。次に「婆藪槃頭菩薩論」と云ふより最終に至るまでの三十行は次での如く鴈門、西河、終南の三師を頌せるものにして合して之を一章とし之を助顯とす。『窺班錄』『流情記』等の説なり。一説には初より「入出二門名他力」まで五十四行を一章と見る、即『淨土論』『論註』を合して一組とし、之を正しく入出二門を明すと科し。次で「道綽和尚解釋曰」已下二十行、即西河と終南の釋を合して一章とし以て前義

を助成するなりとす。『大意』の科是なり。一説には前説に同じく『淨土論』と『論註』を一組として入出二門を明すとす、西河、終南を合して判釋勸信と科せり『義疏』是なり。一説には文に従つて四段とし、義を以て二科とす。即文は『淨土論』、『論註』、西河、終南の四段なり。而して『論』と『論註』は願力廻向の法門を明とし、西河終南の法義は順彼佛願の法門を辨明するものとす。圓成院の説なり。

今は第一説に従ひ、『淨土論』を以て一章とし、論意を述べて入出二門の法義を明すとす、鷹門、西河、終南の三師を合して一章とし、師釋を引て助顯し兼ねて相承一轍なることを示すものと科す。蓋し其所以は今偈題して「入出二門偈」と云ふ。一偈の所明は「入出二門」にあるや必せり。而して其入出二門は正しく『淨土論』の所明なればなり。即『論』^九に五果門を明して「此五種門初四種門成就入功德第五門成就出功德」と云ひ、「菩薩如是修五門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提」等と結び給へり。之入出二門の法義を明せる本據なり。而して其曇鸞章の如きは既に「婆藪槃頭菩薩論、本師曇鸞和尚釋」とありて、『淨土論』は所釋『論註』は能釋とする意分明なり。故に西河の下にも「解釋曰」と云ひ、終南の下にも「義解曰」と云ふ、以て三師は共に『淨土論』の入出二門の法義を所釋とする意なり。偈文に「入出二門名他力」と曇鸞師章を結び給ふと云へども、それは一論所明の入出二門を他力に歸することは曇鸞師の釋功なり、幽深の論意を啓發して一論所明の

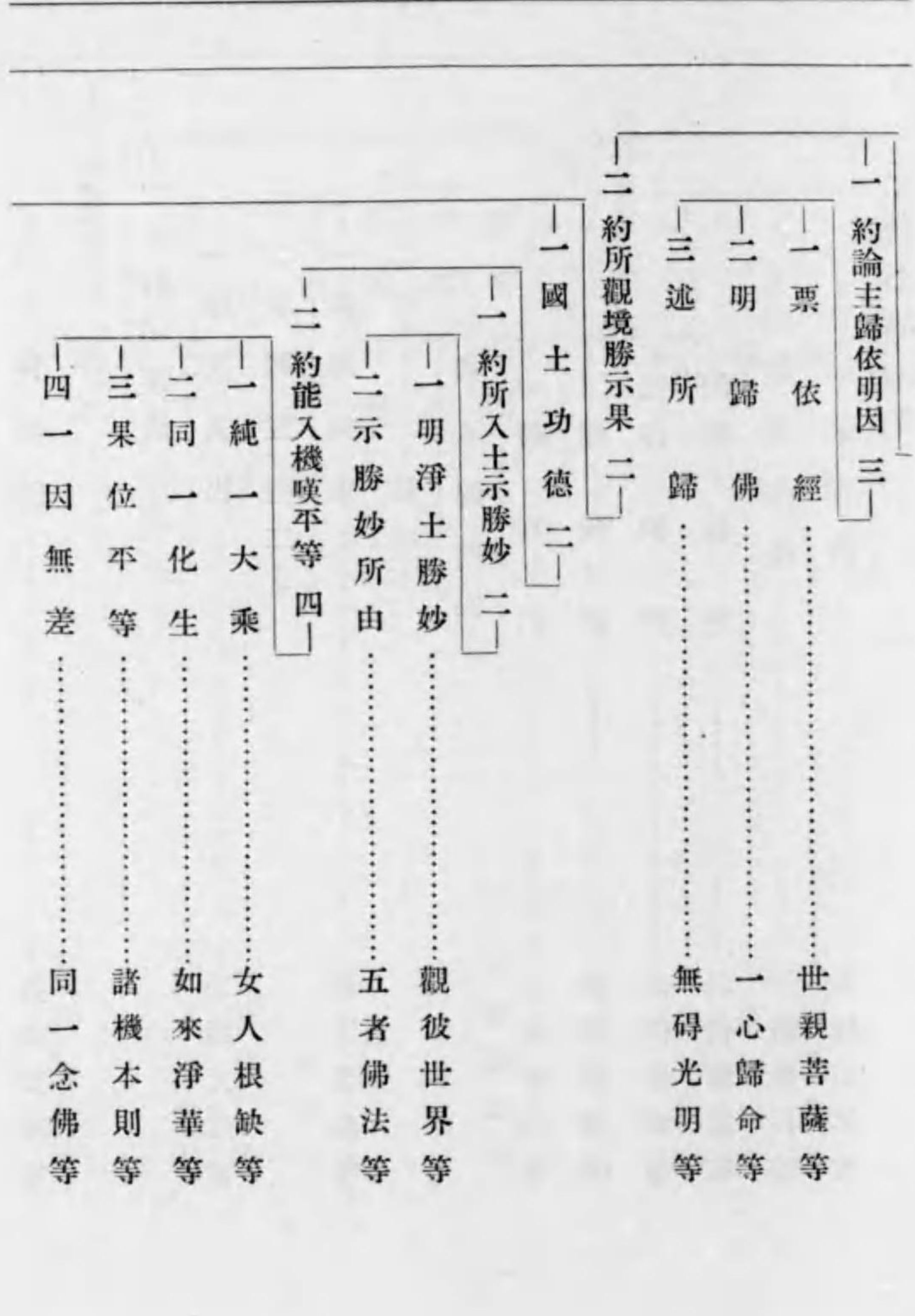
入出二門は全く他力なることを尅明にし給ふものは實に『論註』なり。『證卷』に「慇懃弘宣他利利他深義仰可奉持特可頂戴矣」とあるもの是なり。故に「入出二門名他力」の結句ありと雖も、正しく入出を明すと云ふには非ず、入出二門は一論の所明にして、其之を他力願力の廻向なりとなすも『論註』の釋功なり。此意を以て「名他力」と頌し給ふ。更に第二説の『論』、『論註』を合して一章となすの根據は『論註』の本論に於ける關係の他の西河終南の二師と異なるものある點を強調せり。云く『論註』の本論に於ける關係は西河終南と同視すべからず、偈に假令本論の本義を頌せる場合も之全く『論註』の意に依らざるはなし、其入出二門の法義の的確なる意義も『論註』の釋を待ちて知ることを得るなり。即本論所明の當相のまゝを以てせば、五因五果因果相望の明し方は全く行者自力の漸修漸成の如く見へたり。然るを宗祖の盛んに他力廻向を談じ、『正信偈』にも「光闡橫超大誓願、廣由本願力廻向」等と頌し給ふもの、全く『論註』の指南ありて初て知り得給へるなり。故に『和讃』にも「天親菩薩ノミコトヲモ 鸞師トキノヘタマハスハ 他力廣大威徳ノ 心行イカテカサトラマシ」と讃し給ふなり。此意を得て今偈を見る時は、初に「婆藪槃頭菩薩論」とあり、結んで「入出二門名他力」と云ふ、是題號の意を成するもの、正明に非すと云ふも得べからざるなり。故に今は二師を合して正明とし、西河終南を合して助顯とすると云ふにあり。今謂く「淨土論」と『論註』の關係が他の二師のそれと其趣を異にせる點あるは勿論なり、且つ本論の幽玄な

る法義を尅明にせるもの全く鸞師の釋功なりと雖も、而もそれを以て今偈の科段に影響を持つにあらず、既に造由、大旨の上にも述べたるが如く、一論の法義を啓發するもの一偈の造由なり、又三經の眞實を明す一論の法義を明すもの一偈の大綱なり。故に今主要に就て分科すべきが故に、特に天親の『淨土論』のみを一章とし、所謂題に票する「入出二門」の法義を確認するなり。而して其事は全く『論註』を待ちて『論』の深意を探り以て尅明に顯示するを得たるものなりと雖ども、入出二門を以て三經の眞實を顯示するものは全く『論』の所明なり。『論註』は之に對し寧ろ入出二門の他力なることを的確にせる點を功勳なりとすべきなり。故に今は助顯として、而も其功「名他力」にある點を認むるなり。「入出二門名他力」と頌し給ふ「名他力」こそ着眼點なり。されば西河は之を相承して「在此起心立行」を自力とし以て入出二門の易行道に簡ぶ、故に西河難易二道の對判を以て入出二門の法義は易行他力なりと釋顯するにあり。故に「則易行道名他力」と承けたり。終南は此入出二門速得菩提の法義は眞宗一乘菩提藏として圓頓一乘の至極なりと顯揚し給へるなり。故に自力他力難行易行漸頓相承一轍なることを知る。左に一偈の文科を記し、文解は後に讓る。

本文大分二

一 述論意正明入出二

一 約略明一因一果二



「二本佛功德」……觀彼如來等

「二約廣明入出二門二」

「一約行示漸成二」

「一總票入出」……菩薩入出等

「二別明五門二」

「一徵起列名」……何等名為等

「二列釋三」

「一明入四門四」

「一禮拜門」……云何禮拜等

「二讚嘆門」……云何讚嘆等

「三作願門」……云何作願等

「四觀察門」……云何觀察等

「二結前生後」……菩薩修行等

「三出第五門」……菩薩出第等

「二約心明速得二」

「一示因願果成二」

「一因願」……無碍光佛等

「二果成」……菩薩已成等

「二結入出二門」……成自利利等

「二引師釋兼示相承三」

「一鴈門二」

「一總票註釋」……婆藪槃頭等

「二別述釋義二」

「一正述釋義二」

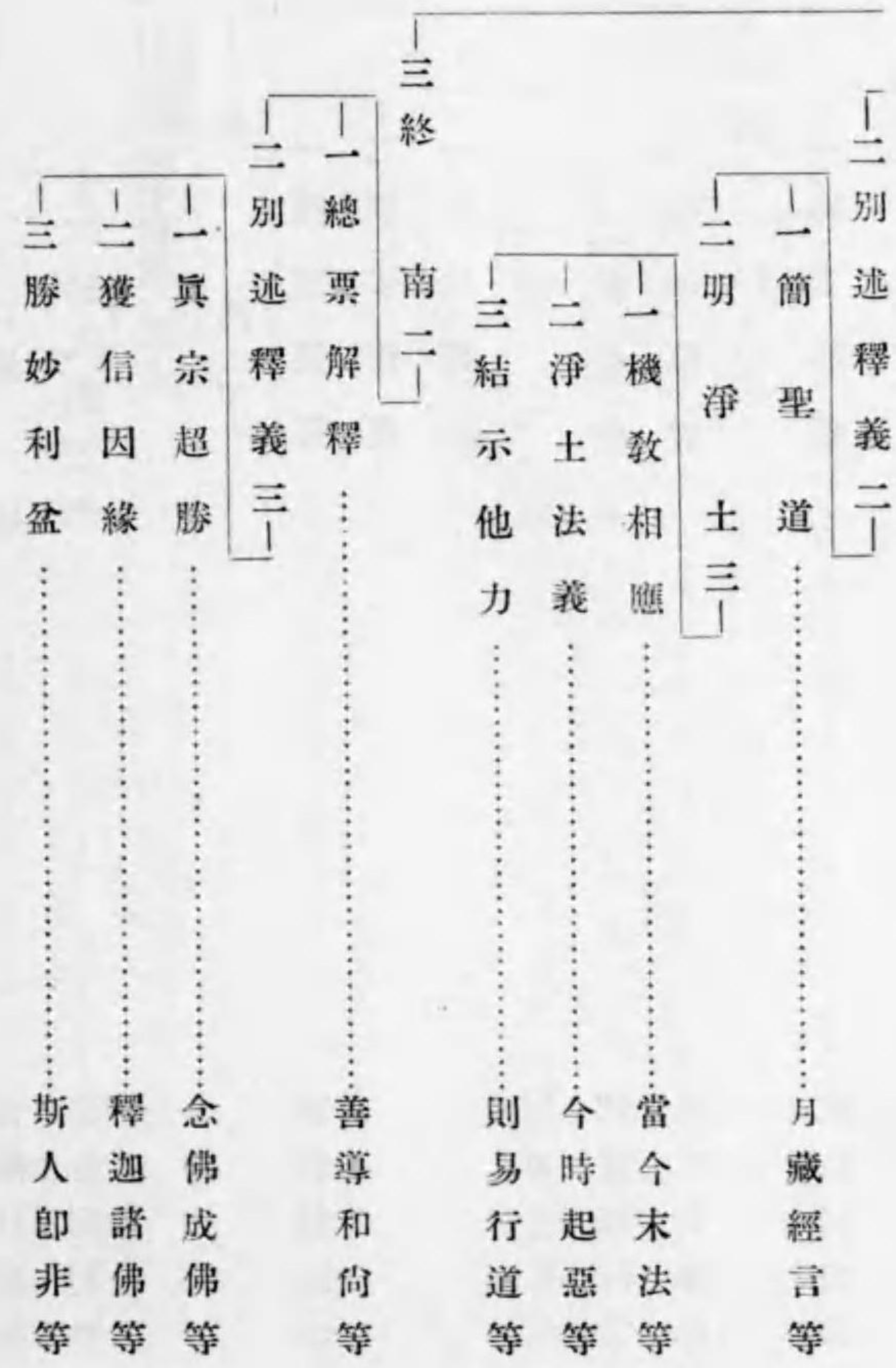
「一明宗本」……願力成就等

「二往生因果」……如實修行等

「二結示他力」……斯示如來等

「二西河二」

「一總票解釋」……道綽和尚等



偈頌文解

- | | |
|---------|---------|
| 世親菩薩依大乘 | 修多羅眞實功德 |
| 一心歸命盡十方 | 不可思議光如來 |
| 無碍光明大慈悲 | 斯光明即諸佛智 |

正しく偈頌の文に就き其義旨を釋せんとするに、前述の如く一偈大別して二段とし、初は『淨土論』の法義によりて、正しく入出二門を明し、後に鴈門、西河、終南等の釋義を引きて、上述の法義を助顯し、以て相承一徹なることを示し給ふ。初の中又二ありて、一に略に約して一因一果を明し、二に廣に約して入出五門を明す。初中又二あり、一に論主の歸依に約して一因の相を明し、二に所觀の境の勝妙に就きて一果の相を明す。今此六句は其初なり。六句更に細分せば、初二句は論主の依經を票し、次二句は論主の歸佛を明し、後二句は所歸の佛徳を述ぶ。『淨土論』に「我依修多羅、眞宗功德相」とあるものは初二句の據なり。世親菩薩とは能依能歸の人。『論』に「我心」とある是自利、「我依修多羅」とある是利他、今此二の「我」を合せて「世親菩薩」と云ふ。梵語に「婆藪槃頭」と云ふ、舊譯には天親と云ひ新譯には世親とす、今家兩者を並べ用ふ。偈とは『論註』上

六に「何所依何故依云何依」と三義を以て釋せり。今亦其三意を含む。今の依經と次の歸佛とは義釋迦彌陀二尊に對するの意、而も本より二尊一致の意なり。『論』は「世尊我一心」等と歸佛を先きに擧げ、次で「我依修多羅」等と依經を後にせり、然るに今偈は之を前後異にするもの如何と云ふに、勞謙院の云く、「大乘修多羅」は是教にして、即釋迦の咨嗟讚嘆なり。眞實功德は是教所詮の法にして、即我名なれば第十七願の所讚なり。「一心歸命」は第十八願の信心なり。此れ修多羅の如實讚嘆を聞信する、一心決定の義たり。されば第十七願第十八願の次第とす。『論』は我依修多羅の優婆提舍偈なるが故に「世尊我一心」と歸佛を先にし給ふ。『論註』上_六には「我依修多羅」等の句を釋して成上起下とし、五念修行の義を成す。今は其五念起行の義を取るに非ず、修多羅を以て天親立信の所依とするが故に、第十七願第十八願の次第に準じて、歸佛の「一心歸命」の前に依經の「大乘」等の句を置き給ふ。而して其然る所以は今偈は他力廻向の一因一果を明し給ふにあればなりとせり。今謂く『論』は天親の自督を申ふる偈なるが故に先づ歸佛を擧ぐ、願偈總持を説くものは自利中の利他なれば、廣く三種莊嚴を説くと雖も、其中間に「故我願生彼、阿彌陀佛國」と云ふ。故に一偈は要するに是論主の己心を申ふるにあるもの其意見るべきなり。今『二門偈』は一論即三經の深意を顯すにあるが故に依經を先きとし、論主の自歸を以て、却つて能入の因を示し、其所觀の境を以て、衆生所入の果を示し、以て三經の要此因果にあることをあらはすにあるなり。其所明

の主とする所、異なるもの知るべし。大乘修多羅とは三依の中の第一何所依に答ふ。『論註』に「何所依者依修多羅」とある是なり。大乘の二字『論』に無く、今『論註』の釋によりて宗祖之を加ふ。『大乘』の二字を特に加へる所に於て『淨土論』所說法義の最上なる意を示すにあり。『論註』上_初に「上行之極致不退之風航」と讚仰し給ふもの故あるなり。大乘と云ふは即一乘にして二三あることなし。宗祖は『行卷』_{四_十}に大乘を釋して「大乘無有二乘三乘二乘三乘者入於一乘一乘者即第一義乘唯是誓願一佛乘也」との給ひ、『大經』を釋して『教卷』に「一乘究竟之極説」との給ふ。今亦此釋意を以て「大乘」の二字を加へて其意義を顯揚し給へるなり。修多羅とは三部妙典を指す、『論註』上_六に「修多羅者十二部經中直說者名修多羅乃至是三藏外大乘修多羅非阿含等經也」と釋す。『銘文』_{三_十}には「修多羅ハ天竺ノコトハ、佛ノ經典ヲマウスナリ乃至イマノ三部ノ經典ハ、大乘修多羅ナリ、コノ三部大乘ニヨルトナリ」と。是『論註』によりて三經通申の『論』なることを示す。眞實功德とは第二何故依の徵に答ふ即能依の由を示す。『論註』に「何故依者以如來即眞實功德相」とある是なり。『論』には「眞實功德相」と云ふも、今は偈句字數によりて「相」の一字を省く。「眞實功德相」とは修多羅所詮の法なり。『論註』上_七に釋して「從菩薩智慧清淨業起莊嚴佛事依法性入清淨相是法不顛倒不虛僞名爲眞實功德」等と云ふ、是廣門に約する解釋なり。宗祖は『銘文』_{九_十}に釋して「眞實功德相トイフハ誓願ノ尊號ナリ」とし給ふ是略門に約する釋、廣略相

入して一致なり。次に**一心歸命盡十方**等の二句は天親菩薩の能歸の信相を示すにあり。依の三義中第三の云何依の徴に答へて能依の相を示す。『論註』上_六には「云何依者修五念門相應故」と云ふ、是五念に配釋し行に約して依相を示すもの。今偈は略門の法義を明すが故に、信に約して依相を示し給ふ。是行を信に攝するものにして、『和讃』に「如實修行相應ハ、信心ヒトツニサタメタリ」の意なり。**一心歸命**の四字は能依の心相、**盡十方**等の十字は所歸の佛體、所歸を全ふして一能歸なり。**一心**とは『論』の上は初起後續の二途を含む、故に『論註』上_四には「念無碍光如來願生安樂心々相續無他相間雜」と釋す、之相續心に約するなり。又下_三に三不信を明し「與此相違如實修行相應是故論主建言我心」と云ふものは初起に約する釋なり。故に宗祖は此二釋を『行』『信』兩卷に引用し給ふ。即下卷の釋は之を『信卷』本_五に引き、上卷の釋を『行卷』_{十三}に引き給ふ。今は一因一果の略門を明し給ふものなれば初起安心なりと伺ふべし。**歸命**とは『論註』上_四に「歸命即是禮拜門」等とあり、是五念に配釋せるが故なり。又次に「偈申已心宣言歸命」と云へるは、一心歸命同じく初起安心となすもの。今偈亦一心と同じく歸命を能歸の心相とし給ふ。歸命を釋するに三様あり。一に歸は歸依歸順の義、命は佛の勅命、故に分釋して、歸は能歸、命は所歸とす。『銘文』_{三十}に「歸命トマウスハ、如來ノ勅命ニシタカヒタテマツルナリ」とあるものはなり。二に歸命の二字を連用して全く能歸を詮す。寶章第四帖第十四通に「歸命トイフハ、衆生ノ阿彌陀佛、

後生タスケタマヘト、タノミタテマルツコ、ロナリ」とあるものは是なり。三に『行卷』_{五十}に歸と命とに就き字訓釋を施し、終に「是以歸命者本願招喚之勅命也」と釋する是なり、是歸命の二字共に佛邊に約するものなり。斯の如く三様の釋ありと雖も、「歸命」はもと南無の譯語なれば能歸を示す語とするもの其當釋なり。其二字を能歸所歸と分釋するが如きは、歸依の信相を詳かにして、能所相應の義を明尅にするにあり。其全く二字共に佛邊に約するが如きは、宗祖の妙旨にして他力廻向の信相を顯揚するにあり。今偈亦當釋に約するものにして、一心歸命の四字を以て能歸の心相とし給ふ。『和讃』に「天親論主ハ一心ニ、無碍光ニ歸命ス」とある是なり。又「歸命」を行に約して釋す。『論註』上_四に「歸命即是禮拜門也」と云ふものは是なり。蓋し歸命は恭敬の心なれば其相に發動する時は必ず禮拜と成る。然れども恭敬の行は恭敬の心に依りて生ず、恭敬の心とは即歸依歸順なり。故に『論註』歸命と禮拜とに於て必不必を辯じ、末を以て本に歸すれば歸命の實は必ず其心にあることを示せり。故に『論』の當意は安心にして其五念に配するものは一往の義なり。**盡十方不可思議光如來**等とは所歸の佛體を示す。『論』には「盡十方無碍光如來」と云ふ。今は「無碍」の二字に代ふるに「不可思議」の四字を以てす。**不可思議光如來**とは『如來會』に出で、『讚阿彌陀偈』_{十七}にこの名を擧げ給ふ。されば盡十方の中に無碍の義を攝す。次の句に「無碍光明大慈悲」とあり。無碍光とは十二光中の第三にして、『小經』に無量照十方國無所障蔽を以て阿彌陀の名

義を説く、今論主は正しく是に依り、以て體相用即圓融無碍の佛徳を顯し給ふなり。「不可思議光」は正依『大經』には「難思光」と云ふ、十二光中の第十號なり、今は『如來會』に由りて不可思議の名を擧げ以て眞報佛の尊高を顯す。今偈二號を並稱するものは但に句を調ふるのみならず、宗祖は常に此二光を並稱し給ふ。『眞佛土卷』初めに「不可思議光如來」を以て票じ、終には「盡十方無碍光如來」の名を以て結び。『二卷鈔』下_二十_一には「我能護汝」の「我」を釋して「我言盡十方無碍光如來也不可思議光佛也」とあり。『和讚』には「無碍光佛ノヒカリニハ」と票して、「ソノ徳不可思議ニシテ」と釋成し給ふ。蓋し無碍は表徳なり不可思議は遮情なり。又無碍は光用の勝れたること示して方便法身を顯し、不可思議は光體の名を嘆じて法性法身を即することを顯す。勞謙院は吾祖今偈にありて不可思議光の名を用ひ給ふに五義を以て伺へり。謂く一に爲顯十方統御故、二に爲示智體難思故、三に爲明依正不二故、四に此名攝諸光徳故、五に此名宜遮情計故と。『論』には此下に「願生安樂國」の句あり、今之を略するものは一心歸命は至心信樂にして願生は之欲生なり、而して願は信を所期の土に望むるの義差別にして別體なし、信と願とは一體の義差別のみ。故に今は一心歸命に攝して此句を略す。次に**無碍光明大慈悲**等の二句は『論』になきもの、今特に加へて以て上に擧げたる所歸の體たる盡十方不可思議光如來の徳を詳示し給ふ。上には「盡十方」と云ひて「無碍」の義を攝し、今は「無碍光明」と云ひて「盡十方」の義を攝す、影略互顯なり。上の盡十

方は光明の相なり、今の光明は智慧を體とし慈悲を用とす。其智體悲用を以て上の光相を釋す。無碍の言には圓融と自在との二義あり。圓融は佛所證の體に約す、能照所照不二一體なり、無明即明と體達するが故に自他の煩惱即智慧明なり、之を圓融と云ふ。自在は佛所照の用に約す、諸邪業繫能く障るものなし、之を自在と云ふ。宗祖は常に後義を用ひ給ふ。『銘文』_八十_一に「無碍トイフハサハルコトナシトナリ、衆生ノ煩惱惡業ニサヘラレサルナリ」等とあるが如し。大慈悲とは『觀經』の「佛心者大慈悲是」等と云ふ意を以て、『論』の性功德の「正道大慈悲」に合して此三字を出す。『論註』下_九十_一に「拔苦曰慈與樂曰悲」と。大とは『論註』上_十性功德の釋下に慈悲に三緣ありとし「一者衆生緣是小悲二者法緣是中悲三者無緣是大悲」等と云へり。是通途に依る、今の「大」の字の意は諸佛を統攝するもの、即盡十方法界に遍滿して至らざる所なきの義を顯すなり。光明を以て智慧なりと釋するはこれ常の如し。然るに今大慈悲と云ふものは、蓋し悲智二門は常に相即す自利是智にして利他是悲なり。覺體自から明かなる是智慧なり、其覺體能く他の無明の闇を破するの用あり是を慈悲と云ふ。『論』に「佛慧明淨日」と云ふ是其智相なり、「除世痴闇冥」と云ふ是其悲用なり、故に『讚阿彌陀佛偈』にも「慈光」の語あり。されば此光明智體に融する時は智慧光と名け、破滿の用に合する時は大慈悲と稱するなり。『文意』_五十_一に「光明ハ智慧ナリトシルベシ」と云へる如きは智體に約し。『銘文』_八十_一に「コノ如來ハ光明ナリ、盡十方トイフハ盡ハツクストイフ、コト

コトクトイフ、十方世界ヲツクシテコトクミチタマヘルナリ」等と云へる如きは悲用に約し給ふ、是他なし衆生の往生を全ふして如來の正覺を成じ、佛の正覺を全ふして衆生の往生を得、生佛不二自他不二の覺體なり。故に佛の所照に約すれば智慧なり、衆生往生の體に約する時は慈悲なり。今は不可思議光の徳用を顯さんとするが故に慈悲に約す。斯光明即諸佛智とは即盡十方無碍の義にして是本末無碍の義に約す。『大經』には明信佛智を結んで「明信諸佛無上智慧」と云ひ、『觀經』には「諸佛如來是法界身」と云ひ、「當座道場生諸佛家」と云ふ、是皆彌陀即諸佛々々即彌陀の義なり。相即無碍と云へども而も其中に於て本末宛然として差別あり、故に或は從本垂末の義を成ず、『大經』の華光出佛の説の如きは彌陀大悲の光明即末師諸佛の智慧となる相たなり。故に『證卷』^一には「彌陀如來從如來生示現報應化種々身也」と云ひ、『文意』^{五十}には「コノ報身ヨリ應化等ノ無量無數ノ身ヲアラハシテ等」と云ふ。或は攝末歸本の義を成ず、『般舟經』に「依念彌陀三昧」と云ひ、『法事讚』^上の「皆乘弘誓悲智双行」の如き、一切末師諸佛の智慧を集めて一彌陀本師大慈悲の光明なりとす。『文意』^{三十}に「無碍光佛ノ御カタチハ智慧ノヒカリニテマシマス乃至一切諸佛ノ智慧ヲアツメタマヘル御カタチナリ」とあるものは是なり。今偈の意は彌陀一佛の中に諸佛を統攝することを示し、以て上の一心歸命に應ずるなり。即ち一心を以て一佛に歸するは自から無碍人に歸するの趣を成し、以下の淨土の廣大無邊際無量光明土を起すなり。

| | |
|---------|---------|
| 觀彼世界無邊際 | 究竟廣大如虛空 |
| 五者佛法不思議 | 此中佛土不思議 |
| 有二種不思議力 | 斯示安樂之至德 |
| 一者業力謂法藏 | 大願業力所成就 |
| 二者正覺阿彌陀 | 法王善力所攝持 |

已下十一行二十二句は所觀の境勝妙を擧げて、以て所入の土の果徳を明し給ふなり。之前來の一因に望めて一果の相を詳説す。中に於て初九行十八句は國土功徳を明し、後二行四句は本佛功徳を明すにあり。初の中更に之を分つ時は、初五行十句は所入の土に約して其勝妙を示し、後の四行八句は能入の機に約して平等の證果なることを嘆ずるなり。今は其初なり。而して此所入の土の勝妙を明すに就ても、初の二句は正しく淨土の勝妙なることを明し、次の八句は其勝妙の由を示し給へるなり。觀彼世界無邊際、究竟廣大如虛空とは『論』に「觀彼世界相、勝過三界道、究竟如虛空、廣大無邊際」とあるに據る。『論』文上二句は清淨功徳にして下二句は量功徳なり、今之に依りて觀彼世界の四字を以て清淨功徳を示し、無邊際等の十字を以て量功徳を示し給へり。而して「觀彼世界」の四字を清淨功徳と見る所以は、清淨句は第一義諦にして、淨土莊嚴の一々皆悉く願心の所成

にして、佛極果の境界ならざるはなし。抑も清淨句は十七句の總相にして、此清淨句は涅槃の淨徳なるが故に、但に依報十七句の總相たるのみならず、又依正二十九句の總相たるなり。故に『論』^八には「一法句者謂清淨句」とし、其清淨句より器世間清淨と衆生世間清淨との二種清淨を出し、終に「如是一法句攝二種清淨義應知」と結し給へり。宗祖『眞佛土卷』、『往生文類』等に量功徳を引かすと雖も、必ず清淨功徳を出さざるはなし。故に今も亦此四字を以て清淨功徳を示し給ふと見る。されば今は清淨句に量功徳を合して以て所入妙土の徳相を嘆じ給へるなり。而して「勝過三界道」の句を略するものは「觀彼世界」の言に清淨の徳義を具するが故なり。『論註』^{上八}に「彼者安樂國也世界相者彼安樂世界清淨相也」とある。「觀彼」の「彼」は此界に對するが故に三界を出過する義自から具す。三界はこれ顛倒不淨の所、故に此界の衆生をして畢竟大安樂大清淨處に到らしめんが爲に佛は此莊嚴佛事を成就し給ふなり。故に「彼世界」と其國土を擧ぐる所超過三界道の境たることを知る。或は勝過三界道と云ふは近言なるが故に今之を略す、而して其略する所に於て、反つて超勝獨妙なることを顯すとも考へ得べきなり。

觀。『論』の偈文に觀の字を案ずるもの二ヶ所あり、一は今の清淨功徳の所、此は依報の總相なり、一は不虛作住持功徳の所、此は正報にして至要なり。『銘文』^{九丁}には二ヶ所共の觀の字を「ミソナハス」と訓釋す。然るに『證文』^{四丁}には「觀佛本願力」の觀を釋して「觀ハ願力ヲコ、ロニ

ウカヘミルトマウス、マタシルトイフコ、ロナリ」と二義を以てせり。古來の學者其說一準ならず。今其大體を列記せば、『窺班錄』の意は觀は生信方便と信從觀照の二ありとす。『流情記』の意は觀に二ありとす。一に觀照、『玄義分』^{丁五}に「言觀者照也」等と、二に觀解、『論註』^{下五}に「心縁其事曰觀々心分明曰察」と、『論註』^{上八}には「觀者觀察也」と。是なりとす。泰通院の意は觀に息慮凝心の定觀と、他力信心の觀との二あり。定觀に亦二あり、一に入信方便觀、『論』に「故我願生彼」等と云ひ、「起觀生信」と云ひ、『論註』^{下十六}に「觀此十七種莊嚴成就眞實淨信」等と云ふ是なり。二に信後味道觀、『玄義分』の釋等なりと。明教院の意は『論』所明の觀に二あり、入信方便と信後味道となり。今觀と云ふは即信後味道なり。又信を觀と名くるあり。『證文』^{丁十四}に云々すと。『義疏』の意は此觀『論』にありては五念隨一個の行法たり。今偈の意は五念門を以て法藏所修と爲して行者に約せず、此に觀と云ふは唯是論主の修多羅によりて其義を緣照するの意にして、毘婆舍那觀に非ず。『銘文』^{丁四}に「ミソナハス」と訓じ、『證文』に云云す。『證文』『化卷』の如き共に法を聞て之を心に得、法中に現するを云ふなりと。勞謙院の意は觀知觀照は初後二義に非ず、浮べみるも、浮べ知るも觀と云へば共に相續なり。初起は信知にして其相續に亘るを觀知と云ふ、信心の智慧觀なりとす。諸義各々見る所あるべきなり。今謂く『淨土論』に説く觀の意義を的確に知らんとせば、一論所明の法義の根源を知るべきなり。抑も『淨土論』は上來屢述べたるが如

く大乘修多羅の眞實即ち『大經』の眞實法義を述べ給へるなり。然も『銘文』に「世親菩薩彌陀ノ本願ヲ釋シアラハシタマヘル御コトヲ論トイフナリ」とあるが如く、一論は要するに第十八願の法義を開顯し給へるに外ならず。故に題して「無量壽經優婆提舍願生偈」と云ひ、偈文には「觀佛本願力」と云ひ、長行には「三種成就願心莊嚴」と云ひ、全く第十八願の法義を明し給ふにあり。既に一論の所明は第十八願の法義にありとせば、其所明の一心五念は實に本願の法義にして三信十念の法義なること亦必然と謂ふべきなり。『論註』に「論」を承けて二十九種莊嚴を明すに當り一々の莊嚴に本願の意を引いて述べ給ふもの此故なり。されば一心は本願の三信にして五念門は本願の十念を明し給ふと云ふべし。既に然れば其五念門行中に明し給へる觀は『觀經』所説の定善觀の如きものに非ずして、第十八願上に於ける所談のものたるべきなり。故に觀の意義は必ずや弘觀法を以て扱ふべきものたるべし。即ち第十八願の法義は聞名生信なり。故に起觀生信は畢竟するに聞名生信の意たるべし。更に論主所共の機類を見るに『論註』の指南に依れば『觀經』下々品の機なりと謂ふべし。論主が「願見阿彌陀佛普共諸衆生」と云ふ觀見は諸衆生と共にせんとする觀見なり。既に然りとせば一論所明の觀は下品の凡夫と共に味はひ得るの觀なるべし、故に定善觀に非らざるや必せり。然り而して所謂觀とは如何と云ふに「觀彼世界相」と曰ひ、「觀佛本願力」と曰ひ、「願見彌陀佛」と曰ふ、觀と見と同一の用語なり。而して見に眼見と心見の別あるも今は凡夫の堪へ得べ

き見なれば心見なること又明かなり。凡夫如何でか無漏界を眼見し得べきや、されば長行に「觀彼安樂世界見阿彌陀佛」と云へることは、三嚴の不思議力を觀見することにして、之即「觀佛本願力」の事と謂ふべし。既に本願力を觀見すると云ふは、本願力の不思議力を見定むると云ふことなり。故に觀は知ることなり。『證文』^{四丁}の「觀ハ願力ヲコ、ロニウカヘミルトマウス、マタシルトイフ」と釋し給ひ、又「信トイフハ金剛心ナリ、知トイフハシルトイフ、煩惱惡業ノ衆生ヲミチヒキタマウトシルナリ、マタ知トイフハ觀ナリ、コ、ロニウカヘオモフヲ觀トイフ、コ、ロニウカヘシルヲ知トイフナリ」と釋し給ふものは觀と知とを合して信知とつゞけて、煩惱惡業の衆生をみちびき給ふと知ることと釋し給ふ。されば一論所明の觀は信知の義なりと謂ふべし。而して此一段は所入の土徳を顯すにあれば所觀の境を述ぶるが主にして、能觀を取るに非ざるなり。無邊際等已下は量功德なり、『大經』に「恢廓廣大超勝獨妙」と云ひ、「恢廓曠蕩不可限極」と云へるもの是なり。究竟廣大とは「究竟」は畢竟に同じく至極を顯す。今蓋十方法界皆阿彌陀如來の佛界なれば對待するものなきの謂なり。如虛空とは喩なり、此に三義あり。一に無碍の義、『論註』^{下丁}に「彼國人天若意乃至隨心所成」とある此意なり。二に無相の義、『同』^八に「十方世界衆生願往生者乃至無迫迕相」とある是なり。三に廣大の義、『同』^八に「彼中衆生住如此量中乃至無有限量」とある是なり。清淨功德は彼此相對して勝過三界道と云ふ邊際あるべし。量功德は無邊際にして對待なし、其矛

盾あるが如し如何と云ふに。『義疏』の意を以て之を考ふるに、抑も邊と無邊は一異不可得にして定説ならず、邊無邊共に因縁法にして其性不可得なり。邊は無邊の邊にして邊即無邊なり。無邊は邊の無邊にして無邊即邊なり。故に能く因縁法を了得せば邊も得たり無邊も得たり局執すべからず。

『智度論』九_{丁二}には「世界有邊無邊俱爲邪見」等と云ひ、『探玄記』三_{六十}には「不壞邊而恒無邊不破無邊而恒邊」と云ふ、之通途に於ける一般の説なり。然れば清淨功德と量功德との相違するに似たるもの論主の獨説に非ず。然り而して今別途の意義を云へば情を以て趣入するは淨土門の綱格にして、指方立相は凡夫をして畢竟淨に入らしむる邊なり。之畢竟成佛の道路にして諸佛無上の方便なり。既に生じ已れば清淨處に達す、清淨はこれ法性常樂の涅槃にして唯佛智見の境界なれば法界に周遍して邊際あることなし、これ邊より入りて無邊に達し、生より入りて無生に達するなり。之を見生の火自然に滅すと云ふ。邊と無際と相違に似て實は相違にあらず、如實の相狀なること知るべきなり。

五者佛法不思議等八句は『論註』下_六に「不可思議力者乃至善住持力所攝」とある文に依る。之は上に妙土廣大なることを明す、今其を承けて此の如きの妙土何によりてか成すと其所由を示すにあり。此中初四句は總票、後四句は別釋、五者とは『論註』には『智度論』三_{三十}によりて具さに五種の不思議を列擧す。『同』上_{二十}に「然五不思議中佛法最不可思議佛能使聲聞復生無上道心眞

不可思議之至也」とありて、五種の不思議中前の四は比況にして取る所に非ず、故に今之を承けて突然に「五者」と云ひて主に就くなり。佛法不思議とは心行處滅言語道斷の故に名く。佛法の不思議より見れば前四は寧ろ可思議に墮す。而も佛法不思議中にも法藏の因願果力を以てせば、通佛法の不思議も亦可思議に墮す。されば『和讃』に「佛法不思議トイフコトハ、彌陀ノ弘誓ニナツケタリ」と云ふ是なり。上の句「究竟如虛空」は「盡十方」に應じ、今の句「不思議力」は「不可思議光如來」に應ず、身土不二の意なり。此中とは佛法不思議全く彌陀に約す、而して依正二報皆不思議なり、中に於て今は國土依報に就て談するが故に「此中」と云ふなり。佛土不思議とは器世間及衆生世間に通ずる中、別して依報器世間に就て辨す。有二種不思議力とは二種とは今謂ふ第五佛法不思議中二あるなり。故に下の業力の名は五種中の業力に非ず。彼は有漏の業を指す、今は法藏菩薩智慧清淨の無漏業なり。力とは住持を義とす。『論註』に二力を分つ所以は『大經』既に「威神力故本願力故」と云ひ、『淨土論』に性功德を明すものこれ因力なり。故に『論註』に釋して法藏菩薩の大願修起の土なりとす。主功德は是果力なり。或は不虛作住持力これ即因願果力を併せ稱するものなり。故に『論註』下_{二十}に「所言不虛作住持者依本法藏菩薩四十八願_四今日阿彌陀如來自在神力_果願以成力_力以就願」等とあり知るべし。而して此二力こそ『論註』一部の骨子なり。斯示安樂之至徳、此一句は宗祖之を加へて此二力諸佛超過の徳なることを示す。至とは最上至極の義にし

て又不可思議の義なり、大願已に超世無上の願なり、從て成就の果徳亦威神功徳不可思議なるべし、今は其至徳を土に約して明すが故に「安樂之至徳」と云ふ。一者業力謂法藏とは已下別釋にして、初は因力次は果力なり。業力とは通途にもあり、故に今「大願業力」と云ひて、法藏菩薩の智慧清淨の業にして別徳なることを示す。業とは行なり、行は願に依りて起り願は行に依りて成ず。願行相扶けて果を尅成す、故に「大願業力所成就」と云ふ。大願とは下に「發斯弘誓建此願」と云ふ是なり。業とは下に「菩薩入出五種門」と云ふ是なり。力とは因力にして此二に通ず、大願即力大業即力なり。所成就とは、上に示す所の超勝の妙土は實に此大願業力によりて成ずる所なりと明す。所謂三種成就願心莊嚴の謂なり。以て妙土の所由を明す。二者正覺阿彌陀等とは是果力なり。『論』には「正覺阿彌陀、法王善住持」と云ひ、『論註』上_{丁十六}及び下_{丁十三}に釋せるが如し。正覺とは通名、阿彌陀とは別號、法王とは本師法王の義にして一切法に於て自在を得るが故に名く。宗意に依れば本師法王の義なり。若不生者不取正覺の誓約によりて正覺を成ずるが故に、法王を正覺阿彌陀と云ふ。而して衆生は其願によりて往生を得るが故に眷屬をも亦正覺華化生と云ふなり。されば衆生の往生即法王の正覺華、法王の正覺華即衆生の心華なり、主伴功徳並に正覺の言を案するものは彌陀別徳たる所以、絶へて諸佛法に見ざる所なり。善力所攝持とは『論註』下_{丁六}の文は一善住持力所攝」と云ひ、主功徳の『論註』上_{丁十六}には「法王善力之所住持」と云ふ。今は此等の文を錯

綜して句語を造り給ふ。善とは善巧なり、攝とは攝受の義なり、以上因果二力は要するに不虛作住持の功徳にして淨土即願力成就の報土なることを顯し、其願力能く凡愚をして值遇の即時に功徳の寶海を満足せしむ。此佛廻施の因によりて凡夫をして直ちに唯佛智見の妙境界に至らしむるなりと、別願酬報の意を以て難思至徳の妙土の所由を示し給へるなり。『義疏』には今の二種力に就て其二義を存す、一には次第の義、二には相成の義、次第とは業力より善力を生ず、「三種成就願心莊嚴略説入一法句故」と云ふ是なり。相成とは『論註』の所謂「願以成力以就願」と云へるもの是なり。次第は以て眞實報土を顯し、相成は以て凡夫の往生を顯す、之を他力眞宗の基趾とす、論主之を發揮し註家之を解釋し、西河終南承けて破顯し、煌々として此義を敷揚す」等と釋して、『古徳傳』六_{丁十三}、『眞佛土卷』九_{丁十}、『口傳鈔』_{丁十二}、『改邪鈔』_{七丁三十}等の文を引て其相傳を證す、見るべし。

| | |
|---------|---------|
| 女人根缺二乘種 | 安樂淨刹永不生 |
| 如來淨華諸聖衆 | 法藏正覺華化生 |
| 諸機本則三三品 | 今無一二之殊異 |
| 同一念佛無別道 | 猶如淄澠一味也 |

上は國土功徳を明すに就て、所入の土の勝徳に約して之を頌す。今此四行八句は能入の機の平等

證果を得ることを嘆じて以て土徳の超勝高妙なることを明し給ふなり。大義門功德及眷屬功德の『論』及『論註』の文を錯綜して句語を造り給ふ。此中初一行は純一大乗なる義を明し、次一行は同一化生の徳を示し、次一行は果位の平等、次一行は一因無差の義を明し、以て果徳平等の意を讚し給へるなり。初一行の文は『論』の偈「大乘善根界、等無譏嫌名、女人及根缺、二乘種不生」の文、及「莊嚴大義門功德成就者乃至淨土果報離二種譏嫌應知」の文に依る。女人と根缺と二乗との三は皆淨土に無き所なることを示す。偈には「等無譏嫌名」と云ひ、長行には釋して「等者平等一相故」と云ひ以て彼土の純一大乗界なることを成す。女人は世出世に於て衰損する甚だしきが故なり。『智度論』十四^丁十六に廣説せり。根缺は三寶の境に於て見聞し諮請すること能はずして亦是聖道を妨碍するなり、故に八難の中に攝入す。二乗を擧ぐるものに聲聞の苦を畏れ、獨覺の大悲を捨つるものは共に佛道を障碍すること、前二の女人根缺よりも重きが故なり。若此心を生ずる時は菩薩の死と名けて、嫌厭し畏怖することは寧ろ惡道よりも甚しとす。而して淨土に女人なきは三十五願の力、根缺なきは四十一願の力、聲聞なきは十一願の力なり。以て自から上の大願業力所成就の文に應ずる意あり。女人と根缺とは體も名もなしと雖も、聲聞は名のみあり。蓋し是譏嫌の名に非ずして所謂因順余方の名なり。而して其名を順ずるものは却つて生ずべからざるものを生せしむる佛力の不思議を顯すなり。以て上の不思議力を示す。種とは『論註』には種子の義を取る、『玄義分』

には心とす、此則二乘に屬する言なり。或は種類の義とす。此時は總じて上の女人根缺に通ずるなり。安樂淨刹とは『經』に「清淨安穩微妙快樂」等と云へり。『論』の偈に「大乘善根界」と云ふものは大義門功德を以て彼土に名くるなり。今直ちに別號を擧ぐるものは上の「安樂之至徳」に應ずるの意あり。永生とは『論註』上^丁十八には「根敗種子畢竟不生」とあり、畢竟を永と述ぶ。不生の生は淨土に於ける出生の義にして來生にあらず。『論註』上^丁十八の釋見るべし。秦通院は彌陀の淨土に聲聞ありと説くに就て七門を以て料簡せり。一に因順余方の故に、二に所作佛事に就くが故に、三に其本名に因るが故に、四に彌陀攝化の神力を顯さんが爲の故に、五に小機を引かんが爲の故に、六に佛願小機を簡はざることを示さんが爲の故に、七に彌陀性起の法門海を票するが故にと。如來淨華諸聖衆等の二句は同一化生の徳を頌す。上の大義門功德は土體に約して平等一相を示す、今は往生相に約して平等なることを顯す。『論』に「如來淨華衆、正覺華化生」とある是其據なり。明教院は上の「女人」等は國土自然の徳能く其人をして平等一相の妙果に契はしむるの義を示し、下の「諸機」等は果位平等を示す。今其中間に在りて義上下を貫き釣鎖連環すと云へり。如來淨華とは次の句の正覺華と同じ、其如來淨華と云ふは如來清淨本願所生の妙華なるが故なり。又如來所住持の清淨妙華なるが故なり。淨は無漏を稱す。諸聖衆とは正覺華化生の衆に名く。諸聖の二字は宗祖の加ふる所にして、諸は眷屬無量を示す、其無量の大衆盡く同一聖なり。聖とは彼土に凡

夫なきことを顯す。法藏とは此二字亦偈になし宗祖の加ふる所なり。上の句は果に約して如來と云ひ、今は因に約して法藏と云ふ。是『觀經』に「如此妙華是本法藏比丘願力所成」とあり、今此文に依り願心莊嚴の義を顯すなり。正覺華とは即佛座にして『論』に所謂「無量大寶王、微妙淨華台」と云ふ是なり。正覺成就の佛の座なるが故に正覺華と云ふ。佛此華上に於て正覺を成ずるが如く、眷屬の諸聖衆も亦此華中に於て化生するが故に華化生と云ふ。而して其然る所以如何となればこれ法藏因中の所願にして、第十八願に若不生者不取正覺と誓ふ。佛の正覺は此願力に依りて成ず、故に衆生の往生を全ふして彌陀正覺を成ずるなり。既に衆生の往生を全ふして成じ給へる正覺なるが故に、衆生の往生は全く彌陀正覺によりて成せらるべし。故に彌陀の如く衆生も亦此華中より化生す。此清淨願心を名けて正覺の心蓮華と云ふ。『安心決定鈔』^{五丁}に「機法一體ノ正覺成シタマヘル慈悲ノ御コ、ロノアラハレタマヘル心蓮華ヲ正覺華トハイフナリ」と此意なり。而して淨華衆の目因果に通ず、若因に約すれば穢土の假名人を指す、『論』^七に菩薩四種正行の第一の下に「開諸衆生淤泥華」と云ひ、『論註』^{下二十}に之を釋して「此喻凡夫在煩惱泥中爲菩薩開導能生佛正覺華」と云へり。今偈鸞師章に之を頌す、此因に約して釋するものにして同一念佛の義なり。若果に約すれば淨土内の假名人を指す。即我等因にありて此正覺の心蓮華、佛の清淨願心を領受するが故に彼土に至りて同一化生するなり。之を正覺華生と云ふ。而して此因果の二意自ら上の法藏願力と彌陀正覺

の住持力とに應ずるなり。前句に「如來淨華」と云ひ、次句に「法藏正覺華」と云ふもの煩重に似たり。之に就き泰通院は云く、淨華は果力に就て能持如所持淨を示し、上の「二者正覺阿彌陀、法王善力所攝持」に應ず。正覺華は因力に就き能成法藏所成正覺を示し、上の「一者業力謂法藏、大願業力所成就」に應ず。故に煩重に非すとせり。化生とは『經』に「於七寶華中自然化生」と云ふ是なり。有漏業感の雜生に簡び、邊地疑城の胎生に簡ぶの名なり。諸機本則三三品等の二句は能入の機の果位平等にして眞實報土には品位階次の差別なき徳を明すなり、次句と共に『論註』の釋に據る。『論註』^{下十四}に「願往生者本則三三之品今無一二之殊亦如溜澀一味焉可思議」とある是なり。諸機とは願往生者の性得機類一ならざるを示す、『論註』には「願往生者」と云ふ。本とは次の今に對する詞。現生に約すれば未發信の前を「本」と云ひ、發信已後を「今」と云ふ、則發信已前は諸機各別なるも、一度捨自歸他せば賢愚善惡を見ず、何れも同一信心の輩なり。又當來に約すれば未得生の前を「本」と云ひ、得生の後を「今」と云ふ。未發信の時は機類千差にして行業萬別なるも一度獲信せば唯是弘願信心の一機一因となり、此一因によりて同一の果を成ずるなり。故に今は殊異なしとす。此義ありと雖も當來に約する義蓋し今文の正意ならん。『和讚』に「如來清淨本願ノ、無生ノ生ナリケレハ」等と云ひ、左訓に「ホウトニムマレヌレハヒトリモカハルコトナシトナリ」とあり。三三品とは『六要』^{四丁}に二義を出す。一に名三體三、二に九品なり。若大義門の『論註』

釋を解する時は名三體三の義を可とすべきも、今偈の意は三三九品の義を親しとす。宗祖『和讃』の左訓に「モトハコ、ノシナノシユシヤウノ」等とあり。九品といへども觀經九品の如く凡夫に局らず、今は凡聖を簡ばざるなり。『行卷』^{三十一}に「大小聖人重輕惡人皆同齊乃至同一念佛無別道故」とある是なり。今無とは往生後を指す、品位階次を論せざる果なり。一^二とは『六要』亦二義を出す、一には體と名、一には一品二品と。今謂く一二とは彼此と云ふと同様なり、報土の果報は彼此の差別なく品位階次なく同一なりと顯すにあり。同一念佛無別道等の二句は一因にして無差別なることを示すなり、斯に一果平等を顯すなり。同一念佛等、之は眷屬功德の『論註』釋に依りて法を明し、大義門功德の釋によりて喩を擧ぐるものは上の二句を承けて因の平等を以て果の平等の所由となす意なり。『眞佛土卷』^{三十二}に「良假佛土業因千差土複應千差是名方便化身化土」とあり。然れば因平等にして果亦平等なるもの眞佛土たる所以なり。因一を以て果一を顯揚し給ふ意伺ふべし。同一とは齊同一味なり。念佛とは法に約すれば名號、機に約すれば信心なり。凡そ今家にありては念佛の扱方に三義あり。一に名號、二に信心、三に稱名なり。名號とは是所聞の法體にして即佛の嘉號を念佛と云ふ。南無は念にして阿彌陀佛は佛なり。『行卷』^五に「念佛則是南無阿彌陀佛」と云ひ『正信偈』に「彌陀佛本願念佛」と云ひ、『和讃』に「眞宗念佛キ、ヘツ、」と云ふ。是等皆名號を謂うて念佛との給へるなり。二に信心を念佛と云ふは能信は念にして所信は佛なり。『易行品』^九に

本願の三信を述べて「念我」と云ひ、偈頌には「心念阿彌陀佛」と云へり。『正信偈』には「憶念彌陀佛本願」と云ひ、『御一代聞書』に「彌陀ヲタノムガ念佛ナリ」と、是等皆信心を謂うて念佛との給へるなり。三に稱名を念佛と云ふ。念は稱念、佛は佛名、『化土卷』^{本^{十七}}に專修を釋して「專修者唯稱念佛名離自力之心」と云ふ。『寶章』屢々稱名念佛と云ひ、或は單に念佛と云ふ是なり。此三信行に約すれば第一と第三は行にして第二は信なり。若機法に分ては第一は法にして第二第三は機なり。而も此三相即して一にあらず異にあらず、之を弘願眞宗の念佛とす。言南無者即是歸命の故に名號常に信心を全ふし、至心則是至徳の尊號を以て體とするが故に、信心亦名號の外になし、機法一體能所不二の妙行信なり。而して其然る所以は佛成就の正覺は若不生者不取正覺の願成就なれば機法一體にして衆生の往生を全ふせる正覺なり。而して其正覺の果徳を名に施すもの此名號六字なれば此名號法體は即衆生往生の心行を佛邊に成就し給へるものなり。而して衆生の能信は其機法一體の名號聞名の一念に心中に印現するのみ。衆生の能行は其名號の衆生の口頭に露現するのみなり。されば信心とて六字の外になく信心の體名號なり。稱名亦依止無上信心にして名號全現信心露顯なり。故に此三相即して異ならず、而も其別は判然として混一ならず。故に行者信因決定の時尅を的示する時は局りて一念の信心にあり、之を信心正因と云ふ。其此を所信の本に歸する時は本願名號正定業と云ふ。其稱名に約して念々不捨者は名正定業と讚する者は法體信心の徳用を稱名の所

に於て披露するのみなり。決して稱名の功を見ず、作即無作に就て業因を談ず。同一念佛の念佛は以上三義の中第一と第二とを總稱するなり。『和讃』に「無上寶珠ノ名號ト、眞實信心ヒトツニテ」等の給ふ是なり。上に論主の「一心歸命」等の二句を以て能入の因を明す。「盡十方」の徳を一心歸命の能歸に攝する時はこれ一の信心なり。若「一心歸命」を以て「盡十方」等の法に攝する時は名號なり。之を指して「同一念佛」と云ふ。無別道とは道は能通の義にして因を謂ふ、諸機各別の業因に簡ぶが故に無別と云ふ、之は相待に約して云ふ。若絶對に約して云へば念佛の一法即誓願一佛乘の故に一切凡聖の生死を離るゝは弘願の一道にあるのみ、是を無別道と云ふ。『論註』には「故」の字あり、今は偈句の都合上之を省き、「ケレハナリ」の點聲を以て其意を示し給へり。此一句一因を以て上の一果を成し給ふなり。猶如淄澠一味也とは正しく證位平等を喻顯するにあり。淄澠は共に水の名なり、合法して一味に歸するを以て諸機齊入平等證果なるの喩とす。

觀彼如來本願力 凡愚遇無空過者

一心專念速滿足 眞實功德大寶海

此四句は本佛功德を頌して以て、上來の所觀の境の勝相に就て果徳を明すの義を結び給へるなり。『論』には佛功德を明すに八種を以てし給ふ、然りと雖も要は第八の不虛作住持功德に結歸す。彼

三業功德の如きも畢竟平等なるは、衆生虛誑の三業を對治せんが爲なり。而し如何退治すとならば本願力を以て衆生に廻施し、功德寶海を滿足せしむるにあり。故に此一徳を以て佛八種功德を該攝す。佛功德を統攝する所には三種莊嚴を悉く攝盡し、以て行信因果往還の諸法一切を盡す。故に『證卷』^{丁五}には淨入願心と利行滿足の二章の文を綜合して「若因果無有一事非阿彌陀如來清淨願心之所廻向成就」等云ひ、『正信偈』には「報土因果顯誓願」と云ふ。皆是『論』の不虛作住持功德を「覈求其本」の釋に照し、其要を述し給へるなり。勞謙院此二句を科して「結歸他力」と云ひ、上成起下と釋す、是意は即上を成しては因果皆願力所成なりと成し、下の「菩薩入出五種門」等の願力廻向の義を起すものとなす義なり。觀の義は上述の如し。信と同じく見る。『論』の上は觀を以て聞の意義を詳説明し給ふものと伺ふべきなり。而して觀は『論』の上は五念隨一なれば局りて相續にあるべし、何ぞ今信と同するやと云ふに、今の所明は觀行にあらずして唯其勝境を如實に了知するに於て觀の名を立つるのみ。換言せば能令速滿足の本願力を如實に領知するに名づくるのみ。されば信の異名と云ふべきなり。觀と信と相即することは恰も聞と信と相即するが如し。如何んとなれば、本『論』に「觀佛本願力」とある觀は要するに佛の本願力に、遇無空過者の功德成就し給へることを信知するなり。而して其かく伺ふものは本『論』所明の法義の基調に依る。既に上述せるが如く『淨土論』所明の法義は『大經』所說の眞實法義なり。故に所謂「觀佛本願力」とは

「聞其名號」と同致たるべきなり。故に觀と云ふは聞と同致たり。通途にありても聞思を釋するに聞慧は聽聞に依り文を以て先とし、義を觀するものなり、思慧は思慮に依りて義を以て先とし、文を觀するなりとし、而も聞思の二慧は是散にして定に非ずとせり。されば今謂ふ觀も名號の義を觀するの觀にして、名號の義を聞くの聞と同致と云ふべし。『大經』の法義を釋し給ふ『淨土論』に聞の意義を明かにすべく觀の字を使用し給ふもの怪むに足らず、寧ろ論主の釋功と云ふべきなり。明教院も信を名けて觀となすなりとし、『大集經』九_下に廣く二十八ヶの觀を説き、結して一切の淨信名けて觀となすの文を引き、又化卷の諦觀彼國の釋に本願成就の盡十方無碍光如來を觀知すべしの文を引きて之に合し證明せり。彼如來とは上に云ふ「不可思議光如來」の文に應ず、即不可思議如來を指して彼と云ふ。本願力とは『論註』下_{二十}に不虛作住持を釋して「依本法藏菩薩四十八願今日阿彌陀如來自在神力」等と、本願と神力と、因願と果力とに分ちて釋し給へり。是若上の大願業力に準する時は本願之力と解するも亦可なり。本願とは總じては四十八願別しては第十八願、『論註』に依れば三願を的取す、此因果往還に約するなり。凡愚とは凡は凡庸、愚は無智、凡にして愚乃ち底下の劣機なり。此「凡愚」と次の「一心專念」は『論』になき所にして今之を加へ給ふ。蓋し深意あり。宗祖は常に一心の法と凡愚の機とを對照し用ひて第十八願の特色を知らせ給ふ。『正信偈』の「爲度群生彰一心」の如き、『證卷』三_下の「論主宣布廣大無碍一心普偏開化雜染堪忍群

萌」等の如き是なり。而して皆是『論註』釋の指南に依り給ふ。『論註』の首に先づ「五濁無佛時」との給ひ、廻向章の釋『論註』上_{三十}には問答を設け、『大經』の文を引きて結するに「案此而言一切外凡夫人皆得往生」と云ひ、『觀經』の文を引きて結するに「以此經證明知下品凡夫但令不誹謗正法信佛因緣皆得往生」とあり。所被を論じては底下の凡愚なりと明し給ふ。是宗祖の着眼點なり。『和讃』に「論主ノ一心トトケルヲハ、曇鸞大師ノミコトニハ、煩惱成就ノソレラカ、他力ノ信トノヘタマフ」とあり。宗祖此指南により今偈にも『論』になき所の凡愚と一心とを加へ給ふ。以て大乘修多羅の眞實功德の超過の法なることを顯はし給へるなり。遇無空過者とは遇は値なり、乃見聞することを云ふ。『證文』四_下に「遇ハマウアフトイフ、マウアウトマウスハ本願力ヲ信スルナリ」とあり。『論』の長行釋には此遇を「即見彼佛」との給へり、即彼土の見佛なり。然るに宗祖之を此土の聞信との給ふもの如何と云ふに、泰通院四義を以て之を解す。一に因果互顯なり、一の遇の字彼土見佛と此土聞名との二義あり、論主と高祖と因果各其一を擧げて他を略するなり。二に示名體不二法徳、論主は體に就て見と云ひ、高祖は名に就て聞と云ふ。三に示佛願聞爲要、名體不二なりと雖も凡夫に被る時は體を見ること難く名を聞く事は易し、故に超世の願意聞名を肝要とす。願文「聞我名號」、「聞我名字」の言は十四ヶ所に及ぶも、未だ一も「見我身相」「觀我國土」と誓ひ給ふことなし。是大悲の至極を顯して聞名信樂を生因とし給ふなり。四に示稱聞名爲見佛、『北

本涅槃』二十七^{二十}に曰く「善男子見有二種一者眼見二者聞見」と、『文珠所說摩訶般若經』に曰く「若得聞時信解受持乃至當知此人即是見佛」と、諸佛猶此事あり、況んや別願酬報の彌陀佛に於てをやと云へり。無空過者とは『證文』^{四丁}に「ムナシクスタルヒトナシトイフハ、信心アランヒトムナシク生死ニト、マルコトナシトナリ」と、即不虛作の徳を顯して佛力住持する所以を明す。不虛作住持の名特に遇無空過者によりて意義あり。一心專念の四字亦『論』の偈になし、長行釋作願門の下に「一心專念」の文字あり、今彼を取り來りて遇の一字を顯揚し給ふなり。然るに作願門の一心は起行相續に約す、今何ぞ初起の遇に此語を加ふるや、謂く作願門の一心專念は起行相續なり、今夫れを取り來りて遇の意義を顯さんとする其扱方の異なること明かなり、抑も五念隨一の作願は是意業にして今と同じからずと雖も、若一心を五念に攝して論する時は作願門の一心は即初起の相續するものなれば、其義相通するの意なくんばあるべからず。恰も念々無遺乘彼願力の乘は無疑無慮乘彼願力の乗と初後の別あるも、其義相通するが如し。今全く彼と同じと云ふに非ずと雖も彼語を取り來りて用ふるなり。一心專念を解するに古來二義あり、一には曰く「一心」は大信、「專念」は太行、即三信十念なり。『行卷』^四に「云專念者即一行形無二行也」とある是なりとす。二に「一心」とは即專心、「專念」も亦信を指す、專心無雜の謂なり。『行』『信』兩卷に專念を行とし給ふが如きは、終南の釋に依り給ふが故なり。今は論文を取り給ふ、作願門中何ぞ行を論せんや、所

據の別なる知るべし。又『行』『信』二卷は行と信との分齊を判す、今は遇の所にある速滿の利益を顯すにあり、何ぞ口稱を待ちて後速滿寶海を論せんや、文義の別知るべし。『銘文』^丁に此文を釋して「本願力ヲ信樂スルヒトハ、スミヤカニトク、功德ノ大寶海ヲ、信者ノソノミニ満足セシムルナリ」と、信に約して速疾を示し給ひ、未だ曾て行の沙汰に及ばずとす。今後義に依る。謂く『論』の偈を見るに偈中に稱名を説かず、漸く解義分に至りて讚嘆門下に初て「稱彼如來名」を出す、『論註』長行釋の五念を以て偈頌に配釋して「盡十方」等の八字を讚嘆門に當つると雖も、是は偈頌の當面釋にあらず、已に然れば偈は一心を以て貫き、涅槃真因唯爲信心の旨を明し一因一果の旨を述ぶるなり。『和讃』に「天親論主ハ一心ニ」等と云ふ是なり、「本願力ニ乘スレバ」と云ふは一心即隨順願力を顯すのみ。而して其本願力を説くものは不虛作の一偈にして遇の一字其因を示す。值遇は即聞名にして又是一心歸命を指す、且つ本偈の語勢全く『經』の「其佛本願力聞名欲往生」等の文に合す。彼は聞名を以て「自致不退轉」の益を説き、此は值遇に約して速滿寶海の徳を示す。今此『二門偈』も亦初は一因一果の旨を讚す、一因とは是一心なり、讚嘆門の稱名の如きは今故らに之を挾むを要せず。速満足とは『證文』^{五丁}に「速ハスミヤカニトイフ、トキコト、イフナリ、滿ハミットイフ、足ハタリヌトイフ」と。速は頓極頓速なり、滿は圓融圓滿なり、以て弘願の勝益を示す、此但に空しく過ぎざるのみならず、一念に能く法界無余の功德を攝して業事成辯し、往生を決

得ず、具縛の凡愚刹那に超越するが故に頓速と云ひ、萬徳を具足して缺くる所なきが故に圓滿なり。論の偈には「能令」の二字あり、遇の因も速の果も共に願力によりて然らしむるを能令と云ふ、他力廻向を顯揚するに緊要なる文字なり、然るに今之を略するものは、今の略却つて下に至りて廣に約して五念門を具詳細説し、以て本佛廻向を示すの釋に待つ意なり。「満足」に二義あり、若現益に約する時は聞信一念の時至徳具足するなり。若當益に約する時は、『經』に「疾得清淨處」と云ひ、『論』に「速得成就阿耨多羅三藐三菩提」と云ふものは是なり。『信卷』末^丁に「大願清淨報土不云品位階次一念須臾頃速疾超證無上正眞道」と云へる此義なり。眞實功德とは『義疏』に釋して云く、『論』の偈には功德とあり、今眞實の二字を加へ給ふ意、之を成上起下中に釋して名號と爲すに同ず、『論』は寂滅平等眞如を以て名て功德と爲す、彼は則淨土の菩薩の所證なり、今は乃ち穢土假名人の所得なり。然るに所得と所證と二にして分つべからず。何ぞや性を全をして修起せしなれば則此修即性、所得として所證に非ざるはなし。故に名號實相法と云ふ。眞如一實功德寶海と云ふ。修を全ふして性を成するなれば則性即修、所證として所得に非ざるはなし。『眞佛土卷』^{九丁}に「到安樂佛國即顯佛性由本願力廻向故」と曰ふ、所得所證終に其歸を同じくす。所得の淨土に顯現するもの眞如なり、所證の穢土に流行するもの名號なり、當さに知るべし、論主偈主眞實相應互に隱顯するなりとせり。今謂く「眞實功德」其體に約すれば二清三嚴皆一法句に入る、眞實智慧

無爲法身是を眞實功德と云ふ。其名に約すれば一句の尊號なり、諸善諸徳を攝在す、之を眞如一實功德寶海と云ふ。衆生此名號を聞信する時佛の眞實智慧に契當す。之を眞實信心と云ふ。其徳を嘆じて眞如一實の信海と云ふ。然れども具縛の凡夫此土にありて一實眞如の妙理を證悟すること能はず臨終の刹那此穢身をすて、彼法性常樂を證す、之を難思議往生と云ふ。而して是皆本願力なり。大寶海とは『證文』^{二十丁}に「大寶海ハヨロツノ善根功德ミチキハマルヲ海ニタトヘタマフ、コノ功德ヲヨク信スルヒトノコ、ロノウチニ、スミヤカニトクミチタリヌト、シラシメントナリ」と云ふ。祖釋に二意あり、一に功德圓滿を以て義とす、海水の無量寶珠の相を以て喩とす。二に不簡衆機を以て義とす。『和讃』に「功德ノ寶海ミチノテ」と云ふは初義なり。「煩惱ノ濁水ヘタテナシ」とは後義なり。今此四句は、上來所明の因果悉く佛願力に由るものなる旨を明すにあり。而して上を成するのみならず、又自から下を起すの趣あり。其下入出五門は法藏菩薩之を修して以て衆生に廻施し、衆生をして五念二利の功德を満足せしめ給ふことを明し給ふもの、是即今偈如來の本願力凡愚をして遇の一念に速かに功德大寶海を満足せしむるの義を廣説し給ふに外ならざればなり。之を以て見れば今偈の「能令」の二字を略し給ふもの、其實は略し給ふに非らずして却つて下に至りて廣説するに待ち給ふものなりと知る。

菩薩入出五種門 自利利他行成就
不可思議兆載劫 漸次成就五種門

略門に約して一因一果の法義を明すこと上に終る、已下三十行は廣門に約して五因五果の法門を開き、以て正しく入出二門を示すにあり、之本『論』の所明深義を開顯するものにして、今偈の興由茲にありとす。如何となれば『淨土論』の所明に五因五果に約する其深意を知らざる時は、因は漸修にして果は漸成の自力修相に似たり。然るに『論』は大乗修多羅の眞實に依りて法義を顯揚し給ふものなるが故に、其述べ給ふ所亦唯眞實の法義なるべきなり。而して其三部經の眞實とは如來の本願なるが故に、『論』には廣く本願力廻向を説きて、明かに他力の極致を開示し給ふにあり。故に其五因五果は此本願力廻向の因果なるべく、五因五果は要するに其體一因一果なり。一因とは一心歸命の信心なり、一果とは速得菩提の涅槃なり。然れば「漸次成就」と云ふは自力漸修に非ずして之廣門に約するもの、「速得菩提」と云ふは之廣門に即する略門なり。廣門に約して「漸次成就」と顯したる所にて、佛果に至る五念二利の因徳周備なることを知り、略門に約して「速得菩提」と云ふ所にて、二利圓滿の一心の一因が爲の一果なることを知る。一心の一因に依りて菩提の一果を得、此を一因一果と云ふ。されば五念は一心中の妙差別なり、一因は初起の一心にして其一因の徳

相を開けば五念二利となる。一因は信、五念は行、信行不二融即なるが故に、初起の一念より信行具足廣略相入なるものなり。此信一念に具する五念の行徳、總攝して云へば即是其行、此即是其行の二利の行徳衆生の三業行に流發する時、相續起行の五念を成ず、其時は唯是報恩の經營たるべきのみ。自力修行の漸修漸成と永く其趣を異にせることを知る。促につけば一心の體、延につけば相續報恩の行業なり、此を一因一果五因五果の廣略相即延促無碍自在の法とするなり。今偈前に略に約する一段は南無にして衆生能歸の信心なり。後に廣に約する一段は阿彌陀佛にして衆生所領の大行なり。約略の南無に据して約廣の五念行を取れば、南無歸命の一念に阿彌陀佛即是其行を具すると云ふ相た、此を「一心專念速満足」等と云ふ。廣に約して明す時は五念は此功德大寶海に攝まりて一心の一因能く五念二利の徳を周備して阿耨菩提の大果を開く所以となり。又五果は一果中の妙波瀾となる。一果とは初生の證果此を略門平等と云ふ。此略門より廣門差別を示現する相たが五果なり、故に一果開けば五果となる。五果とは近大等の五なり、彼土に至りて漸く増進の相た之一果中の妙波瀾にして種々法味樂の相たなり。之を廣門と云ふ。廣の當體略、略の當體廣廣略相入の故に五果差別の當體一果平等を妨げざるなり。一果平等の所に五果差別宛然たり。此如くなるが故に一論の深旨唯本願の因果を顯開し給ふものにして、而も此論の玄旨を發揮するもの鸞師の釋功なり。「天親菩薩ノミコトヲモ」等と『和讃』にあるもの此意を讀し給へるなり。而して此鸞師の開

顯を得て能く『論』の意を達觀し其深義を顯揚し給ふものは今偈なり。故に初に略に約して一因一果を明し、之を「觀彼如來本願力」等と佛徳に結し、今句以下は此本願力の功徳を廣に約して五因果を以て示し給ふ。然り而して今偈廣に約する所明の所據を云へば、『淨土論』^九利行満足章に「復有五種門漸次成就五種功徳」と云ひ、『同』次下に「菩薩入四種門自利行成就應知、菩薩出第五門廻向利益他行成就應知菩薩如是修五門行自利々他速得成就阿耨多羅三藐三菩提」等とある是なり。此文初に「有五種門漸次成就五種功徳」と云ふは果の五門にして、此五門に入と出との徳あることを示す。而して一々之を釋するに因果對明す。「入第一門者以禮拜阿彌陀佛爲生彼國」等と云ふもの因の五念中の禮拜門なり。「得生安樂世界是名入第一門」と云ふもの此果の五門中の第一近門を顯すなり。第二門以下同じく因果對明せり。中に於て『論』は果を明すを以て主とす、之票する所果の五門なるが故なり。而して因の五門を明すものは正しく起觀生信章にあり。今此『二門偈』亦利行満足章に依りて説をなし給ふと雖も因の五念門を明すを以て正とす。之『論』と左右する所なり。

初二十六行は行に約して漸成を示し、後四行は心に約して速得を明すなり。初の中二句は總じて入出二門を票し如來の因行を明し、以て衆生に廻施し給ふ根本を示し給ふ。菩薩とは法藏菩薩のことなり、點聲及び下の「無碍光佛因地時」とあるに依りて之を知る。『論』には善男子善女人を菩薩と云ふ、法藏菩薩なること知り難し。然りと雖も『論註』の指南によりて一論所明の幽旨を伺ふ時

は他力廻向の妙旨明了となる。宗祖は其幽旨を啓きて入出二門他力廻向なることを釋顯し給ふなり。故に『論』に「菩薩」とのみあるを直ちに法藏菩薩のこととし、五念は法藏の所修として明し給ふ。然り而して此宗祖の意を體して伺へば、本『論』に五念五果皆行者の所修所得に約し給ふものは、末を以て本を顯すもの『論註』に所謂他利とは是なり。又今『偈』に五念五果を法藏に約し給ふものは末を取りて本に還へすものにして、衆生領受の末を以て法藏因位の本に還へすなり。『論註』に所謂利他とは是なり、是を他利利他の深義とす。入出とは『論』には入出を分ちて入四種門出第五門と云ふ、今は之を合して「入出五種門」と云ふ。故に入出とは要するに五念門を修することと云ふ。五種門とは明教院云く、此如來因中衆生に代りて五念の大行を修し二利を満足することを示す。此五念の中一切諸法罄きて盡きざるはなし、此即願心所起の故に下の結文に曰く「無碍光佛因地時」等と、今は則行に約し下は願に約す、影略互顯なりとせり。自利他行成就とは『經』に「自利利人人我兼利」とあり、又「以大莊嚴具足修行令諸衆生功徳成就」とある是なり。入四種門は自利行成就、出第五門は利他行成就なり。行とは因行を云ふ、能く果海に進趣すべきに名く。成就とは其因の滿するを云ふ。不可思議光載劫、此一句は『論』になし、『大經』の「於不可思議光載永劫積植菩薩無量德行」の文により、菩薩修行の長時なることを示し、次の「漸次成就」に應ずる意なり。漸次成就五種門とは『論』の「漸次成就五種」の文に依るものにして、即五功徳門のこ

となり。漸次とは法藏菩薩一切衆生に代りて修し給ふもの、一朝一夕のことに非ず、兆載永劫の長時漸成なり。而して漸々次第に其功成就し給ふ、蓋し廻施し給ふ時は既に成就の上にして一念頓極なり。『義疏』に法藏菩薩發願修行の位既に聖修性と名く、眞如を體得し、諸法無常を證するもの豈初後隔別して相該攝せざることを得んや。當に知るべし、此次第即無次第圓融中行布を論ずるなりと。然るべし。

何等名爲五念門

禮讚作願觀察廻

今句已下は別して五門の一々を明すなり。中に於て此二句は徵起列名す。『論』に「何等五念門一者禮拜門」等と云ふ三十字を頌す。上に「入出五種門」と云ふ因の五種門即五念門なり、故に今之を承けて徵起し、次に五念の名を列擧す。而も偈句の都合によりて禮拜讚嘆廻向は各一字を以て略稱す。蓋し五念は菩薩所修の一切妙行を攝盡す。『六要』四^{三十一}に「一切菩薩自初發意至成佛果悉皆莫非五念修行」と云ふものは是なり。念とは心念、境を守りて失はざるを念と云ふ、五行は身口意の三業に亘たる。今専ら心念を以て名くるものは、蓋し一切の行業は皆心念によりて起るが故なり。若行者の所修に約して之を論ずれば、五念皆一心の信心に依止して生ずるが故なればなり。『論註』に「我一心」を釋して「言念無碍光如來」等と云ふ。「一心」は是能念、「無碍光如來」は是所念なり。

り。能所相應する一心即是一念なり。念の字は不忘の義なれば後續に限るが如しと雖も『易行品』の「念我」を『正信偈』に「憶念彌陀佛本願」と云ふが如きは初起に約するなり。此念佛の一心三業に發動して五門となる、即五念佛門なり、信行相即の故に之を五念門と名く。勞謙院此二句を衆生の依行を明すと科し、之を解して云く、今偈にありて衆生の受行を明すものは、『論』文には起觀生信を明して「若善男子善女人修五念門行成就畢竟得生安樂國土見彼阿彌陀佛何等五念門」等とある是に依る。『論』は因果對明すと雖も、今偈文は正しく因の五念の義を取る。此因の五念を明すに就て、前後の文を見るに或は約法體、或は約機邊一準ならず。先此徵票は上の總明を承く。然るに上の總明は如來の因行に約す、後の結文も「無碍光佛因地時」等と佛邊に約し給ふ。今別明の文は其中間にありて機の依行に約す。如此機法錯綜するものは機の受行全く此佛因中五門の行なることを顯さんと欲するなり。深く此旨に達する時は「何等名爲」等の二句機邊に約して取るも得たり佛邊に約して取るも得たり。然し今文に頌する所は全く『論』の機受行を示すの文なり。故に知る行者の能行に就て徵票せるもの。行者の能行とは云へども而も行者自の行に非ず、全く如來の行を行するが故に、行じて而も行せず、行せずして而も行す。爰を以て行者の能行を待ちて始めて成する所の行に非ず、一心中に自然に二利の行を成するなり。斯くの如く一心相續の所に五念流發する、此を他力の能行とす、此他力の深義を顯すが故に機法錯綜して明し給ふなりとせり。今は此解に従ふ。

云何禮拜身業禮 阿彌陀佛正遍知
 善巧方便諸群生 爲生安樂國意故
 卽是名入第一門 亦是名爲入近門

已下五念門の一々を別明す。今初に禮拜門なり。『論』^三に「云何禮拜身業禮阿彌陀如來應正遍知爲生彼國意故」と云ふ、又^丁には「入第一門者以禮拜阿彌陀佛生彼國故得生安樂世界是名入第一門」と云ふ是其據なり。六句中初四句は行相にして後二句は其利益なり。行相を示すの文は起觀生信の『論』文に依り、行益を明す文は利行満足章の『論』文に依る。初行相を明す文約佛約生に就て諸家に異説あり。『窺班錄』は機法混明とし。『大意』は局りて約佛とし。『流情記』は云何禮拜の徵は所依所禮禮意の三を問ふものにして、身業禮の三字は如來の因行にして所依を答へ、善巧方便已下は衆生歸禮の意にして禮意を答ふもの、而して又身業禮の字正遍知に說至して衆生能歸の敬相を示すものなりと云へり。明教院の意は「云何禮拜」は行者の能禮を徵し、「身業禮」は佛の因行にして衆生依行の本を知らしむ、「善巧方便」等は行者歸禮の意、阿彌陀佛の一句中間にありて義兩向を兼ね、上に向へば所禮の境となり、下に向へば衆生をして願生心を生せしむるの本を示すなりと云へり。『義疏』の意は初の句は如來行を明し、「阿彌陀佛」等は衆生所得の功德を明す。夫五念門は如

來の修する所、其衆生に向ふは一願力と爲す、衆生の受持他なし之を心にすれば則信心之を行にすれば則稱名のみ、今の生安樂國意蓋し所謂得生想にして信心の異稱なり、是故に今は則信を明し次下稱名は卽是其行是則選擇本願の行信なりとせり。勞謙院の意は「云何禮拜」は上の票を承けて衆生の能禮を徵す、之佛の禮拜にあらず、拜の字に「シタマフ」の點を用ひず、今の所は衆生の依行を主として明す場所なるが故に先づ云何禮拜すと、衆生能禮を徵するなり。「身業禮」已下は生佛に通ず、先約佛の邊では「シ玉フ」の點之を顯す。此意に依りて下を解する時は阿彌陀佛等の三句は佛身業禮を成する所以を示す。「善巧方便」の四字加へらるゝ意深く味ふべし。禮拜のみならず五念二利の行皆善巧方便の爲の行なり、乃で第五の廻向門に「大悲心故施功德」とある。彼の施功德と此善巧方便とが一組となり、禮拜するも此を施さんが爲なり。禮のみならず讚嘆作願觀察廻向も亦然り、今「善巧方便」の字第一にありて下に通せしむ。「善巧方便」とは『論』の善巧方便廻向の心を取る、五念二利の徳を集めて廻施して安樂國に願生せしむることを善巧方便と云ふ、所謂行を佛體に成して功を無善の凡夫に譲り給ふ意なり。「故」の字約佛身業禮を成する因故となる。何んとなれば佛因中に身業に禮し給うた、夫は阿彌陀佛正遍知の諸衆生を善巧方便して、集むる所の五念功德を廻施して、安樂國に生ずる心を爲さしめ給ふ故に身業禮し給ふなりと、立ち返へりて成する意なり。次に約生とせば約佛の義成じ終れば此禮拜は我等に廻施し給ふ所なれば、衆生は之を領して

身業に禮し奉るなり。此意に依る時は「阿彌陀」等の一句は所禮にして「善巧方便」等の二句は能禮の意を示すもの、彌陀大悲巧方便廻向心より五念二利の功德を施して願生の心をなさしめ給ふ、已に願心を内に起す時は禮敬外に發す、其外に發した禮拜は、聞信一念に與へられた法藏因位の身業に禮し給ひたる行徳の顯れなり、此が衆生の如來の行を行する禮拜の仕方なりと、云何禮拜に立ち還りて衆生禮を成ずる意なり。此生佛二邊に通ずる意を見れば、如來の行を行すが他力廻向の如實修行なることを知らるゝなりと云へり。今此義に依りて已下を解さん。云何禮拜の四字は徴、下の釋生佛に通ずる時は此亦生佛に通ずべし。身業禮の三字は本に約す。次の三句は末に約す。「身業禮」とは如來の因行にして『經』に「詣世自在王如來所稽首佛足」と、又「恭敬三寶奉事師長」等とある是なり。阿彌陀佛正遍知とは起觀生信章に所禮を擧ぐる文に依る。彼は如來應正遍知の三號を擧ぐ、今は「佛」を以て「如來」に代へ、「應」を省きて「正遍知」を擧げ以て字數を調ふ。而して三號中特に「正遍知」を出すものは『流情記』に解して、此一號至要なればなり。『論註』下^{三十}四^丁に云々す、心遍身遍無障礙邊の故に一切衆生心想中に入りて、増上縁となることを顯さんと欲するが故なりとせり。善巧方便諸群生とは此句所依の文になき所今之を加ふるものは、『論』^八善巧攝化章に依るなり。彼文に云々す。此衆生の能く五念二利を行することあるものは、實に法藏所修の因行功德を衆生に廻施し給ふが故なり。是を「善巧方便諸群生」と云ふ。而して此句を此に案し

給ふと雖も其意は自から下五念に及ぼすものなり。故に五念行自利利他ありと雖も、佛にありては自利利他共に利他なることを顯し給ふにありと伺ふ。爲生安樂國意故とは『論』には「爲生彼國意」とあり、之禮拜の由を示すもの、『論註』上^五に「願生安樂國」を釋して「天親菩薩歸命之意也」と云ふ其義同じ、是禮拜門に局るに非ず、初に置いて下に通すること知るべし。爲の字に「シメタマフ」の轉聲を施す、即衆生をして願生の意をなさしめ給ふものにして、佛は所令にして衆生は能令となり廻向の義伺はる。即是名入第一門等此二句は利益を明し給ふなり。初句は入の次第を結し、後句は其益を示す。此文を解するに古に異説あり、一に『大意』の解は上句は因の名を結し後句は果の名を結すと。二に『流情記』の解は初句は修行の第一門を結し後句は功德の第一門を結ぶとせり。前者は近門を彼土の益とする意なるが故に今偈に親しからず。後義は功德の第一門を結すとせり。果とせざる邊は可なるも、前句を修行の因のみを結すと見るもの未盡と云ふべし。何んとなれば前句が因行を結するとせば『論』文果の五門を明す中に何ぞ前四門を入の功德とし第五門を出の功德と云はんや。之より見る時は入の第一第二等とは修行のみに非ずして、利益までに通じて入出の次第を結ぶものなり。況んや亦次下に「亦是」等と益名を出す。「亦是」とは即是の代名なり、因と益と異なれば亦是とは云ひ難し、故に知る「即是」等の一句は因と益との入の次第を結したるものなり。入近門とは『論』に「得生安樂世界是名入第一門」と云ひ、『論註』下^{三十}一^丁に「入相中初至淨

土是近相謂入大乘正定聚近阿耨多羅三藐三菩提」と云ふ。是『論』の「得生安樂世界」の句に依りて往生後に約して之を釋す、是廣門示現の義なり。今は取りて之を現益とす、龍樹の即時入必定を以て鸞師の入正定聚に合するなり。是宗祖の一因一果の法門にして、信一念に佛因圓滿し當果決定す、既に佛因究竟して菩提に近くが故に、現生に直ちに近門に入り正定聚に住し、彼土に至りては初生速極證大涅槃なることを示し給ふなり。『正信偈』に「歸入功德大寶海、必獲入大會衆數」と云ふ是なり。然るに『論』の意も亦此義なきに非ず。『淨土論』の上に於て現生不退を説く明文なしと雖も義を求むれば理在絶言なり。何んとなれば一心發起の當體佛因究竟するなれば、初生速極證大涅槃は必らず立つべく、速極證涅槃が成立せば正定聚は必らず現益に廻るべきなり。即不虛作住持の偈に「遇無空過者、能令速滿足、功德大寶海」とあり。「遇」とは初起の一心歸命のこと、遇の一念速滿寶海するもの佛因圓滿なり。既に速滿寶海するなれば正定聚に非ずして何ぞや、知るべし信心正因の義成立せば正定聚は必らず現益とすべきなり。故に『論』意亦正定聚を以て現益とする義必然なりと謂ふべし。されば彼土にありて五果の次第を見るが如きは則是廣門示現なるのみ、廣門示現なれば一果海中の妙波瀾にして從果降因の菩薩の事のみ。此義門に依る時は則宗祖も亦彼土の益とする義を遮し給はざるのみならず、以て還相廻向を證し給ふ。蓋し是宗祖義を以て『論』を解するものにして、『論』當分は彼土の果相なり。宗祖の上において五果の扱方二途あり。一に彼

土に就て之を取る。此『證卷』二十二還相の下に於て五果の『論』論註』文を引き給ふ此意なり。往相の證果は初生速極證大涅槃なり。還相影顯は生後に於ける因相示現の差別なりと知らしめ給ふ、故に此五果は一果中の妙差別となること明かなり。二に此五果を以て彼此二土に分ち給ふ、初近大二門を合して此土の益とし、宅屋等の三門を彼土の益とす、其中宅屋を合して往相證果證大涅槃と顯し、第五の園林遊戲地門を以て還相の益を明すなり。『正信偈』及び『今偈』は此意なり。故に今廣門に約して五因を開きながら、宗祖の据りは一因一果の略門の扱方なり。

云何讚嘆口業讚

隨順名義稱佛名

依如來光明智相

欲如實修相應故

則斯無碍光如來

攝取選擇本願故

是名爲入第二門

即獲入大會衆數

第二讚嘆門を明す。『論』^三に「云何讚嘆口業讚稱彼如來名乃至欲如實修行相應故」と云ひ。同^十に「入第二門者乃至得入大會衆數是名入第二門」とあるに依る。此中初六句は行相を示し後二句は利益なり。行相を示す文約生約佛に就て又諸説あり。『窺班錄』、『大意』は禮拜釋下の如し。『流情記』に云く、微起に三意あり、所依、讚相、讚意の三を問ふ。「口業讚」とは佛因行として第一問

に答へ、衆生依行の本を知らしむ、「隨順名義」等の二句は讚嘆の相にして第二問に答へ、「欲如實修」等の三句は讚嘆の意を顯し第三問に答ふ。欲とは樂欲にして行者稱名の意樂なりと。明教院云く、「口業讚」とは依行の本、「隨順名義」等は行者受行の相、此中「隨順名義」は票、「稱佛名」等は釋。「欲」とは行者の樂欲なりとせり。『義疏』に云く、初一句は如來行を明し、「隨順名義」の下は衆生所得の功德を明すとせり、善通院云く、「口業讚」とは佛の讚嘆に約す、「隨順」等は衆生に約して佛讚嘆を行じ給ふの意を明す。「稱」の字に「セシム」の點をつく、之佛が衆生をして稱せしむることを示す。而して如來の光明智相に依りて如實に修し相應せしめんと欲するが故に、口業に讚嘆し給ふと云ふ意を顯す。「欲」の字は願欲なり。又禮拜の下に「爲」の字の「ナサシメ給フ」の點より推して今の「相應」にも「セシメン」の點を用ふるなりと云へり。勞謙院の云く、「云何讚嘆」の四字は衆生の能行を徵す。「口業讚」は佛の因行にして衆生依行の本を示す。「隨順名義」は一心にして「稱佛名」は專心なり、「欲」の字生佛に通ず。佛に約すれば如來の光明智相に依りて如實に修し相應せしめんと欲するが故に、口業に讚し給ふと、因行に返つて義を成す。衆生に約すれば如來の光明智相によりて、如實に修し相應せんと欲するが故に、「隨順名義稱佛名」と云ふ意なり。此の如く約佛約生の二途ありて約生と云ふも佛の讚嘆の來りて現はれたるに外ならざれば全ふして佛の如實讚嘆なり。佛の讚嘆は本と衆生に與へんが爲なれば口業に讚し給ふを全ふして衆生如

實の讚嘆なり。生佛に通じて頌し給ふは蓋し他力廻向を巧みに示し給はんが爲なりとせり。云何讚嘆とは之徵、下の釋生佛に通ずとせば之亦生佛に通ずと云ふべきか。讚嘆とは『論註』下丁二に「讚者讚揚也嘆者歌歎也」等と釋す。口業讚とは佛の因行にして衆生依行の本を示す、隨順名義とは衆生依行の相、衆生が名義に隨順して佛名を稱するなり、而して此衆生の稱名は全く佛の口業讚嘆の印現する所なれば、稱の字に「セシム」の訓をつけ給ふ。此文利行満足章の文に依る、起觀生信章には「如彼名義」と云ふ、如は契如の義なれば隨順と其義同じ、「隨順名義」とは上に示す一心の義。稱佛名とは專念、即此句は一心專念の意なり。「隨順名義」を釋するに體に約するあり、相に約するあり。體に約すれば一心なり、相に約すれば稱名なり、今は正しく體に約す。此讚嘆の下宗祖の釋意は「如實修行相應ハ、信心一ツニサタメタリ」の意にして、下鸞師章の偈に「如實修行相應者、隨順名義與光明、以斯信心名一心」と其趣を同す。此一心より流出する稱名なるが故に稱名能く讚嘆の義を成するなり。『銘文』^{四十一}に「即嘆佛トイフハ、スナハチ南無阿彌陀佛ヲトナフルハ、ホメタテマツルコトハニナルトナリ」とあり。何故に稱名が讚嘆を成するとならば、此名號は利他圓滿の不行にして、聞信一念に破滿の大益を得て佛因究竟し當果決定す。其上より佛恩を感佩して如來の御名を稱するが故に、如來の御助けをほめ奉ること稱名に如くものなきなり。第十七願の諸佛讚嘆と其徳を同する所以茲にあり。名義とは古來諸説あり、一に名とは盡十方無碍光如來、義とは此

佛光明の無邊無碍にして能く衆生の黒闇を破するを云ふ。一に名とは六字の名號、義とは願行具足の義なりと。一に名とは無碍光如來の名、義とは光壽無量なり。一に名は六字名號、義とは光明無量無邊無碍にして、『論註』に佛光明是智慧相と云ふものは是なり。一に名とは名號、義とは徳義にして、『論註』に所謂破闇滿願なり。一に名は六字、義とは光明智相なり、之を承けて「如彼名義」と云ふなりと。此の如く諸説ありと雖も後の三説は一に歸するが如し、今は之に依る、何れの義も不當にあらず、然れども其所々の聖教に付きて親疎あり、『小經』の名義段にては阿彌陀が名、無所障碍及其人民が義。又六字釋にては南無阿彌陀佛が名、願行具足が義、今『論註』の名義を云へば、『論』に「稱彼如來名」とある「稱彼」とは『觀經』に説くが如く、南無阿彌陀佛と稱ふることなり。然れば如來名とは南無阿彌陀佛なり、「彼如來光明智相」とは即名義なり、故に上を押へて「如彼名義」と云ふ。然るに南無阿彌陀佛とありては義を顯はしたる名なること知り難し、故に論主親しく義に付きて名を立て盡十方無碍光如來との給へるなり。然れども盡十方無碍光如來と稱へるには非ず、稱ふるは矢張南無阿彌陀佛と稱ふるなり、其南無阿彌陀佛が信を得て稱する時は、光明智相に契へる稱名なるが故に盡十方無碍光如來と讃する由れなり。故に『論』の上に於て名義を釋せば名とは南無阿彌陀佛なり、義とは無碍光如來の由れなり。此南無阿彌陀佛が盡十方無碍光如來の名にして、光明智相を離さざるなり、光明智相とは光明は智慧の相にして能く衆生の愚痴を除

くに名く、即破闇なり、故に名義の如く讚嘆すと云ふが南無阿彌陀佛と稱ふるなり。是一心の上の稱名相續にして、隨順名義稱佛名の如實讚嘆なり。稱佛名とは『論註』下二に「稱彼如來名者謂稱無碍光如來名也」とあり。稱に就て『行卷』^四子註に云々す。又『證文』^九に「稱ハハカリトイフコ、ロナリ」等、此等は皆字に寄せて隨順相應の義を示し給ふなり。論主稱名を讚嘆門と名け給ふものは是第十七願の稱名諸佛咨嗟に本づくの名目にして、全く他力念佛を顯すの法名なり。何んとなれば他力の念佛は終日終夜乃至盡形壽稱すれども念すれども、毫も行者の功とせず、唯佛已成の功を稱揚し唯佛廻向の賜を仰ぐのみ、假令へば孝子の父母に事へるに唯だ父母の恩を謝するのみ、毫末も求むる所あるに非ざるが如きなり。依如來光明智相とは是亦利行滿足章に依る。起觀生信章には「如彼如來光明智相」と云ふ、「如」と「依」と其意同じく依とは依投依托の義にして願力に投托して自力を離るゝなり、又是隨順相應と旨を同す。光明智相とは名號の自體所謂名義の義に當る、此名が家の義なり、近く云へば如來の光明智相にして衆生の惡業煩惱に障へられず、能く無明の闇を破することなり。『小經』には光壽を以て名義を説く、今壽命を擧げざるものは一に體相無別の故に、二に現益を示さんが爲の故なり。欲如實修相應故とは『論註』下二に如實修行相應の釋あり其意なり。此「欲」の字を解するに古説一準ならず。或は如來の御思召とし、或は衆生の樂欲とす、今謂く偏すべからず生佛に通すべきなり。如何となれば先づ佛に約すれば如來の光明智相に

依りて、如實に修し相應せしめんと思召すが故に、口業に讚し給ふと解し、如來の因行に立ち歸へりて義を成ずる意なり。又衆生に約すれば如來の光明智相に依りて如實に修し相應せんと思ふが故に、名義に隨順して佛名を稱すと云ふことなり。既に今の四句或は如來に約する所あり或は衆生に約する所あり、假令衆生に約して解するも全く如實讚嘆の顯はれ行く相たなるが故に、衆生の讚嘆を全ふして佛の如實讚嘆なり、佛如實の讚嘆は全く衆生に與へんが爲なるが故に、口業に讚し給ふを全ふして衆生如實の讚嘆なり。生佛に通じて巧みに頌し給ふものは夫れ之が爲なり。則斯無碍光如來等、此二句は『論』文になき所殊に加へて今謂ふ隨順名義の讚嘆門は本願力廻向なる深義を顯し給ふ。而して其事は『論』の本願力より三願引證をなし給ふ『論註』の指南に依り給ふ。則斯とは前を承くる言、無碍光如來とは論主の稱ふる所にして、長行釋に數々阿彌陀如來の名を擧ぐると雖も、盡十方無碍光如來の名は天親の力を盡して讚嘆し給ふ所なるが故に今偈特に此名を用ふ。即法藏菩薩成佛の名なり。攝取選擇とは正依には攝取と云ひ、異譯には選擇と云ふ其意同じきなり。本願故、本願とは何願なりやと云ふに『窺班錄』には十七願なりとし、『流情記』『大意』には皆第十八願なりとす。明教院は第十八願既に信行を具すと云へども、今第十七願の中に於て稱名を立つるは廣門に依るが故なり、若略門を取れば第十八願に攝す。五門只是一念佛なるが故なり、今文は其廣門に就て明すが故に十七願とする方、文に親しと云へり。今勞謙院の意によりて解さば、選擇

本願の名は元來第十八願の別目なり。此第十八願に信あり行あり、三信は信にして乃至十念は行なり、其乃至十念の行を第十八願上に於て見る時は行は行なりと雖も、之信が家の行なり、大信と並立する大行に非ずして三信の相なり。故に大行と扱ふ邊は宗祖は常に第十七願に送り、眞實行の願は第十七願なりとし給ふ。既に十念の行を第十七願に送る時は從つて選擇本願の名も十七願に送る。『行卷』に「選擇本願之行」と子註し給ふ。之第十七願に選擇本願の名を及ぼす所以なり。然れども元來は此名は第十八願の獨名なり。今此偈文に付きて「選擇本願故」の句を加へ給ふ深義を伺はんに二の扱方あり。一に先づ『論註』下卷讚嘆門の釋を『信卷』に引き給ふ其意を以て見れば、如實讚嘆の本とは信心にありと知らしむるの祖意なり。何んとなれば「隨順名義」と云ひ、「彼如來光明智相」と云ふ、是皆一心歸命の義なり。故に「欲如實修相應故」とあり。此は如實修行相應は信心一つに定むるの意なり。斯様に明かして次に「則斯無碍光如來、攝取選擇本願故」と結び給ふものは其信樂を獲得することは、如來選擇の願心より發起すると顯す意なり。此如く見れば選擇本願か正しく第十八願にして、如實修行の本とは此本願力廻向の信心にありと顯す趣なり。一には今は讚嘆門下なるが故に如實修行の本とは信心にありと明して、此信心より流出する稱名なるが故に十七願に送りて、諸佛讚嘆と其徳を同じくすと、如實讚嘆の義を成ずるの趣あり、此義に依れば乃至十念を十七願に置く意にして從つて選擇本願の名も亦十七願に至ると云ふべし。次に宗祖特に此

二句を加へて頌し給ふ所以如何と云ふに、或は信樂を獲得するは如來選擇の願心より發起すること
 を顯す、即行者の意樂自心の發起する所に非ざることを知らしむるなりとす。或は彌陀選擇の本願
 行者をして能く是の如き口業讚嘆を成せしむることを顯さんが爲なりとす。或は上の如實稱名の
 行を樂欲する所以は此則如來選擇本願の不行なるが故なりとす。勞謙院の意は上に明す隨順名義の
 讚嘆門本願力廻向なることを顯さんが爲なり、而して殊に讚嘆門下に之あるものは、五念を稱名に
 統ぶるにあらず、其所稱の名號『略書』に所謂「萬行圓備嘉號」にして是法藏因中廣門所修の無量
 行を全ふして、略の法體を成じ給へるものなることを示すにあり。此れ名號に就て選擇本願の沙汰
 をなし給へる意趣なり。凡そ選擇は稱名の相に始まりて、名號の體に歸するもの、體に歸するに非
 らざれば選擇の究竟にあらずとせり。謂ふに隨順名義の稱名は、稱名にして而も常に名號なり。此
 名號選擇本願の不行なることを示して「則斯」等との給ふ。然れば選擇本願とは五願開示の邊では
 第十七願とするを當然とす。然るに五願は常に第十八願閣中の五願なれば、合門の邊で云へば第十
 八願と云ふも得たるなり。是名爲入第二門等此二句は利益を明す。二句共に大會衆門の文に依る。
 『論』には「得入」と云ふ、今「得」を改めて「獲」と云ふ。『廣』『略』二書の偈文亦同じ。獲と
 得と通用するときは其義同じきも、宗祖は別用し給ふ。今「得」を改めて「獲」とし下の「得入蓮
 華」、「得到彼處」に簡びて、入大會衆を以て現益とし給ふ意なり。『觀經』に「若念佛者」等と云

ひ、『論註』下^{十三}に「遠通夫四海之内皆爲兄弟也」と云ふ、皆現生入大會衆の意なり、宗祖之等に
 依り給うて今の益を現生とし給ふ。『論註』には入正定聚を近相とし、入淨土已即入如來大會衆數と
 共に當益に約し、而も順序を論ず、今は近大二門共に現生に約す、同一益にして順序を論せず、たゞ
 滅度に對し現當の區別を立つることは判然として亂るべからざるなり。

云何作願心常願 一心專念願生彼

得入蓮華藏世界 欲如實修奢摩他

是名爲入第三門 亦是名爲入宅門

第三作願門を明す。『論』^三に「云何作願心常願」等と云ひ、同^十に「入第三門者乃至入第三門」
 とあるに依る。上二門は身口業なり、以下三門は意業なり。六句中初二句は作願の相、「得入」等の
 一句は其益、「欲如」等の一句は作願の意、「是名」等の二句は利益を結するなり。云何作願とは徵、
 約生約佛の異説は上述の如し、心常願とは上に準すれば意業願と云ふべし、然るに今本『論』の文
 意業の字なく「心常作願」と云ふ、之に依る。已下の三門意業智業方便業の別ありと雖も共に内心
 に屬す。禮拜讚嘆の外に發動するに同じからず、故に業の字を略す。心常願、『論』文には衆生の作
 願に約するが故に念々相續を常と云ふ。今は如來の因行に約す、故に『經』の「勇猛精進志願無倦」

を「常」とす。此如來の心常願は衆生のための作願にして、此佛の作願が廻向さるゝが故に衆生の上にも於ても彼此二土に通じて奢摩他の止を成するなり。之が次の「一心専念」なり。而して今此作願門の願と一心歸命の願生との同異を辨せば、『論』の一心歸命の願は一安心とする時あり、三念門に配する時あり。三念門に配する時は「願生安樂國」が作願門となる故に今と全同なり。又一安心と取る時は一心歸命即願生、此時は作願門の願と願生の願とは信行の別あり。初後の異あり安心の當體に於て願生と云ふは別相なり。但た無疑の一心が往生に望めた邊に於て願生と云ふ名を立つのみ。心相は無疑決定の外なきなり、之は初歸の安心なり。作願は業事相續の心にして行門に屬す。所謂五念門行で増微存没あり、故に初起安心と取る時は一心歸命となり、後續とせば行門となる、其異知るべし。一心専念等は衆生受行の相なり。「一心専念」とは或は彌陀身土を専念するなりとし。或は一心は大信、専念は大行なりとす。今案するに信樂の一念臨終まで徹り五念の行皆之に依止するなり。然れば一心を以て作願の所依止と見れば信とするも妨げなし。然れども今作願は既に意業の起行なれば「一心専念」とあるも上と言同意別なり。今は相續作願の相にして即奢摩他行なり。如來因中の心常願成就の故に、衆生一心作願すれば別に自から行せざれども、不行而行にして此中に自から如來奢摩他の徳を具するなり。故に今は一心に彌陀の身土を専念して願生の思をなす、之を「一心専念願生彼」と云へるなり。願生彼とは正しく作願の行相なり。得入蓮華藏世界と

は作願の益なり。上の門に「獲入」と云ひ今は『論』のまゝ、「得入」と云ふもの現當を判別し給ふ意伺はる。蓮華藏世界とは『論』の初の文には「安樂國土」と云ふ、後の文には「蓮華藏世界」と云ふ。『文意』^{四十}には「極樂トマウスハ、カノ安樂淨土ナリ乃至マタ論ニハ蓮華藏世界トモイヘリ」とあり。されば「蓮華藏世界」とは『窺班錄』には、其名華嚴と同じく其體彼に同じからず、彼は毘盧舍那如來行業力の故に成する世界、故に彌陀願力所成の土に非ず。彼を借りて此に名け二門融即の極致を著すのみ、極樂世界のことなりとせり。此蓮華藏世界の名に就て古來『大經』の「衆寶蓮華周滿世界」の文。『觀經』の「是本法藏比丘願力所成」の文等を以て擬する者あるも恐くは適當に非ず。明教院の意に依れば五義を以て説明せり。一に爲示一乘妙土故、二に爲顯證入無二故、三に爲顯念佛願功故、四に爲顯今佛本師故、五に爲簡彌陀假土故と。今謂く此は本末無碍門に依れるなり。本國他方亦無二悉是涅槃平等法にして、而も此涅槃を以て彌陀の妙果とするが故なり。果海を談する時は融即を妨げずと雖も、修入の門戸に於ては二門の差別毫も混すべからざるなり。欲如實修奢摩他は作願の意を示す。此「欲」を解するに或は佛に約し或は衆生に約す。今謂く文に親しきを云へば約生の欲なり、蓋し約生と云へども佛の樂欲の然らしむる所にして、衆生自身の所起に非ず、故に義につけば生佛に通じて見る方可ならん。約佛の欲を云へば此土に於て「一心専念願生彼」と奢摩他の止を修し、彼土に「得入蓮華藏世界」と寂靜三昧の止に住す、彼此の止の奢摩他は

偏に佛の如實の奢摩他を修せしめんと欲し給ふに依る。故に心に常に願ひ給ふもの奢摩他寂靜止の行徳を施し給はんが爲なり。而して此が衆生依行の本なりと知らしむるにあり。次に約生して解さばその佛の樂欲を得て此土にして一心作願し彼土にして寂靜三昧の蓮華藏世界に入る、此行者の佛廻施の如く奢摩他を修せんと樂欲するなり。而して約生の場合には欲は行者の樂欲なりと云ふも實は法體所具の徳にして、吾等にありては此土に於て強ひて奢摩他を修せんと樂欲するに非ず、彼土に生じれば任運無作の奢摩他の樂欲あるなり。奢摩他は譯して止と云ふ、即一心不亂專注一境の義なり、『論』の初の文は「往生安樂國」の後に「欲如實修行奢摩他」とあり、後の文は「得入蓮華藏世界」の前に「以一心專念作願生彼修奢摩他寂靜三昧行」とあり。蓋し彼此二土に通ずるならん。『論註』_{下四}に奢摩他を解するに三義を以てし、第一義は此土に約し、第二第三義は彼土に約し給ふも亦之が爲なり。今偈は得入界の後にありて彼土に約するなり。『論註』の釋結文に「此三種止從如來如實功德生」とあり、是如實修行の言を釋し給ふものなり、而して彼土生後の修なれば所謂『論註』_{下三}の「體如而行則是不行不行而行名如實修行」と同意なり。是名爲入第三門等とは宅門の文に依りて利益を結ぶなり。宅門とは宅は托なり、人の投托する所なり。『論註』_{下三}に「當至修行安心之宅」と云へり。今安樂世界は正道大慈悲を以て性とす。是豈安宅にあらざらんや。

云何觀察智慧觀 正念觀彼欲如實
 修行毗婆舍那故 得到彼所則受用
 種種無量法味樂 即是名入第四門
 亦是名爲入屋門

已下第四觀察門を明す。『論』_{下三}に「云何觀察乃至毘婆舍那故」と、又_{下十}に「入第四門者以專念觀察彼妙莊嚴乃至是名入第四門」とあるに依る。初一句半は觀察の相、「欲如實」等の一句半は觀察の意、「得到彼所」等の二句は觀察の益、「即是名」等の二句は利益を結す。云何觀察とは徵、觀察とは『論註』_{下五}に「心緣其事曰觀觀心分明曰察」とある此意なり。智慧觀とは佛の因行、『經』に「三昧常寂智慧無碍」等と云ひ、又「住空無相無願之法無作無起觀法如化」と云ふ是なり。願事成就に智業と云ふ、觀察は智に依らざれば成せず、智には觀照の用ありて所緣の境を照すなり、故に智慧觀と云ふ、之法藏因中の修觀なり。此法藏の如實修行が施功德の體となりて我等に互り、以て苦逼失念の劣機も又智慧觀の徳を具足するなり。正念等の四句は衆生に約す。衆生受行の相なり。正念とは邪念に簡ぶ、凡夫自力の念は妄想分別雜起するが故に邪念と云ふ。今は他力廻向の觀なるが故に正念なり。佛智を得て想念偏邪を離るゝが故に正念と云ふ、即信心の智慧なり。念佛三昧な

り、機相に現發せられずとも不行而行之徳を具す、其應分の相に發するものあるは之が顯現に外ならず。**觀彼**とは彼安樂世界の三種莊嚴を觀するなり。『玄義分』^五に「以淨信心手持智慧之輝照彼彌陀正依等事」とあるもの是なり。即信後味道の觀なり。**欲如實修行**等とは觀察の意を示す、**欲**とは或は佛の欲とし或は衆生の欲とす。又此土の欲樂と彼土の欲樂とに通ず、一心專念の信中の智業安樂淨土の依正二報を照して寂に屬して照なり。此因を以て彼土に生じて現に種々の法味樂を受用す。**毘婆舍那**とは『論註』^{下四}に釋して「毘婆舍那觀者亦有二義乃至同得寂滅平等」と、初は此土に約し後は彼土に約す。**修行**とは或は彼土の修行とし或は彼此二土に通ずとす。毘婆舍那の釋、彼此に通ずるが故に、今亦二土に通ずと云ふべし。又前の「正念觀彼」が此土の修なれば此亦毘婆舍那に外ならざれば、今の修行は彼土に約すと見るも可なり。抑も奢摩他毘婆舍那はこれ一雙の法なり。然るに今偈一は得入華藏の後に置き、一は得到彼所の前に安ず、一樣ならざるものは蓋し互顯の意なり。思ふに具縛の凡夫何ぞ能く止觀相順の妙行を修することを得んや、たゞ自力をすて、他力に歸する時は能歸の心所歸の佛智に相應す。信心の智慧を得るはこれ慧なり、念佛三昧をうるはこれ定なり、未だ機の修相に顯れずと雖も不修而修の徳を具す。此信心後續意業に發動して作願觀察の行相となる、眞に止觀を行すると稱すべからざるも具徳顯現の一端なれば又之を止觀と稱すべきの義あり。而して彼土の利益に至りては勝過三界の淨土、佛力の住持する所、初生の即時に寂滅

平等心を證す。寂の所に照を即す、一法句の所に二十九種宛然たり。止觀相順の行自然に現す。『論註』には所謂菩薩四種の正修行不行而行如實修行と云ふもの之なり。鸞師止を釋して自然止と云ふ。觀を釋して不虛作住持を擧ぐ、又是徳を佛力に歸するなり、既に佛力に約すれば止觀共に此彼に通じて談すと雖も、今は各一義に約して互顯するものなり。**得到彼所**等とは觀察の益なり、上の蓮華藏世界を指す。**受用種々法味樂**とは觀照の義なり。『論註』^{下三十一}に「種々法味樂者乃至有如是等無量莊嚴佛道味故言種々は第四功德相」と四味を明せり。「觀佛國土清淨味」は清淨功德、「攝受衆生大乘味」は大義門功德、「畢竟住持不虛作味」は不虛作住持功德、「類事起行願取佛土味」は菩薩四種功德にして、此四を以て三種莊嚴を攝するなり。**即是等**は利益を結す。**屋門**とは屋は居の義舎の意なり。『論註』^{下三十一}に「入宅已當至修行所居屋寓」と、蓋し宅と屋とは一應の譬說にして涅槃界寂照の徳を示すのみ。もとより次第あるものに非ず。『廣』『略』二書の偈に二門を合して「得至蓮華藏世界」等との給ふ此意なり。

菩薩修行成就者

四種成就入功德

自利行成就應知

第五成就出功德

此四句は結前生後なり。『論』^九に「此五種門初四種門成就入功德出第五成就出功德」と云ひ、又

「菩薩入四種門自利行成就應知」とある文に依る。初三句は入の次第と自利なることを結し、後の一句は出門利他を起すなり。而して初一句は宗祖の特に加へ給ふ所にして上の總票を承くるなり。而して利他行成就を謂はざるものは下を待つ。菩薩とは法藏菩薩を指す、上の兆載永劫の修行者なり。修行成就とは『窺班錄』には修行とは五念の行を指し、成就は五果門の功德を指すとせり。『大意』は修行の満足を成就と云ふなりとす。泰通院は成就とは因果に通ずとせり。後の二義は同意にして今は此義を可とす。者とは牒者にして此一句下の「四種成就」、「第五成就」の總票にして五門全體を含むべし。四種成就入功德とは四種は前四念門、入功德とは前四功德門なり、成就は此二に通じて四念四功德の満足を云ふ。自利行成就とは『論』の終りに「菩薩入四種門自利行成就應知」とあるに依る。『論』の文相は願生の菩薩の自利なり、今は佛の前四念前四功德の自利行満足成就の事にして、而も此佛の自利行成就こそ其儘に衆生の自利行成就にして、機法一體の正覺成就の義なり。應知とは『論註』下^{三十三}に「應知者謂應知由自利故利他非是不能自利而能利他也」と云ふ是なり。第五等とは後文を生ずるなり、次句即是なり。

菩薩出第五門者 云何廻向心作願
不捨苦惱一切衆 廻向爲首得成就

| | |
|---------|---------|
| 大悲心故施功德 | 生彼土已速疾得 |
| 奢摩他毗婆舍那 | 巧方便力成就已 |
| 入生死蘭煩惱林 | 示應化身遊神通 |
| 至教化地利群生 | 即是名出第五門 |
| 入蘭林遊戲地門 | 以本願力廻向故 |
| 利他行成就應知 | |

已下十五句は第五廻向門行を明す。初一句は票、「云何」等の十二句は釋、「以本願力」等の二句は結なり。釋の中亦三ありて初四句は佛の廻向、「生彼土已」等の六句は衆生の廻向、「即是」等の二句は利益を結す。上に禮拜讚嘆作願觀察の四念門を頌し終りて次ぎに結前生後の偈を置き、今改めて票釋結を以て頌し給ふ意は、蓋し此一門を以て獨り五中の隨一と見るのみならず、亦五門入出自利々他一切悉く佛の大悲廻向に外ならざる旨を示し給ふの意ありと伺ふ。菩薩とは法藏菩薩のことなり。出第五門とは出即第五門なり、上來入出と次第して入門上に終り、今は出なり、四門上に終りて今は第五なり、故に「出第五」と云ふ。云何廻向等已下は釋、此中初に佛廻向を明す。『論』^三に「云何廻向不捨一切苦惱衆生心常作願廻向爲首得成就大悲心故」とあるに依る。云何廻

向とは徴なり。廻向に就て通途には自を廻して他に向ふ衆生廻向、因を廻して果に向ふの菩提廻向、事を廻して理に向ふ實際廻向の三あり。泰通院四義を分つ、一に約自利にして『觀經』の「以此功德廻向願求」と云ふ是なり。二に約利他にして『論註』下_八に「以己所集一切功德施與一切衆生共向佛道」と云ふ是なり。三に約還相にして『論註』下_五に「還相者生彼土已得奢摩他毘婆舍那方便力成就廻入生死稠林教化一切衆生共向佛道」とある是なり。四に約廻心にして『法事讚』上_{十五}に「一切廻心向安樂」等と云ひ『般舟讚』_八に「但使廻心決定向」等の如し。心作願等已下は佛の廻向なり。此一段の釋上四門と大に異なり上四門は如來行を明すに僅かに三字を以てす。今は具さに二十四字を以てせり。又上四種は衆生修行の相を明すこと詳細なり。今はたゞ彼土の得益をあぐのみ。而して斯の如き釋體をなし給ふ意を伺ふに、『論註』の釋に依れば廻向に往還二相を開く、文の如く之を見る時は止の三義觀の二義彼此に約して釋するが如く、末に約して此土の廻向相と生後の廻向相とを明すものゝ如し。然るに宗祖此釋に就て往還共に彌陀の廻向とするものは『論註』の覈求其本の釋意を取るに依る。『六要』一に「今家特立如來他力廻向專依此文」と云ふ、之を『選擇集』の廻向不廻向對に照して不廻向を以て他力を成立す。常沒流轉の凡夫清淨の心なく眞實の心なし、何ぞ大悲廻向のこゝろあらんや。論文明す所の廻向の如き豈凡夫自力の能くする所ならんや。たゞ彌陀因位にありて一切苦惱の衆生を捨てず、廻向を首として大悲心を成じ之を衆生に廻施す、此大悲心を

領受するを即廻向の信樂と云ふ。願作佛心即度衆生心なる故に、行者亦廻向の徳を具することを得、此心の外に顯はれて展轉相勤めて念佛を行せしむ、之を常行大悲の益とす。如此の信行たゞ是如來の大悲が行者に顯現するものにして、凡夫自心の發起に非ざるが故に之を行者の廻向とせず全く如來の廻向と仰ぐ。「度衆生心トイフコトハ、彌陀智願ノ廻向ナリ」の意、往相を明す文、『本典』所引の文點皆此意なり。其自力廻向を遮して不廻向の旨を顯し給ふ實に感佩すべきなり。今此偈頌亦此義に依る。故に起觀生信の『論』文は直ちに取て如來行を明すものとし、約末の廻向は獨り生後利益の還相を以て示すなり。心作願とは『論』には中間にあり、今之を初に置くものは廻向の語に接して其本を示すにあり。能廻の心なるが故に是即如來大悲の本願なるが故なり。上の願作は入門自利、今は出門利他にして「普濟諸貧苦」、「令諸衆生功德成就」の意なり。而して且らく自他に分つと雖も其實は機法一體にして二願あることなし。不捨苦惱一切衆とは大悲の行相なり、『經』に曰く「拔諸生死勤苦之本」と云ふ即佛願の生起なり。苦惱とは苦は苦果にして即生死齒、惱は苦因にして即煩惱林なり、『和讚』に「如來ノ作願ヲタツヌレハ」等と云ふもの已下三句の意なり。廻向爲首とは既に令諸衆生功德成就の心作願なり。一々誓願爲衆生の故に一切の行業悉く皆廻向のためならざるはなし。得成就大悲心とは大悲満足の相なり、苦惱の衆生を攝取するを云ふ、即佛願の本末たるなり。願行具足利他圓滿の大行成就して茲に大悲心満足し給ふ相なり。施功德とは

此三字「論」になし、「論註」の善巧攝化章の文「以己所集一切功德施與一切衆生」等に依り加へ給ふ。功德は大悲心成就利他圓滿の不行なり。生彼土已等已下は衆生廻向なり。「論註」下_五に「還相者生彼土已得乃至成就」とあるに依る。「和讃」に「願土ニイタレハスミヤカニ、無上涅槃ヲ證シテソ」等とある此意なり。而して「論」の廻向門は衆生現生の利他廻向を示し給ふものなり。然るを今は約生の廻向は一に生後の益として扱ひ給ふ所以、上に述べしが如く「論」の深意に徹し給ふ宗祖獨特の釋なり。論主所共の衆生は下々品の劣機にして「論」所明の如き廻向に堪へざる惡機なり、其堪へ得ざる劣機にして而も之を有す、是如來廻向の徳を全領するが故なり。既に其徳を全領せるが故に彼土に到れば則顯現す、今偈此意を顯し給ふ。而して此土に於ては絶對に廻向を許し給はぬものは是不廻向の宗義を示し給ふにあり。連疾の二字を加へ給ふは不虛作の速滿の文に依り超出常倫の義を示し給ふ。得奢摩他毘婆舍那とは「論註」下_{七_下}に「如是菩薩奢摩他毘婆舍那廣略修行乃至成不二心」と云ふ意なり。奢摩他毘婆舍那是宅屋二門にして即往相の極果、蓮華藏世界に入りて種々の法味樂を受用する事なり、即自利滿足の相を示す。巧方便力成就已とは利他滿足の相を明す。奢摩他とは是略にして諸法を空じて一妙とするなり。毘婆舍那とは是廣にして諸法を現するなり。奢摩他によりて毘婆舍那あり、恰も水清淨にして影を取るが如し、清淨水は奢摩他にして影を取るは毘婆舍那なり。又毘婆舍那によりて奢摩他の徳を顯す、影像の現するに依りて水の清淨な

ることを知るが如し。然れば二法相助けて不二の義を成す。如實廣略の諸徳を知る、廣略の諸法實相なることを知るが故に能く如實に衆生の苦を知るなり。能く如實に衆生の苦を知るが故に眞實の信心を起し能く苦の衆生を救ふなり。是を奢摩他毘婆舍那を得て巧方便力を成就すと云ふなり。之宅屋二門往相の證果なる趣なり。證大涅槃の所に諸法實相に達す。諸法は毘婆舍那なり、實相は奢摩他なり、故に生死涅槃不二自他不二なり、故に同體の大悲を起して衆生化益に出で、而も濟度の功を見ず、又涅槃に住して出化を妨げず、出化して涅槃界を動せず、此を止觀相順修行成就と云ふ。巧の字を加へ給ふは善巧攝化に合するの意なり、「論註」下_{八_下}に巧方便を釋して云々す。方便とは廻向即方便智業なるが故なり。力とは堪能に名く、化他自在の用を具するを云ふ。已の字又「論註」になく、今加へて自證究竟して化他を起すが故に已と云ふ。入生死蘊煩惱林は正しく出化利生の相なり。「論」下_十に「出第五門者乃至利益他行成就應知」とあるに依る。生死蘊とは果に約し煩惱林は因に約す。衆生に約すれば「蘊」は三界の區域にして滋生に喩へ、「林」は煩惱衆多にして稠密に喩ふ、生死稠林と云ふものなり、之大悲所化の境なり。菩薩に約すれば菩薩自娛樂たる遊戲の境なるが故に「蘊」と云ふ、故に出門を蘭林遊戲地門と云ふ。入は廻入なり。示應化身遊神通とは應化は應緣化作の義、「論註」下_{三_下}に「示應化身者如法華經普門示現之類也」とあり。遊とは遊戲を略す、無作を顯す。「論註」下_{三_下}に自在と度無所度の二義を擧ぐ、初は俗諦に約し後は眞諦に約す。

神通とは應化の所作不測を云ふ、神は不測に名け、通は無塞に名く。應化身は體に約し神通は用に約す。至教化地利群生とは教化地は教化すべき地位なり即利他の地位を云ふ。『本典』に還相は利他教化の益とし、必至補處の願と云ふ。上の速疾得の證果の所は此教化地の果なり、今は其益を示す。利群生の三字論文になし。『經』の「惠以利群生」、『論』の「利益諸群生」に取る。即是名出第五門等は利益を結するなり。入とは遊入、蘭林遊戯地とは蘭林遊戯は能化の徳、地は所化の境、能所合稱の名なり。上の宅屋に接して義を成ず、屋舎を出で、蘭林に遊ぶ、亦是菩薩自娛樂の地なり。十方に遊化するも本國を離れざるを喻顯するにあり。以本願力廻向故等、稟釋の二上に終り今は第三に結なり。此句『論』には是名出第五門の前にありて行者の本願とす。『論註』下^{三十三}亦行者に約す、而して終りに至りて三願を的取し遂に佛願に歸し給ふ、是『論』の願心莊嚴に基きて釋し給へるなり。今宗祖は此釋によりて佛の本願とし給ひ、且つ之を結益の後に廻し以て上の五門の總結とするの意を持ち給ふ。如此して五門入出往還二利悉く佛願力の廻向に非ざるものなき旨を示し給ふなり。『正信偈』の「廣由本願力廻向」、「往還廻向由他力」、「證卷」^五「若因若果無有一事非阿彌陀如來清淨願心之廻向成就」と云ひ、『略書』にも「本願力廻向」と云ひ、又「爾者若因若果無有一事」等と云ひ、又「爾者若往若還無有一事」等と云ひ、偈に「由本願力廻向故」、「往還廻向由本誓」等と云ふ皆同意なり。されば「本願力」とは第十八願にして開けば三願五願六八願なりと云ふべ

し。利他行成就應知とは或は佛の利他行とし、或は衆生の利他行とす。是佛の利他行成就にして此中衆生の自利他一切を攝すと謂ふべきなり。

| | |
|---------|---------|
| 無碍光佛因地時 | 發斯弘誓建此願 |
| 菩薩已成智慧心 | 成方便心無障心 |
| 成就妙樂勝真心 | 速得成就無上道 |
| 成自利利他功德 | 則是名爲入出門 |

上來所明の五念門本末混明すと雖も、「菩薩入出」等を以て稟し、「本願力廻向」を以て結釋す。要する所如來行を明すにあり。故に行に約して漸成を示せるなり。已下は心に約して速得を明す。此中初二句は因位の發願、「菩薩已成」等の四句は願事成就を明し、「成自利」等の二句は總結二門なり。無碍光佛等の二句『論』になき所、『經』に「時彼比丘乃至發斯弘誓建此願已」とあるに依り加へ給ひ、以て『論』の「觀佛本願力」及び「願心莊嚴」の意を顯し給ふなり。「無碍光佛」とは果號を以て因地を指す。以て上に云ふ菩薩は法藏なることを知らしむるなり。特に此名を以てし給ふものは『論』の建章に取り、吾等が所歸の佛即此五念二利を成じ給ふ佛なる旨を示し給ふ意なり。發斯弘誓建此願とは『大經』因行段の文に依る。斯と云ひ、此と云ふは『經』には四十八願及重誓

偈を指す。今は遠くは上の「觀彼如來本願力」を指し近くは次上の「以本願力」を指す。弘誓願とは既に上の本願を指すなれば、是第十八願にして開けば三願五願更らに六八願に通ずべし。菩薩已成等とは願事成就なり。『論』^{下九}に「如是菩薩智慧心方便心無障心勝真心能生清淨佛國土」等と云ふに依る。『論』は上善巧攝化已下の四章を承けて願生の菩薩に約す、今は轉用して法藏菩薩の願事成就とし給ふ、是亦『論註』の意に依る。已成とは因徳圓滿を示し通じて下二句に及ぶ。『論』^{下八}離菩提章に智慧慈悲方便の三門にまで三種の菩提に達するの法を遠離することを説き。名義對攝章には「向說智慧慈悲方便三種門攝取般若攝取方便應知」とありて、智慧慈悲方便の三門を般若方便の二心に攝せり。般若は實智にして方便は權智なり。此般若方便は今の智慧心方便心にして即權實一双なり。次に前に離菩提章に明す三種の遠離法を合して、遠離障菩提心とせり。即文に「遠離我心貪著自身遠離無安衆生心遠離供養恭敬自身心此三種法遠離障菩提心應知」と云ふ是なり。此今謂ふ無障心なり。次に「向說無染清淨心安清淨心樂清淨心此三種心略一處成就妙樂勝真心應知」と云ひて、順菩提章に説く所の三心を妙樂勝真心の一心に成ずるとす。然れば「無障心」と「妙樂勝真心」とは離順一双なり。妙樂勝真心を最後に説きて諸心を總合する意を示す。故に「略一處」と云へり。『論註』^{下三十一}に其名を釋して「妙言其好以此樂緣佛生故勝言勝出三界中樂眞言不虛僞不顛倒」と云へり。此上の智慧所生の樂、佛の功徳を愛するより起るとするものにして、此樂は妙なり勝なり眞なり、故に妙樂勝真心と云ふ。其體を指せば已に此隨順菩提の三心を合せるものなれば所謂大菩提心なり。末に約して云へば一心歸命の信心、本に約して云へば満足大悲の信心なり。佛は此心を以て速得菩提の因とし、衆生は之を領受して以て涅槃の眞因となす。『信卷』に「斯心者即如來大悲心故必成報土正定因」と、信心正因の宗義茲に其基を置く。行者歸命の一心其體徳に約すれば悲智不二の心體即妙樂勝真心と名くべく、此體徳あるが故に能く阿耨菩提の因たるなり。明教院の釋によるに衆生聞信の一念に自然に其徳を具す、明信佛智の故に智慧心を成じ、此願作佛心即度衆生心の故に方便心を成ずるなり、既に二心あれば自から無障心に契ふ。此三心即一心の故に亦妙樂勝真心を成ず。此心流出恒時相續の五門となるなりとす。速得成就無上道とは『論』^{下十一}に「菩薩如是修五門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提」とあるに依る、速得とは因徳圓滿せる所果海即滿す間に髮を容れず、之を速得と云ふなり。無上道とは具さには無上正遍道と云ふ、即阿耨多羅三藐三菩提の譯名なり。上に漸次成就と云ふ今速得と云ふ。之に就きて泰通院は上は大悲門に約し、今は大智門に約すと云へり。成自利々他功徳等此二句は總結二門なり、上の句は『論』の最終の文に取り、以て上來四十四行要するに『論』を頌するの總結とし給ふ意と伺ふ。『經』に曰く「自利利人我兼利」と、又曰「令我於世速成正覺拔諸生死勤苦之本」と。佛行無量なりと雖も要するに二利を出でず。上總票の文に「自利利他行成就」と云ふ、前四門を明し終りて「自利行成就應知」と云ひ、第

一〇三

五門終りて「利他行成就應知」と云ふ、今總結して「成自利他功德」と云ふ。「大經」に「令諸衆生功德成就」と説き給ふもの、法藏菩薩入出五門を修して衆生の二利を成就し給ひ、是を衆生に廻施し功德成就せしめ給ふものなることを明すにあり。されば衆生は法體成就の二利を領して己が自利他とするなり。既に自利他の徳を成するが故に入出二門にして他力なり。今結文に二利を成就する**則是名爲入出門**とあるが即入出二門他力の意を明すなり。然れども『論』の上は他力の言を明かに出さず故に此に入出二門他力なることを結んで、其他力の言は次鸞師章を待つなり、即入出二門即他力に非ずば永く衆生自利の起行となりて、法體成就に約すること能はず、三種成就願心莊嚴の他力の深義を見究めて、衆生の末に約する入出五門を、法藏の本に約して自利他の徳を成就し給へることを明す。茲に於て入出の五門が法體成就を全ふじて衆生の二利を成する他力の義極成するに至る。今本『論』の精要を頌して之を結ぶに成自利他功德、則是名爲入出門と述べ給ふ。仰ぐべきなり。

婆藪槃頭菩薩論

本師曇鸞和尚釋

上來は本『論』に依りて正しく入出二門の法義を頌し來り、入出二門は要するに他力廻向なることを結論す。已下は更らに其意を助顯して相承一轍の法義なることを示すべく曇鸞、道綽、善導、三師

の釋を引き之を頌し給ふなり。然り而して『淨土論』所明の五念門の深旨を探りて他力廻向の入出二門なることを知りうるもの全く『論註』の指南に依るものなれば、先づ『論註』に依りて他力の名を出し以て上來の意義を一層明尅にせんとし給ふ。何んとなれば上に本『論』の所明たる五念門行を本源に歸し、法藏所修の五念行として明し來り、修五念門行速得菩提の所以全く他力廻向なる理を確定し、本願力を高調し給へり。然りと雖も其然る所以は、本『論』文面上にありては容易に知り難し、故に諸家多く行者所修の一邊のみに取りて其幽玄の深旨を達觀し得ず。文當面を皮相的に解して自力修行の漸修によりて漸成する法義とし、論主の玄旨實に法體成就の他力にあることを見ず、よりにて他力の五念門が却つて隠されんとす。獨り鸞師能く論主の微意を達見して他力の趣旨を開顯し給へるなり。之鸞師を頌する所以なり。『證卷』終に「論主宣布廣大無碍一心普徧開化雜染堪忍群萌宗師顯示大悲往還廻向慇懃弘宣他利他深義」との給ひ、『和讃』に「天親菩薩ノミコトヲモ」等との給ふもの是なり。而して今此鸞師章を上本論と一組に科し以て入出二門を明すと見る説と、下西河終南と一組に科して同じく上の助顯とする説との二ある中、今は後説を取り、師釋を引いて上本論所説の法義を一層明尅に開顯し、兼ねて相承一轍なることを明し給ふと伺ふなり。今此二句は初に所釋の『論』を示し後は能釋の『論註』を指す。婆藪槃頭は世親の梵名、偈の初に釋名を上げて今と互顯す。論とは即『淨土論』にして菩提流支の譯する所たり。本師とは本宗の祖師と云ふ程

の意、和尚とは此に親教師と云ふ、釋とは一本「註」に作るありと云ふ。即註釋なり。『往生論註』二卷を指す。

願力成就名五念

佛而言宜言利他

衆生而言言他利

當知今將談佛力

前二句は總じて『論註』を要するもの、今句已下は別して其所明釋義を述ぶ。其中初十五句は正しく釋義を述べ、後三句は他力を結示す。初の中に於て今此四句は他力の宗本を明す。就中初一句は總票にして五念二利皆願力成就なることを示す。後三句は詳しく其義を明すにあり。『論』に「菩薩如是修五門行自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩提」とあるを、『論註』下^{三十三}に釋して「問曰有何因緣言速得乃至答曰論言修五門行乃至是故以利他言之當知此意也」と云ふ、今の所依なり。願力とは上の本願力廻向なり。成就とは二利行成就なり。名五念とは若し上に準ずれば「名入出」と云ふべきなり。然るに出入の名は二利を顯す、今は二利を一の利他に攝するの義を示さんと欲するが故に入出と云はずして、體に約して五念と云ふなり。佛而言宜言利他已下は正しく他利利他の深義を示し給ふ。上屢々述べたるが如く本『論』明す所の五念門行、卒爾に之を見る時は行者の所修にして、自力廻向に似たり、從つて漸次に修成して漸次に感果するもの、如し。然るに其本意を知る時

は論意全く他力廻向の五念門たるなり。而して其事は、速得菩提を高調し給ふ所に深く其幽旨伺はる。蓋し其深義幽玄にして容易に之を達觀すること難し、宗師は其深旨の開顯に努力して『論註』を著はし、専ら他力廻向の義を尅明にせんとし給ふもの實に今此他利利他の釋にあり。然れば『論註』一部の骨子實に此釋にありと謂ふべきなり。『論』文には速得菩提の所以を明かして「修五門行自利利他」等と結し給ふ、即文には自利利他と云ひて他利の言なし、是其深旨ある所にして利他の言を以て他力廻向の義を顯さんが爲なり。今鸞師は其「利他」の言に含蓄する所の他力廻向義を顯揚せんとして、『論』になき他利の言を施設し他利利他對映して妙釋を試み給ふ。他利利他は共に化他を指すの言にして所談の左右なり、其物柄別あるに非ず。然りと雖も今論主衆生而言の他利の言を廢して佛而言の利他を立するものは、他利の言は二利圓滿の徳相を顯すに便ならずして、利他の言は能く本佛不共の功德を詮顯するにあればなり。之『論』文になき他利の言を設けて利他に望め、特に利他の言を取る所以、全く「今將談佛力」の故なることを示し、以て五念二利の行、元來如來の他力廻向なることを明かにし給ふなり。故に『論註』他利利他對して義を顯さんとするの釋最も重要にして一部の眼目とも云ふべし。故に宗祖も『證卷』に「慇懃弘宣他利利他深義」等と釋し給ひ、『六要』^{一十三}にも「今家特立如來他力廻向之義專依此文」と云へり。されば此釋獨り『論註』の肝腑たるのみならず、實に又一宗の骨髓も此に蘊在せりと云ふべきなり。故に先輩は他利利他の所

謂深義を的確に伺はんとして其解釋に努力せり。蓋し是一心五念の他力深旨全く此釋に依りて解決すべきなればなり。従つて種々の異説を見る、今其大要を述べん。『窺班錄』には「他利とは他の佛が我を利することを云ふ。是從生向佛に約して名を立つ、他の佛に利せらるゝが故なり。利他とは我れ(佛)他を利することを云ふ、是從佛向生に就て稱とす、他の衆生を度するが故なり。他利の他は佛をさす、利他の他は衆生を指す。猶一人ありて物の左にありて物を謂うて右とす。又一人物の右にありて物を謂うて左とするが如し。他利利他共に佛を以て増上縁とす。功を本に推して乃ち利他と云ふなり」と。『大意』亦此説に同じ。二に若佛任運に増上縁となり、衆生其利益をうるを名けて他利とす、佛の自利に對する故なり。若佛他のために發願修行して衆生其恩徳を蒙ふるを名けて利他とす。佛他を利するを以ての故なり。同じく利生のことなれども、任運と作願と(一)是。自徳と化他(二)との其義異なるが故に、造語同じからず。他利利他は一法の異稱、其猶物の左右の如し。今『淨土論』に自利他利と説かず、自利利他と言ふ者は、衆生の速に菩提を成就するは皆法藏菩薩の自利利他に由るものなることを知らしむるにありと。『論註顯深義記』の説なり。三に自身眞如の内薫力を増上縁とし、衆生任運に利を得るを之を他利と云ふ、此は聖道の常談にして廻向利益他の大悲に非ず。故に簡んで「自衆生而言」と曰ふ。利他は如來一切衆生に代て願行を具足し、之を衆生に廻施し給ふ、故に簡んで「自佛而言」と曰ふ。然れば則他利利他は卽是自力他力の異稱なりと

す。之は『流情記』の説なり。恭敬院は第一説を評して、他利を解して他の字佛を指すと云はゞ、此文何ぞ一家立義の正依とするに足らんや。又他利を解して他に利せらると云はゞ、自利を解して自に利せらるとせざるべからず、之理の通せざる矛盾なり。又他利利他何れも同じく佛力ならば他利の言も亦他力を顯すに足る、何ぞ更めて「今將談佛力是故以利他言之」と曰ふことを用ひんや、利他を以て之を言ふものは是他利を以て之を言はずとの意を斷然示すべきなり。卽他利の言を以ては他力廻向の意顯れずとするの意を示すなり。然らざれば今將談佛力の釋徒設なり。慇懃の悲何れにかある、深義何れにか在らんや。又諸經論所説の他利の言と皆悉く背馳すと云へり。又第二説を評して、他利利他二俱に佛力にして唯任運と作願とを以て之が別をなすときは皆佛而言の法相をのみ成じて、「自衆生而言」を如何消釋するや、他利の他を指して衆生とせば衆生自らを指して他と云ふことと成りて太だ理に應せずと云ふべしと云へり。又第三説を評して、此説忽ち「左右」ありの言に異す、何んとなれば左右は一體双手の謂なり、然るに判じて自力他力の異稱とすること失の大なるものなり、又他利利他は元來一門中の異目なり、豈分離して、他利は是自力と言ふことを得べけんやと云へり。今其著『他利利他辨』に述ぶる所に依りて解釋せば、抑も他利利他は本は一法の異稱にして共に自利に對する化他の目なり、中に於て利他の言は自覺覺他圓滿の佛の全分の化他に名くるものを妥當とすべきなり。然るに諸經論を見るに菩薩因人の化他に名くるに他利利他を並べ用ふるも

のあり。是與奪二門の意にして、與門には一分化他の義あるが故に利他の名を以てし、奪門には全分の化他にあらざるが故に他利の言を以てするなり。之衆生の化他は自利を全ふじて利他、利他を全ふじて自利たり得ざるが故なり。「十住論」に其事見るべし。されば因人菩薩の化他には或は與へて利他と名け、或は奪うて他利と名く。然るに獨り永く利他の名を擅にするものは唯是佛のみなり。之佛にありて初めて自利を全ふじて利他し、利他を全ふするの自利、二利平等にして其體無差なればなり。今此『論』文は因人菩薩の速得菩提の所以を明す所なるが故に、宜しく他利の言を用ふべきなり。上の示現二利及び佛八種功德の結文に自利利他と云ふものは、實相即爲物たる別途不共の化他なるが故なり。然るに今菩薩因人の上と同じく利他の言を用ひ給ふものは論意深致なからざるべからざるなり。註家此深義を開顯して、菩薩行に利他の言を以て名くる所以は他なし、此本佛廻施の利行なりと云ふことを彰さんが爲なり。故に「將談佛力」等との給ふ。然れば「談有左右」等とは同じ化他の一門に於て、果人にしては宜言利他、因人にしては宜言他利なり。文に「佛而言宜言利他、衆生而言他利」と云ふものは是なり。之を言詮の便不便とす。然るに今却つて因人の利行に名くるに不便宜の利他の言を以て呼ぶもの、是必らず深致あるべきなり。此甚義幽致を知らせんが爲に註家は力を盡して、以て他利利他對明して、當然使用すべき便利の他利の言を廢して強ひて利他の言を立て、以て願力他力廻向法門の別致を開顯し給へるなり。故に宗祖も嘆じて「弘宣他

利利他深義」との給へるなりと伺ふ。當知今將談佛力とは『論註』の「今將談佛力是故以利他言之當知此意也」とあるに依る。佛力とは佛之力なり、佛之力とは能く衆生をして一心歸命の位に、具徳として五念二利を成就し速かに菩提を得せしめ給ふにあり。されば行者の二利具足は全く佛力を増上縁とするにあり、故に『論註』には『論』文の「修五門行以自利利他成就故」を引き、更に其意を示して「然覈求其本阿彌陀如來爲増上縁」等と釋し給ふ。是本『論』に於て利他と云うて佛力を談じ給ふ幽旨を開顯し給ふものにして、所謂他利利他の深義なり。

如實修行相應者

隨順名義與光明

以斯信心名一心

已下十一句は『論註』所明の釋義を述ぶる中第二に往生の因果を明すなり。其中初六句は法說にして、「淤泥華者」等の五句は喩說なり、初六句中又此三句は往生の因を示し、次「煩惱成就」等の三句は其果を明す。如實修行等は『論註』下二讚嘆門の釋に依る。然りと雖も實は五念門全部に通ずるなり。故に今別して其義を述べ給ふ。如實修行相應者とは論文を牒するなり。「如實修行」とは正しく稱彼如來名を以て其如實修行の相とす。然るに稱名には如實不如實の別ありて、不如實なるものは破滿の益なし。其益を蒙ふるは如實なるものに限る。今其如實の稱名なるものを次の句に擧

げて隨順名義與光明なりと明す。『論註』に二不知三不信を以て無明由在の稱名の不如實修行名義不相應なる所由を示し、終に「與此相違名如實修行相應」と云ふ。『論註』の釋には如實修行と隨順名義とを以て二とせり。然るに今は隨順名義を以て如實修行を釋するものは、其理に背かざるものを隨順名義と云ひ、其理に順じて修行するを如實修行と云ふなればなり。如來は是實相身是爲物身なりと知るを以て如實修行と名け隨順名義となすが故なり。勞謙院の云く、隨順名義とは名を稱して義に契ひ、能く法體と相應するの謂なり。義とは歸命の一念に破滿の益を蒙むるを云ふ、此義に契ふが故に稱すれども名號獨立してすけさぬ相た、名號獨立せるが故に稱名即南無阿彌陀佛なり、念佛即是南無阿彌陀佛なり。『安心決定鈔』^{十六}に所謂「領解ノコトハニアラハル、トキ、南無阿彌陀佛トマフスカ、ウルハシキ弘願ノ念佛ニテアルナリ」の相たなり。領解の口に顯はるゝに非ざる稱名なれば、之を無明由在の不如實の稱名と云ふ。名義の義と光明と尅實すれば同じきなれども、法門建立の左右あり。謂く名義は名が家の義にして、名義具足を顯し。光明は直に體につきて名體不二を顯すなりと解せり。以斯信心名一心とは如實修行相應の體を示す。「斯信心」とは上の相應隨順を指す。『論註』に「與此相違名如實修行相應」と云ひ、其次に「是故論主建我一心」と云ふものはなり。『和讃』に「如實修行相應へ、信心一ツニサタメタリ」と云ふも亦同じ。上に他力の宗本を示して「願力成就名五念」等と云へり。佛は之を我等に廻施するに一の名號を以てし給ふ。之を利

他圓滿の不行と云ふ。我等此廻施を領するは一心歸命の信のみ、之を他力廻向の大信と云ふ。此即往生の正因たるなり。

煩惱成就凡夫人 不斷煩惱得涅槃
則斯安樂自然德

上來は往生の因を明す、今は其果を明すにあり。『論註』^{下八}清淨功德の釋に「有凡夫人煩惱成就亦得生彼淨土乃至不斷煩惱得涅槃分焉可思議」とあるに依る。即清淨功德を以て安養淨土の妙徳不可思議なることを顯示するにあり。初句は能入の機の本分を示す。即論主所共の下品の惡機なり。之愚縛の機を擧げて安養の國徳を示さんとするにあり。生死の因を具足して聊かも除かざるが故に煩惱成就凡夫人と云ふ。因既に具足成就するが故に必ずや惡趣に墮すべき人なり。かゝる下凡の惡機彼土に生ずれば具足せる煩惱の因によりて必墮の果を引かず、頓に大涅槃を超證すること豈吾が力ならんや、此全く願力不思議の土徳の致す所なり。故に「斯示安樂自然德」なりと顯すにあり。不斷煩惱得涅槃とは他力横超の勝益を顯すなり。「不斷」等とは『維摩經』弟子品の中に「不斷煩惱而入涅槃」と云へり。今之によりて造語し給ふならん。然りと雖も義は天淵の異あり。『維摩經』註に「煩惱即涅槃故不待斷而後入也」と云へり。彼は煩惱の眞性即是涅槃にして、もとより不二な

り、然るを執じて二となすが故に必らず斷を要す。若眞性に達して煩惱即涅槃を證知せば又斷するを要せず、之を以て不斷とす。今は別途の義に約す。入不二の法門にありては生死即涅槃なりと證知するが故に一切無碍相なり、不二相即佛智見の無碍なるに約す。然るに我等有碍の凡夫は如何ぞ此境地に達することを得ん。今は佛智不思議の誓願能く未斷惑の惡機を攝して以て不二の妙證に契はしめ給ふなり。故に吾等は唯仰いで願力に歸するのみにして、即佛智に相應するが故に自からは不斷にして尙斷するが如きなり、之を不斷而斷斷而不斷と云ふ。蓋し不斷は機に約す、佛に約すれば則ち斷なり。永劫の勤修全く是衆生のために斷行を行じて而して之を行者に廻施す。行者此斷徳を領すれば則何をか斷せん、故に不斷と云ふ。故に行者の不斷は即佛の斷より成するが故に是則不斷而斷の義なり。其斷は全く佛徳なれば則斷而不斷なり。『信卷』末_五に「言斷者發起往相一心故無生而當受生無趣而更應到趣已六趣四生因亡果滅故即頓斷絕三有生死故曰斷也」と釋し給ふ。『和讃』にも「本願圓頓一乘ハ乃至煩惱菩提體無二ト、スミヤカニトクサトラシム」と云ふも是なり。不斷は機に約し斷は佛に約す。善通院曰く前には如實修行を一心と名くと云ふ、是因に約して不修而修を明す、今不斷等とは果に約して、不斷而斷を明す、共に願力の形容せる所なりと。得涅槃とは『論註』には「得涅槃分」と云ふ、今「分」の字を省く、『正信偈』亦同じ。之に就き『六要』二末_{二十}には「分約初生若約究竟宜略此字或又爲調七言字數除之無失」と釋せり。『窺班錄』には

『論註』は廣門に約するが故に分と云ふ、略門に約すれば唯是一果分極俱に涅槃なり、分と云ふも得たり極と云ふも得たりとす。『流情記』に云く、分は分齊の意、果分不可説の分の如し、分滿の義とするは誤なり、分滿の分ならば分得涅槃と云ふべしと。『義疏』の意亦『録』と同じ、而して宗祖は略門に依るの意を辨じ、『六要』を評して究竟に約すと云ふもの尙分極を見るの義なり。又字數のために省くと云ふも分字を存する意なれば甚だ匆卒なりと云へり。今謂く廣略に約するの義妥當なり。『眞要鈔』本_{十一}に「正信偈」の不斷煩惱得涅槃を釋して「一念歡喜ノ信心ヲオコセハ煩惱ヲ斷セサル具縛ノ凡夫ナカラスナハチ涅槃ノ分ヲウ」と云へり。分の字を加へて現益とす。『寶章』の信心獲得章も亦此意なり。然れば正定聚の義に約する時は分の字あるも妨げなし、特に分齊と解するを要せず。今は「則斯安樂」の句に接すれば滅度の當益に約するが故に特に分の字を除く、之を存するの意にあらざるなり。既に此句は横超の勝益を示すにあり、煩惱具足のもの頓に得涅槃する何れの國界か斯る不思議あらんや、此は彌陀淨土の機法一體に成じ給へる國なることを明すにあり。則斯安樂自然徳とは此句『論註』になし、今彼「焉可思議」の意によりて之を加へ以て國徳自然を示すにあり。『經』に「但有自然快樂之音是故其國名曰安樂」と云ひ、「皆受自然虛無之身無極之體」と云ひ、「其國不逆違自然之所牽」と云ふ。『法事讚』下_七に「從佛道遙歸自然自然即是彌陀國」とあり。國徳自然を讚嘆せるなり。上には二種不思議を承けて「斯示安樂之至徳」と云ひ、下

には「由佛願力獲得信」を承けて「到安樂土必自然」と云へり。國土自然即願力自然の外なきなり。抑も佛の本願は若不生者不取正覺と誓ふ、其往生を開くもの即第十一願なり、現生に於て往生を決せしむ之を正定聚と云ふ。當來往生の即時に大涅槃を證せしむ。而して此土入證の法に非ざるが故に、涅槃を證するは必ず淨土に於てせしむ。滅度涅槃は必らず彼土の益なり、故に之を土徳に屬す。願力と土徳と二にして不二なり、佛土即大願業力の所成、之を不可思議を成就すと云ふ。『和讃』に「信ハ願ヨリ生スレハ、念佛成佛自然ナリ、自然ハスナハチ報土ナリ、證大涅槃疑ハス」とあり、願力即佛土の不可思議境仰ぐべきなり。

淤泥華者經說言 高原陸地不生蓮

卑濕淤泥生蓮華 此喻凡夫在煩惱

泥中生佛正覺華

往生因果を明す中法に約して説く一段上に終り、已下五句は譬に約して説くもの、『論註』下四丁菩薩功德の釋に「淤泥華者經言高原陸地乃至能生佛正覺華」とあるに依る。初三句は譬にて後二句は合法なり。而して此文を『論註』によりて還相の利益と科する説あり。或は今轉用して佛願力に依りて凡夫煩惱中に眞實眞心を獲得することを示し給ふなりとする説あり。今謂く後説を可と

す。祖意を伺ふに此文斷章取義にして還相を明すにあらず。上の機法を承けて喻顯するのみ。喻ふる所の正覺華は機法一體にして、法に約すれば上の願力成就即正覺華なり。機に約すれば信心即正覺華なり。而して「淤泥華」の名は上の不斷煩惱を承くるが故に、今は譬喻を擧ぐと科す。淤泥華者とは『論』文を牒す。經說言とは釋なり。『經』とは『維摩經』佛道品なり。高原陸地不生蓮とは『經』は高原を二乘に喩へ、蓮華を菩提心に喩ふ。即二乘の大菩提心を起す能はざるを呵して一切煩惱皆是佛種なりと顯すの義を成す、今は轉用して彌陀の願力を喩顯するなり。高原不生蓮の顯示に就き『流情記』は煩惱なき人に喩ふ、清淨功德の不思議を顯さんと欲するが故に、無煩惱の人を簡ふなりと云へり。明教院は二乗等の各々自乗の法を執する機類に約して、總じて無宿善の人の斯法を信じ難きを顯すとせり。或は憍慢の人の此法を信すべからざるを顯すと。或は自力強盛宿善の濕なきに喩ふと云ふものあり。今謂く佛に約して解さば聖者は佛願の正意に非ざることを示す。佛の大悲は苦惱の衆生を捨てざるにあり、若苦惱の衆生なくんば佛の本願生起するに由なし、之を「高原陸地不生蓮」と云ふ。即罪障是功德の體、機法一體の義を成す。若機に約せば邪見憍慢の衆生は信心を生じ難し、之を高原不生蓮と云ふなり。機法左右ありと雖も佛願の生起本末を聞くは即機法二種の深信なれば遂に一致に歸するなり。卑濕淤泥とは煩惱具足の凡夫底下汚濁の機を喩ふ。生蓮華とは佛の正覺華即信心を獲るに喩ふ。此喻凡夫等とは合法なり、凡夫在煩惱泥中とは自

から上の煩惱成就凡夫人に應ず。生佛正覺華とは信心なり、終南の所謂「衆生貪瞋煩惱中能生清淨願往生心」と同じ。先哲の意に依れば信心を蓮華に喩ふるに略して五義あり。一に從如來正覺心蓮華生故、二に於七寶華中自然化生故、三に現生蒙分陀利華褒譽故、四に更爲煩惱淤泥不染故、五に苟開華必應結果故と。

斯示如來本弘誓 不可思議力卽是

入出二門名他力

上來は正しく『論註』の釋義を頌し給ふ、今此三句は之を結して以て入出二門他力なることを示し給ふにあり。而して其此を結して他力の入出二門なりと顯揚するもの鸞師の釋功たるなり。斯示とは近く譬喩を指すと雖も、其意は遠く上來を指すなり。『論註』下三十四に「凡是生彼淨土及彼菩薩人天所起諸行乃至當生信心勿自局分也」とあるに依る。如來本弘誓とは因願なり、不可思議力とは果力なり。因願果力上の願力成就の句に應ず、因は則不修而修なり果は則不斷而斷なり、之總て願力成就利他廻向の然らしむる所なり。之を「如來本弘誓不可思議力」と云ふ。卽是等の九字は正しく結なり。「卽是」の二字上の句にありと雖も下に屬す。入出二門名他力とは亦上の「願力成就名五念」と同じ、起結照應見るべし。卽上は五念を以て票し今は入出を以て結す、たゞ之法體成就の五

念を稱す。上本『論』の總結「卽是名爲入出門」に同じ。他力とは此二字鸞師の首唱する所、『論註』の卷首に難易二道を明し、五難の唯是自力にして無他力持なるを說示す。易行道を明しては佛力住持の言を上ぐ、而して卷末に至りて往還入出皆他力なる旨を示し給ふ。卽「生彼淨土」とは往相にして入門なり、「及彼菩薩人天所起諸行」とは還相利他にして卽出門なり。之を總じて「皆緣阿彌陀如來本願力故」とす、本願力とは他力なり。次で三願を引證す、第十八第十一第二十二願卽往相の因果と還相の利益にして、往相は入門、還相は出門なり、三願を引き終りて「以斯而推他力爲増上緣得不然乎」と結す。次で自力他力の例を擧げて「聞他力可乘當生信心」と結勸し給ふ。註主の他力を唱導し給ふことの重きこと誠に感佩すべきなり。宗祖尤も欽仰し給ふ所茲にあり。今殊に「入出二門名他力」の句を以て鸞師の釋義を結し給ふ所以なり。他力と言ふは如來本願力なり。今章要するに願力を以て始まり他力を以て結し給ふ、宗祖の御用意仰ぐべきなり。而して今章の主眼は入出二門の法義を示すに非ずして、入出二門が他力なることを啓發するにあること知るべきなり。

道綽和尚解釋曰

師釋を引き給ふ第二は西河の釋なり。上に鸞師を頌して入出二門他力なることを顯揚し給ふ、今師を引き何の義を顯すやと云ふに、『義疏』には上の所明を以て餘法に約對し、先づ難易を辨じて

此道の安穩なることを讃し、後に勝劣を論じて此法の超絶なることを嘆ずとせり。之西河、終南を一組として科せる上の所辯なり。勞謙院亦『論』『論註』を一組として正明入出二門とし、西河、終南を一組とし助顯として謂く、西河は機實を示すにあり、終南は法實を嘆するにあり、機法相待ちて助顯盡せりと。以て二師を引く主要を知るべし。之に依りて今謂く、上に明す所の『論』の他力信の所被の機を詳かにして、以て自力他力の旨を照成し給ふにあり。先きに鸞師は正しく『大經』に依りて法の眞實を釋し給ひ、其釋論主の「普共諸衆生」を顯して、下々品の劣機にかゝるものなりと雖も、未だ機の眞實を顯し盡すに至らず。茲に今師は鸞師の意を承けて『觀經』に依り本願の所被の實機を顯し給ふなり。上祖既に自力他力難行易行の判ありと雖も、未だ時機の堪不を論じ給はず、今師は特に時機を鑑みて約時被機して、聖道を廢し淨土を勸歸せしむ。偈に「我末法」と云ひ、「未有一人」と云ひ、「是五濁」と云ひ、「起惡造衆罪」と云ひ、「如暴風駛雨」と云ひ、「穢惡衆生」と云ひ、「一生造惡業」と云ふ。機の極劣を示すことに詳細を極む。是全く『論』の普共諸衆生の其人を示し所被の機實を詳説すべく今師を頌し給へるなり。茲に於て『論』の下々品の劣機を顯すの微意如何を知ることを得。故に今上に次で今師を頌し以て上來所明の他力法門を照成し給ふなり。今此一句は先づ西河の釋を總票せるなり。解釋曰とは『安樂集』を指す。『安樂集』は『觀經』を釋し給ふと雖も、其中多く『論註』を引き其法義を成じ給ふ、故に「解釋曰」の言は暗に一論を

以て所釋とし、『安樂集』を以て能釋とするの意を含む。

月藏經言我末法 起行修道一切衆
未有一人獲得者 在此起心立行者
則此聖道名自力

已下は別して西河の釋義を述べ給ふもの、中に此五句は聖道の難證なることを示す。蓋し是聖道の難證を廢捨する意なり。初三句は經を引き難證を示し、後二句は法を擧げて自力の名を結す。月藏經言等は『安樂集』上^{三十三}聖淨二門章の文、**在此起心**等は『同』^{三十三}難易二道を明すの文なり。之今師の意は聖淨二門難易二道自力他力を以て、法門の分齊を分判明了ならしめ、第十八願を以て易行淨土他力の至極と結論し給ふにあり。而して是蓋し鸞師相承の法門なり。月藏經言とは『經』に此明文なし、古來一大門教興章所引の五箇五百年の文を取意せるなりと見る。我末法とは正像末三時の年限に異説あり、今家は多く正法五百年像法一千年末法一萬年の説を取る。『安樂集』下^{十六}亦此説を擧げ給ふ。されば末法とは五箇五百年の第四已後なり。三學既に絶して白法隱滯す。又教行證の三法も三時に衰退ありて末法に至りては但だ教のみあり、行證は永く絶えたり。『末法燈明記』^{本三十八丁}に引く)に曰く「然則於末法中但有言教而無行證」と。我とは釋尊自から稱す、之

佛化中の三時なるが故なり。起行とは菩提の心行を起すこと、修道とは戒定慧を修すること。一切衆とは『安樂集』の「億々衆生」を述す。一切の言は「未有一人」に應ず。假令起行修道するとも云ふ意なり。未有一人獲得者とは聖道難證の相なり。『安樂集』聖道難證の意を明すに二あり。一に大聖を去ること遙遠なるに由ると云ふものは是なり。即時機に約して聖淨二門の興廢を論ず。『六要』六本^丁「問聖道之教末法之中修行得果非無其證何云未有一人乎、答今釋之意少是屬無約多分歟不遮末法少分又有諸教證也」とあり。勞謙院の意に依れば今師の意は約時被機して聖淨を廢立するが故に、三學無分は末法時機の當然なり、適ま上機ありて聖力冥に加はりて、多少の益を得る者ありとするも、此は是既に末法の時機に非ず、故に末法の時機に約する時は未有一人得者は確乎として、動かすべからざるなりと云ふべきなり。在此起心立行者等とは自力の名を結し給ふなり。『安樂集』上^{三十三}に「在此起心立行願生淨土此是自力」とある其據なり。然るに『安樂集』は『論註』巻首の難易二道と卷末の自他二力の釋とを擧ぐ。是『論註』一部を總攝するなり。之を結んで「在此起心立行」等と云ふ。而して『安樂集』には起心立行の下に「願生淨土」の四字あり。『今偈』及『和讃』に之を省けるに就て『流情記』には『集』の意正しく聖道難行の自力を示し、兼ねては淨土要門の自力を示すなりとせり。『大意』には『安樂集』上^{二十}『智度論』を引きて「新發意菩薩機解軟弱雖言發心多願生淨土」と云ふ、之聖道門中の菩薩の願生淨土なりと云ふ。『義疏』は集文錯

簡あり、願生淨土の四字臨命終時の上に移すべしと云へり。勞謙院は宗祖の意を案するに在此起心は正しく聖道にして、假令淨土に願生するも、其心行を以てするものは自力を免れず、故に淨土の定散要門までを名自力の中に攝して、唯有淨土は純粹弘願眞實のみなることを顯し給ふ意ならん。『安樂集』に願生淨土の言を置き給ふ亦此意ならんと云へり。今謂く既に之を省く、萬行往生を立するが如きは今偈の云はざる所、『安樂集』には「此是自力」と云ふのみ、聖道の名を出さず、故に「願生淨土」と云ふ、今は上に引く所の『月藏經』の起行修道即在此起心立行なるが故に、合して自力を結び給へるならん。在此とは此界に在るを云ふ。『安樂集』次上に「在此修因向佛果名爲難行往生淨土期大菩提乃名易行道也」と云ふ。これ難易二道を彼此に分ちて、聖道淨土の判目を立つるもとなり、故に今は則此聖道名自力と云ふ。『化卷』本^{十六}に「於此界中入聖得果名聖道門云難行道」と云ふ是なり。起心立行とは發心修行なり。聖道とは或は聖は正なり眞智に名く、道は能通の義、聖即道とす。又聖は正理を見る人に名く、道は智慧の理を云ふ、聖人の道諦なるが故に依主釋なりとす。又聖は所期の果、道は其因に名く、即聖に至るの因を名けて聖道と爲す。名自力とは正しく自力の名を以て其法を結するなり。道綽は鷹門の自力他力を相承して、聖道淨土の判を設け給ふが故に、今其意によりて聖道は自力なりと結び給ふ。

當今末法是五濁 唯有淨土可通入

已下は淨土易行を明すにあり、中に於て此二句は機教相應を示し、次「今时起惡造衆罪」已下十句は正しく淨土の法義を明し、「則易行道名他力」の一句は他力を結示す。『安樂集』上^{八丁}に「當今末法現是五濁惡世唯有淨土一門可通入路」等と云ふ是其據なり。今此文機教相應と云ふものは、聖道の諸教は未有一人獲得者なり。是機教不相應なればなり。淨土一門の可通入路なるは是極惡劣機に相應して、之を救濟し給ふ教なればなり。『安樂集』の開卷に約時被機勸歸淨土とあるもの即是なり。當今末法とは上の末法を承けて、今時は『大集經』所説の末法にして、聖道の諸教を以ては得脱出來ざる時なり、唯有淨土の一門のみ可通入路なりと、前に向ふて聖道を廢する意あり。集主の出世は佛滅後一千五百十一年なれば、其在世正しく末法の初期なり、故に當今末法と云ふ。是五濁とは『小經』に曰く「五濁惡世」と是なり。唯有とは唯に簡持、決定、顯勝の義あり、即次の本願弘誓の第十八願が唯有淨土の法體なり。『義疏』には唯有と云ふ所以を釋して是餘法の能くする所に非ざるが故に、十即十生にして一失もなきが故に、凡夫報土に生ずるが故にと云へり。淨土とは清淨人所居の國土に名く依主釋なり。具さには往生淨土と云ふ、所期を以て所宗に名く。聖道の此土入證に對し彼土得證に名く。『論註』下^{三丁}に「隨順往生淨土法門」と云ふ是其據なり。可通入とは

通は塞に對す、聖道の未有一人得者は塞なり。唯有淨土の法門のみ三時に通じて塞る所なし、故に可通入と云ふ。聖道難證の義は『月藏經』に依りて之を明す。今淨土通入の義は何經に依りて明すとすれば『安樂集』次下に「是故大經云」と票して三經の意を述するものはなり、故に次の偈文此意を以て三經の主趣に依りて之を頌し給へるなり。

| | |
|---------|---------|
| 今时起惡造衆罪 | 恒常如暴風駛雨 |
| 本弘誓願令稱名 | 是爲穢濁惡衆生 |
| 是以諸佛勸淨土 | 縱令一生造惡業 |
| 三信相應是一心 | 一心淳心名如實 |
| 若不生者無是處 | 必得往生安樂國 |
| 生死即是大涅槃 | |

已下十句は正しく淨土の法義を明すものにして、『安樂集』上^{八丁}に「是故大經云若有衆生縱令一生造惡乃至何不思議都無去心也」と云ふものは其據なり。此中初二句は所被の機を擧げ「本弘誓願」等の三句は能被の法を示し、「縱令一生」等の四句は機受の要を示し、「必得往生」等の二句は所得の果を明すなり。『安樂集』は先づ『大經』によりて本願を擧げ以て法實を示し、次で世出世の善を示

して機の堪不を推檢し、次に『觀經』に依りて機實を示せり。然るに今偈は機實を示す文を前に廻し給ふものは、上の末法五濁に接して應病與藥の次第なり。『選擇集』下六に所謂「爲極惡最下之人而說極善最上之法」の意なり。今時とは上の當今と同じく集主の時なり。起惡造罪とは惡は惡業にして直に其因に名け罪は罪碎にして惡の招く所、罪碎を招くの業なるが故に果を以て因を呼んで罪と云ふ。明教院は起惡は惑障、造罪は業障とし。『義疏』には理に違ふを惡と名け、常相に我を立つ、罪は謂く罪碎果に望めて以て言ふなりとせり。起惡即造罪なり。恒常とは『安樂集』に「一形造惡」と云へると同意にして唯知作惡曾無一善の相なり。暴風駛雨とは起惡造罪の急激にして猛烈なるに喩ふ。暴風は形見るべくなくして物を損ず、意業の煩惱に喩へ。駛雨は形見るべくして物を損ずる身口業の衆惡に喩ふ。本弘誓願令稱名等の三句は能被の法を示す。上に機教相應を明す、今は其淨土門より劣機相應して出離得脫の易く出來うる法を示すなり。此中初二句は『安樂集』に『觀經』下々品の意を以て第十八願に合し給ふ文を頌するなり。『安樂集』は『觀經』を以て『大經』の願文を顯す故に「是故大經云」と云ひ、一生造惡の實機を出し十念相續稱我名字との給ふ、是即下々品の「令聲不絕具足十念稱南無阿彌陀佛」を以て、本願の乃至十念を釋成し給へるなり。されば「本弘誓願」とは第十八願にして「令稱名」とは彼「十念相續稱我名字」なり。是上の讚嘆門に所謂「隨順名義稱佛名」の意にして、無上の信心に依止して生ずるものなり。故に『安樂集』亦次下の文に「但能

繫意專精信常能念佛稱名」と云ひ、今偈亦次下に「三信相應是一心」と其信を頌し給ふ。抑も第十八願を取意し給ふに、龍樹は「若人念我稱名」等と云ひ、三信十念並べ擧げ、論主は不虛作住持の一偈に『大經』の「其佛本願力」の文に依り「遇」の一字以て聞其名號に當る、是三信を以て十念を攝するなり。鸞師は的取三願の中具さに願文を引き、之を述して『論註』下三十に「緣佛願力故十念々佛便得往生」とあり。之を上卷終りの八番問答に本願成就文と『觀經』の下々品の文とを合せ引くに照す時は、十念佛便得往生の言は本願の十念を下々品に合するの意なることを知る。『安樂集』は鸞師に相承するが故に、今本願を取意するに當りて、下々品の文意によりて、「十方衆生」に代へるに一生造惡と臨命終時を以てし、佛願の正爲を示す。「乃至十念」に代へるに十念相續稱我名字を以てす。而して三信は其中に攝するなり。既に無上の信心に依止する稱名なるが故に「令稱名」と「令」の字を以て他力如實の稱名なることを示す。故に終日能行するも毫も稱功を認めず、稱々唯他力法體を仰ぐのみなり。是爲穢濁惡衆生とは『安樂集』に本願の十方衆生に代へて「縱令一生造惡臨終時」と云へるものを頌す。是『觀經』下々品の惡機を出して彌陀の本弘誓願は全く此機のため起るものなることを示すなり。即『觀經』を以て『大經』の本願の正意を顯すにあり。是以諸佛勸淨土とは『安樂集』に『小經』の意に依りて、「是以諸佛大慈勸歸淨土」と云ふに據る。是以とは惡機のために弘願念佛を立つるものにして、此法に非らざれば能く此機を救ふこと能はず、此機

に非らざれば能く此法を顯すことなし。機法相契うて利益廣大なるものは實に本願の名號なり。故に諸佛淨土を勧め給ふなりと頌し給ふ。縱令一生造惡業等の四句は機受の要を示し給ふ。上の本弘誓願を十七願に置く時は本願名號正定業の句に當り、今の四句此に對して機受を示すものは、第十八願位にして至心信樂願爲因の句に合す。所依の文上を逐ふ時は諸佛大悲勸淨土の次に「縱令一生造惡乃至定得往生」等と云へるものは其據なり。彼文の「繫意專精」と云ふものは即如實三信の義なりと雖も其釋詳細ならず、故に『安樂集』上^{三十一}の「若能相續則是一心但能一心即是淳心具此三心若不生者無有是處」とある釋文に合して、繫意專精は本願の三信、論主の一心なることを示す。上の鴈門章に「如實修行相應者」等の三句を以て機受を示し。今又此文によりて述するものは相承一途なることを示し給ふなり。又上に謂ふ「令稱名」は乃至十念なれば今の三心は正しく本願の三信なり。今の三心即如實相應の義なれば上の稱名は此三信より流出するものにして、即讚嘆門の稱名たることを知らしめらるゝなり。此四句の中初一句は造惡の機を示す。縱令とは假與の辭にして願力無窮を顯す。一生造惡とは下々品の劣機にして即上に所謂穢濁惡衆生のことなり。今茲に重ねて機受を示すものは、次の句は上^{三十一}の文に依ると雖も義は相連ることを示さんが爲なり。三信相應是一心等の二句は如實の信相を示して上の「本弘誓願令稱名」は此信より流出するものなることを知らしめ給ふなり。上の鴈門章に「如實修行相應者乃至以斯信心名一心」と頌すると師資相承符合す

る由仰ぐべし。三信とは淳心一心相續心の三なり。『安樂集』には「具此三心」と云ふ。今「三信」となすものは三不を明すに「一者信不淳」等と三皆信心と要するが故に、之に對すれば淳一相續は皆是信の上の義なること勿論なればなり。相應とは或は三信展轉して相捨離せざるが故なり。或は此三信名義と相應するが故に三信相應と云ふとせる義あり。或は『義疏』は相應の字恐くは「續」の字の寫誤ならん、若強て解さば相應は相續の異稱なり、善く相續するものは常に是一法にして前念後念影響するが故にと云へり。今謂ふ第二説に従ひ如實修行相應の意とす。一心とは隨一の一心と、即一の一心とあり、今謂一心は即一の一心にして、隨一の一心は淳心相續心と共に三信の言の中にあると云ふべし。而して三信はもとより迭相收攝するが故に、何れの一も他を攝すと雖も、下の句に殊に淳心の一を出して「名如實」との給ふものは如實修行相應の義を示すには、三名中淳心最も便なるが故なり。『安樂集』には一心と淳心との間に「即是」の字あり、今之なきは偈句字數の都合なり。如實とは如實修行相應の略なり。淳とは純なり厚朴なり、即質實の義にして如實なり。若不生者無是處、此一句は誓願虚しからざる意を示して、願文を以て結し給ふなり。本願には三信を以て若不生者に望め給ふ、是三信必生の義なり。處とは處分の處の如く道理を云ふ。即如實修行相應のものにして往生せざる道理なく必得生を顯はすなり。必得往生安樂國等の二句は所得の益を示す。上の若不生者は信因決定を示し、今の二句は滅度の當果を明す。『安樂集』には生死即涅槃の文な

し、然れども集主既に『論註』に依りて生即無生の義を『安樂集』上^{三十一}に辨せり、生即無生なれば大涅槃なること知るべきなり。故に今此一句を頌し給ふ。生死即是大涅槃を解するに二あり、一に往生即無生の益を示す、凡情には此に死し彼に生るゝの想をなす、之を生死と云ふ。然るに彼土に生じれば見生の火自然に滅して大涅槃を得るなり。二に悲智相即の妙證を顯す、大悲に約すれば無生即生にして生死なり。大智に約すれば生死即涅槃なり。生死涅槃もと無二なるの義なればなり。

則易行道名他力

此一句は上來所述の法義を結して、易行道他力に歸する旨を示す。『安樂集』上^{三十一}に「阿彌陀如来光台迎接遂得往生即爲他力」と云へる文に依る。而して上の「則此聖道名自力」の句に對應する時は今亦「則此淨土名他力」とも云ふべきなり。然るに易行道の名を出して他力を結するものは、西河の聖淨二門判は全く『論註』の難易二道自力他力の判を承け給へるものなれば、今は其相承の違はざることを示す意にて易行道の名を出し、上の句に對しては影略互顯し、又以て鴈門章の「入出二門名他力」の結文に應じて、今云ふ淨土門の法義こそ他力易行道なりと結し給へる意ならん。

善導和尚義解曰

師釋を引く第三に終南なり。上西河章は鸞師の易行他力を相承し約時被機して、聖道は難行自力にして未有一人得者なれば不相應の教なりと廢し、第十八願淨土の法義こそ易行他力にして萬機の救はるゝ末法唯一の法門なりと成立し給へり。而して其往生淨土の法義は全く鸞師の所謂隨順往生淨土の法門にあり、之を承けて末法の劣機に相應するものは易行他力の法義なる旨を明す。終南は西河を承けて約時被機して勸歸淨土の易行他力の中に於て、權實眞假を分ち、廢權立實去假就眞し給ふ、茲に於て他力易行の法實を盡すに至る。助顯の意知るべく從つて相承一轍の旨知るべきなり。義解曰とは『窺班錄』に云く如來眞實義に依りて解釋するなりと。明教院云く五部の中の妙義深解を取るが故に義解と云ふなりと。今謂く、西河は『論註』を紹述するが故に『安樂集』は自から『論』を解釋する意を致す、故に「解釋曰」と云へり。然るに終南は西河を相承するも直ちに『論』を解するには非ず、然りと雖も歸三寶偈に「我依菩薩藏」と云ひて、全く『論』に倣ふて語を作り給ふ。其意『論』の修多羅眞實功德相を判じて、菩薩藏、頓教一乘海となすなり。是等の義自から本『論』所詮の法を義解するに當るが故に「義解曰」と云ふならん。

念佛成佛是真宗 即是名爲一乘海
 即是亦名菩提藏 即是圓教中圓教
 即是頓教中頓教 真宗叵遇難得信
 難中之難無過此

終南章初一句は總票にして今句已下は別して釋義を詳説するなり。其中三を分ち、初に先づ真宗法義の超勝なることを明し、次で獲信の因縁を示し、後に其利益の勝妙なることを頌す。今句已下は其初なり。念佛成佛是真宗とは真宗を票するものにして、法照禪師の『五會讚』に依る。禪師は善導の後身と稱せられ全く善導を昭述するが故に今は終南の語として頌す。『行卷』^{三十一}の引用亦同じ。念佛とは、信行總攝の名なり。『流情記』に念佛によりて即成佛す、故に念佛成佛と云ふ、念佛は即横超他力の行信、成佛は即眞實報土の眞證なりと釋せり。是真宗とは眞は眞實、宗は宗旨、即權假に簡ぶの言なり。「念佛成佛」は即選擇本願なり、此選擇本願は淨土眞宗なり、故に是を抑へて「是真宗」と云ふ。『大經』序分に「眞實之利」と之ひ、流通分には「大利無上」と説きて少利有上の聖道門に簡ぶ。勞謙院云く、此淨土眞宗の體は唯は六字の名號にして即二廻向の法體なり、故に『本典』に「謹案淨土眞宗有二種廻向」等との給ふ、此に於て知る論主の出入五門鸞師に至りて他力往還の廻

向となり、之を淨土の法門と云ふ。西河之を承けて易行淨土と判せり。終南に至りて淨土中に於て假を去り眞に就き、以て眞宗とす。此に於て純乎たる淨土眞宗顯る、宗祖立て、淨土眞宗とするもの、能く相承の精髓を觀破し給ふなりと云へり。即是名爲一乘海、以下は念佛成佛の超勝たることを、乘に約し藏に約し教に約して嘆じ給ふなり。故に即是々と指す。一乘海とは歸三寶偈に「頓教一乘海」と云ふに據る、此名は宗祖特に欽仰し給ふ所にして『行卷』^{四十一}に「言一乘海者一乘者大乘乃至唯是誓願一佛乘也」と釋し、又同^{六十一}には「言海者從久遠已來乃至成本願大悲智慧眞實恒沙萬德大寶海水喻之如海也」と懇切に釋仰し給ふ。一とは無二に名く、即念佛成佛の法は法界唯一無二の法なりとす。乘とは運載の義、終南の「莫不皆乘」とは是能乘に約するもの、所乘は即佛の本願力なり、故に誓願一佛乘と云ふ。其量深廣にして衆機を攝して漏すことなし、之を海水に喩ふ。所謂「彌陀智願海、深廣無涯底」にして『行卷』に轉善轉惡の義を釋し給ふ是なり。實成院云く、誓願の二字至要至極なり。『讚』に「本願圓頓一乘ハ」と云ふ、一乘の法體を論すれば聖淨二門無二無別なれども、逆惡の凡夫をして此一乘の妙域に契はしむるものは唯是本願一乘のみ。故に、『行卷』^{八十一}には「弘誓一乘海者乃至何以故誓願不可思議故」等と釋し給ふと云へり。即是亦名菩提藏とは『般舟讚』^三に「觀經彌陀經等說即是頓教菩提藏」とあるに依る。歸三寶偈には菩薩藏と云ふ、即聲聞藏に對するなり。宗旨門亦同じく「今此觀經菩薩藏收頓教攝」と云へり。『六要』二末

二十に「菩提藏者依四乘意指佛乘也又有異本云菩薩藏各無違失」と云へり。「義疏」には古より菩提藏の名あることを聞かず、異本是なるに似たり。然れども『行卷』『二卷鈔』皆菩提藏とあれば異義を容るべからず、西河、終南皆曰く菩提は即是佛乘の名たり、然れば『六要』の佛乘を指すと云ふもの説き得て好し。菩薩と佛とは因果の異なり、能覺の人に約すれば菩薩と云ふ、所覺の果に約すれば菩提藏と云ふべし、今は念佛成佛の言に應じて一佛乘を菩提藏と云ふなりとせり。即是圖教中圖教、頓教の名は善導に出すと雖も圓教の名を見ず、然るに今此所に之を云ふものは已に頓教と云ふ、此中に圓の名を含む、頓の至極を圓と云ふ、故に圓頓一乘海と云ふ、圓融圓滿の義なれば何れも一乘海と云ふべし、然れば含む所の旨を出して其義を顯し給へるならん。『二卷鈔』上^七に「本願一乘海頓極頓速圓融圓滿之教也應知」とあり其意見るべし。即是頓教中頓教とは泰通院云く、問大師の言は聖道の漸教に對して頓とこそ給へ、聖道の頓教に對して頓との給ふに非ず如何、答大師亦此意あり。聖道の頓教は小乘凡夫をして報土に入らしむることを許さず、然るに『玄義分』^{二十}に彌陀の淨土を報土と定めて、而も五乘齊入を談じ。同^三に「門餘八萬四千」等とあり。又『般舟讚』^二には「或説人天二乘法」と一代の漸頓を擧げ來りて、之を攝して「瓔珞經中說漸教」との給ふ。又^四「門々不同名漸教」との給へりと解釋せり。吉水大師の『大經釋』(漢語燈^三)に「天台眞言皆名頓教然彼斷惑證理故猶是漸教也明未斷惑凡夫直出過三界長夜者偏是此教故以此教爲頓中之頓也」とあり。圓中圓、頓中頓と云ふも全く餘他の一切法門を廢捨して唯誓願一佛乘を立つるの意知るべし。若他に對せずして云ふ時は一乘の二三に對せざるが如く圓頓中の圓頓と云ふは、玄之又玄と云ふが如く讚美の極なり。是又『論』の速滿寶海に應ず。速は速疾にして頓なり、滿は圓滿にして圓なり。眞宗^二回遇難得信等とは『散善義』^{三十}に「竊以眞宗回遇淨土之要難逢」とあるに依る。此二句『流情記』『大意』等は皆下に屬して信を明すとす。『義疏』は上に屬して信の難易に約して校量して勝を顯すと科せり。今亦上に屬して法の尊高超勝を顯すものと見る。『行卷』^九に「念佛成佛是眞宗」の文と今の『散善義』の文とを連引し給ふ、此意難信に約して法の最勝を顯すものにして、難信中の難たるは此教の圓頓中の圓頓なる義を示すにあり、故に今は上に屬して解す。眞宗とは上の是眞宗を承く、回遇とは遇は信の義なれば次の「難得信」のことなり。回は不可なりと訓じ、難しと同じ。『禮讚』に「佛世甚難值乃至此復最爲難」と云ふ、蓋し是『大經』の「若聞斯經信樂受持難中之難無過此難」の文に依るものにして、若聞斯經とは今の眞宗回遇到に當り、信樂受持とは難得信なり。難中之難無過此とは難得信を更らに釋するものにして、『大經』に值佛聞法修行の難を明す。通途佛教にして尙是難なり、況んや弘願の信樂住持することは層一層甚難なることを明す。これ道理成佛の法は行じ難きも信じ易し、無義爲義の弘願法は疑情深く覆ふが故に、易往なりと雖も、法のまゝ領解し難きなりとす。「難中之難」に就て明教院は十義を設く。一に此法超過諸教

也」とあり。圓中圓、頓中頓と云ふも全く餘他の一切法門を廢捨して唯誓願一佛乘を立つるの意知るべし。若他に對せずして云ふ時は一乘の二三に對せざるが如く圓頓中の圓頓と云ふは、玄之又玄と云ふが如く讚美の極なり。是又『論』の速滿寶海に應ず。速は速疾にして頓なり、滿は圓滿にして圓なり。眞宗^二回遇難得信等とは『散善義』^{三十}に「竊以眞宗回遇淨土之要難逢」とあるに依る。此二句『流情記』『大意』等は皆下に屬して信を明すとす。『義疏』は上に屬して信の難易に約して校量して勝を顯すと科せり。今亦上に屬して法の尊高超勝を顯すものと見る。『行卷』^九に「念佛成佛是眞宗」の文と今の『散善義』の文とを連引し給ふ、此意難信に約して法の最勝を顯すものにして、難信中の難たるは此教の圓頓中の圓頓なる義を示すにあり、故に今は上に屬して解す。眞宗とは上の是眞宗を承く、回遇とは遇は信の義なれば次の「難得信」のことなり。回は不可なりと訓じ、難しと同じ。『禮讚』に「佛世甚難值乃至此復最爲難」と云ふ、蓋し是『大經』の「若聞斯經信樂受持難中之難無過此難」の文に依るものにして、若聞斯經とは今の眞宗回遇到に當り、信樂受持とは難得信なり。難中之難無過此とは難得信を更らに釋するものにして、『大經』に值佛聞法修行の難を明す。通途佛教にして尙是難なり、況んや弘願の信樂住持することは層一層甚難なることを明す。これ道理成佛の法は行じ難きも信じ易し、無義爲義の弘願法は疑情深く覆ふが故に、易往なりと雖も、法のまゝ領解し難きなりとす。「難中之難」に就て明教院は十義を設く。一に此法超過諸教

故、二に顯示此信最勝故、三に得益超出諸善故、四に衆機通入報土故、五に一生業事成辦故、六に顯依多劫宿善故、七に顯他力發起信故、八に簡去無宿善機故、九に制遮行者憍慢故、十に爲生念佛恩心故と。

釋迦諸佛是眞實 慈悲父母以種種
善巧方便令發起 我等無上眞實信
具足煩惱凡夫人 由佛願力獲得信

已下六句は獲信の因縁を明すなり。六句中初四句は發遣と證誠とに約し、後二句は正しく本佛の願力に約す。『般舟讚』^一に「釋迦如來實是慈悲父母種々方便發起我等無上信心」と云ひ。『法事讚』^{上_丁五}に「禮本師釋迦佛過現未來諸世尊所以歸依者佛是衆生大慈悲父」等とあるものは其據なり。釋迦諸佛とは『般舟讚』には唯釋迦如來と云ふ、今諸佛を加ふるは『禮讚』の文に合せ依る。『和讚』には「釋迦彌陀ハ」等と云ふ、是三佛の遣喚證誠其旨同じきが故なり。而して今彌陀を上げざるものは、次の「由佛願力」と互顯するなり。斯く彌陀釋迦諸佛を擧げて獲信の因縁を明すものは上の難信を承けて他力發起の義を示すなり。終南二尊一教を示して序題門に「仰惟釋迦此方發遣彌陀即彼國來迎彼喚此遣豈容不去也」と云ふもの、全く二河譬の旨なり。其三佛に約して説くものは

三經の深信にして、『散善義』の第五深信に至りて三隨順とす。今偈は『論』を以て三經一致を明すが故に、西河章に約時被機に約して機法合して三經の意を示し、今は三佛の遣喚證誠に約して三經一致を示し給ふならん。是眞實慈悲父母とは佛の大悲世間虛妄の恩愛に非らざることを示す。其眞實の慈悲とは眞如法性を全ふするの慈悲にして、一切衆生をして涅槃界に生せしむる、此を眞實慈悲とす。父母は能生の用あり愛感養育の功あるが故に慈悲を父母に喩へたるなり。以種々巧方便とは上の禮拜門下の「善巧方便利群生」に應ず。所謂種々善巧とは『般舟讚』^一に「又說種々方便教門非一」等と云ひ、『安心決定鈔』^{本_丁六}に「種々ノ方便ヲトク教門ヒトツニアラストイフハ、諸經隨機ノ得益ナリ」とある是なり。廣く一代の半滿權實の法を説くもの淨土に歸入すべく教養するにあり。又淨土門内にありては一代を攝して定散二善と説き、慕ふ所の方便の善とし、終に弘願海に入らしむるなり。如此種々方便して釋迦諸佛が善巧教化し給ふものは、實に無上の信心難得の故なり。種々方便の力に依らずんば自力固執の我等何ぞ弘願の信心を得ることあらんや。權假を修して權假に止むるに非ず、必らずや弘願の信に歸入せしむる所に於て善巧方便と名く。令發起とは『般舟讚』に「發起我等無上信心」と云ふ、今「令」の字を加ふるもの、獲信の功は他力にあることを示すなり。即「能令速滿足」の令の意なり。無上とは上に「難中之難」等と云ふ即最勝無比の義なり。信を無上と云ふに付き泰通院は四義を出す。一に最勝信の故に。『經』に「無上菩提心」等と説

く。二に所信の法に約す、無上の佛智を信する信なるが故なり。三に所具の徳に約す、無上功德を具足するが故なり。四に所得の果に約す、無上佛果を證すに因なるが故なりと。眞實の二字を加ふるは『禮讚』深心釋の眞實信心の語に依る、眞實に應じて佛の眞實即衆生の眞實なることを示す。是又初の眞實功德に照應す。具足煩惱凡夫人等、『禮讚』^二に「自身是具足煩惱凡夫」等とある是なり。上の鴈門章の「煩惱成就凡夫人」に應ず、前句は釋迦諸佛の善巧方便に約し、今は正しく本佛の願力に約するなり。由佛願力獲得信とは上は信機に約し今は信法を述す、而して必ずしも一文に依らず、或は『禮讚』^四「然彌陀世尊本發深重誓願」等に依り、或は『散善義』^{十二}二河譬の文に依るなり。案するに終南願力を明す文一ならず、而して其承くる所は鸞師なりと云ふべし。何んとすれば『論註』に速得菩提の理由を示すべく三願を引き、一々に「緣佛願力」と云ひ遂に「他力増上緣」と結す。西河は之を承けて『安樂集』二道章「莫不皆以阿彌陀如來大願業力爲増上緣也」と云ふ。『玄義分』序題門の弘願釋は全く之を承けたるなり。其他「正由托佛願」、或は「乘佛願力」、「以佛願力」、「乘彼願力」等なり、今之等の文に依りて「由佛願力」の句を造る。由とは緣なり、増上緣の義なり。上既に釋迦諸佛の慈愛に依ることを示す、二尊の大悲に依らざれば何を以てか煩惱具足の凡夫人、無上の信心を發起することあらんや。『廣』『略』二書に「乃由如來加威力故博由大悲廣慧力故」と云ふ此意なり、他力廻向の信心なること明尅となる。

斯人即非凡數攝 是人中分陀利華
 斯信最勝希有人 斯信妙好上上人
 到安樂土必自然 即證法性之常樂

此六句は最後に勝妙の利益を明し以て結するなり。六句中初四句は現益を示し、後二句は當益を明す、即一心の利益現當に互りて勝妙なることを明し給ふ。斯人即非等とは『序分義』^{三十一}の「若不受此苦者即非凡數攝也」と云ふに語を取り、釋名門の聖衆莊嚴を明す下の「現在彼衆及十方世界同生者是」とある意に依る。是即『論註』眷屬功德の四海兄弟の釋、亦入會衆の義にして、今之を擧ぐるなり。斯人とは「由佛願力獲得信」の人を指す、上に所謂「即獲入大會衆數」の事にして、此界にありながら彼土聖衆の數に攝せらるゝもの、凡數の攝に非らざる所以なり。是人名分陀利華とは『觀經』の「若念佛者當知此人是人中分陀利華」と云ふに依り、上の「非凡數攝」を喻顯す。又是上の鴈門章の「淤泥華者」に應ず。分陀利華とは白蓮華なり。『義疏』に曰く法華の經題、密宗の曼陀羅八葉等皆此華に取る、他經に亦分陀利華を説くと雖も、これを至愚の人に授くること能はず、今は則阿彌陀如來所得の至極無生清淨の分陀利華が、極惡最下の愚人に廻入して、其をして即分陀利の人とならしむ。上に云ふ所の圓頓中圓頓は是に於て見るべしとす。斯信最勝希有人等は『散善

義』^{三十}の五種嘉譽を擧ぐ。『散善義』には好人、妙好人、上々人、希有人、最勝人と次第す。今之を改むるものは實に此五種次第一定なきが故なり。『疏』に喩の上は最勝の名なく、今亦「好人」を略す。上には「斯人」と云ひ今は「斯信」と云ふ、人法互に顯せるなり、人の希有最勝なる所以は信の希有最勝なるが故なり。信の希有最勝なるは亦希有最勝の法より生ずる信なるが故なり。『信卷』初に信を嘆じて「希有最勝之大信」と云ふ、知るべし。到安樂土必自然等當益はを明す。往生即成佛の一果を明し以て上の念佛成佛に應ず。『玄義分』^三に「捨此穢身即證彼法性之常樂」とあるに依る。必自然とは土徳に約し他力を顯すの言なり。『經』に「此皆無量壽佛威神力故本願力故」と云ふ是なり。而して本願何故に自然に開悟せしむるとならば、之自他不二の願なるが故なり。即證とは初生速極證大涅槃にして本願力の妙益なり。『略書』偈文に「得難思議往生人、即證法性之常樂」とあると同意なり。法性之常樂とは法性は涅槃の異稱「常樂」は涅槃四法中の二を擧げて他を攝す。而して「常」は無量壽の佛號「樂」は安養の國名に合す、即是彌陀の妙果身土不二に名けて無上涅槃と云ふ。『論』には二力を以て安樂の至徳を釋し、『論註』には不斷煩惱を以て安樂自然の徳を示し、西河は生死即涅槃と云ひ、今は法性常樂を以て結す。上來終南を以て助顯し給ふもの其主につけば法の尊高を顯揚するにあり。故に或は直に法を稱して「一乘海」と云ひ、又は「菩提藏」と云ひ、又は圓頓中圓頓なり等と云ひ、又信を嘆じては「無上眞實信」と云ひ、其人を稱揚し

ては「分陀利華」等と云ふ。之亦法の超妙最勝を顯すに外ならず、故に全章之を要するに法の尊高を嘆ずるもの、助顯の使命を果すものと謂ふべし。

入出二門偈頌戊寅錄

終

昭和十三年七月十日印刷
昭和十三年七月十五日發行

入出二門偈頌戊寅錄

定價 金八拾錢

著作兼
發行者

佐々木鐵城

畿内縣大上郡南吉柳村大字開田今二五八番地

印刷者

藤澤淨圓

京都市下京區壬生川通五條下ル

印刷所

同朋舍

京都市下京區壬生川通五條下ル

不許
製複

發行所

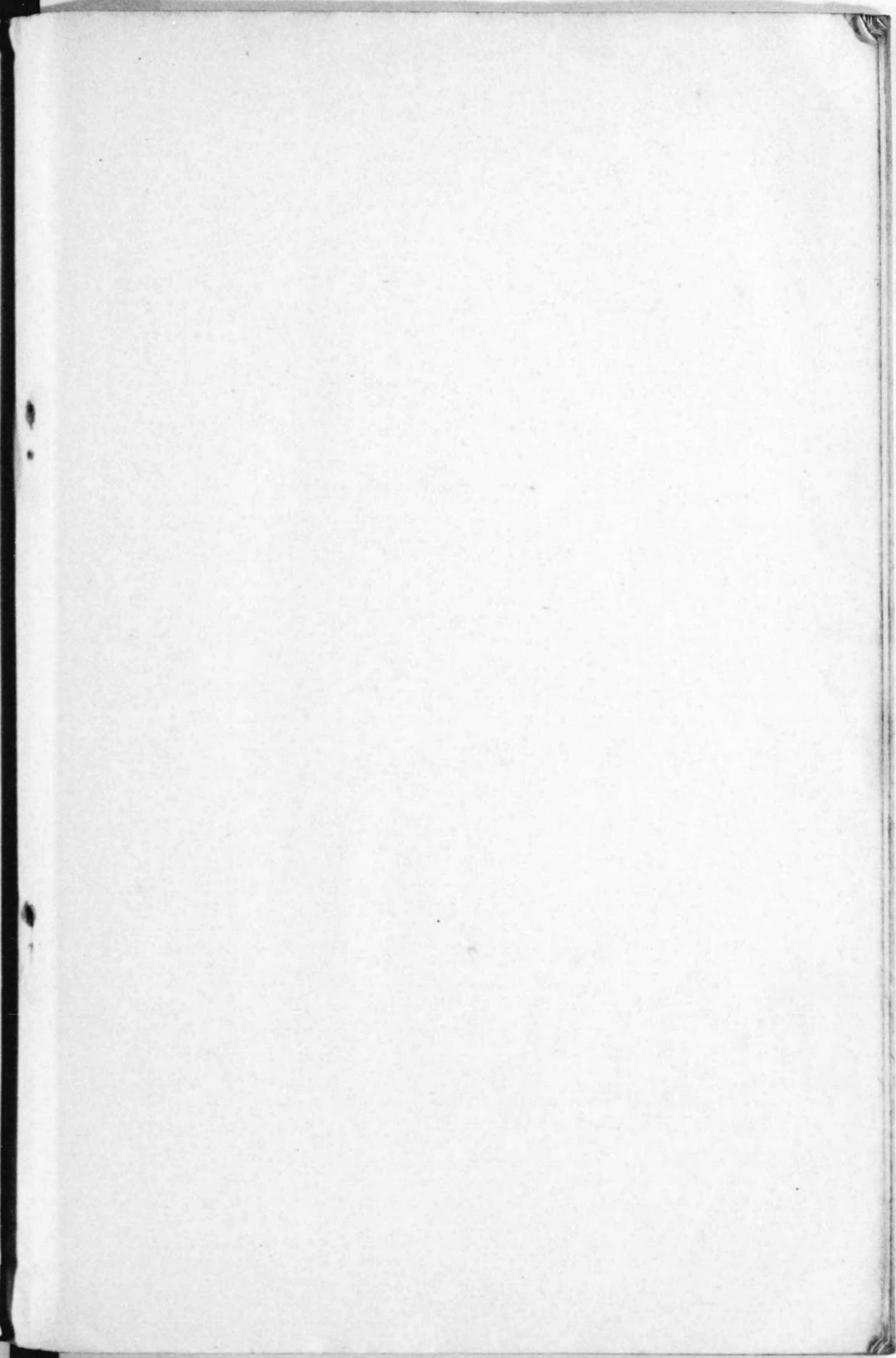
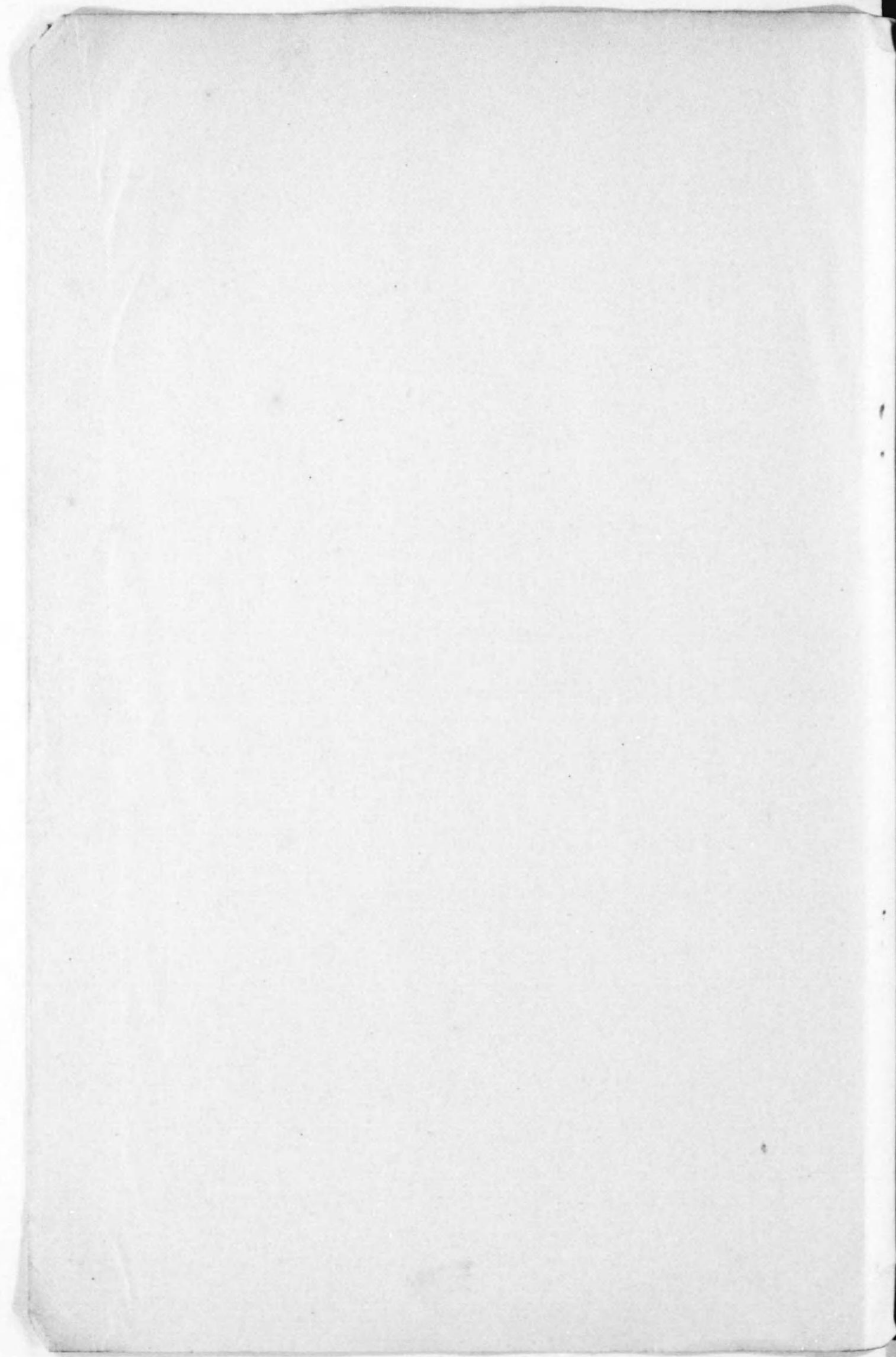
京都市油小路花屋町上ル
本願寺布教研究所内

響

流

社

振替 大阪八七二九八番



終